

長野県松本市

I D E G A W A M I N A M I

出川南遺跡

—第21次発掘調査報告書—

2014. 3

松本市教育委員会







第583号住居址 焼土・炭化材検出状況（東から）



同上 轡出土状況（北から）

例言

- 1 本書は、平成 25 年 4 月 22 日～平成 25 年 6 月 28 日に実施された、長野県松本市芳野 1018 番 1 に所在する出川南遺跡第 21 次調査の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、長野県による県営住宅南松本団地・市営住宅芳野町団地の集会所建設事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県より松本市が委託を受け、松本市教育委員会で発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、第Ⅲ章第 3 節 3：原田、その他：福沢が行った。
また今回、信州大学理学部地質科学科准教授の齋藤武士氏に考古地磁気測定をしていただく機会を得た。その結果を寄稿していただき、附編として炭化材同定とともに掲載した。感謝の意を表したい。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記 内田和子、佐々木正子、中澤温子、洞沢文江
遺物保存処理・接合復元 荒井留美子、内田和子、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江
遺物実測・トレース・版組み (土器) 柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、八板千佳、安田津由紀
(金属器) 内田和子、洞沢文江 (石製品) 原田健司
遺構図整理・トレース・版組み 村山牧枝
写真撮影 (遺構) 福沢佳典
(遺物) 宮嶋洋一
編集・総括：福沢佳典
- 5 竪穴住居址については出川南遺跡第 1 次調査から通して番号を付し、その他の遺構については本次調査で 1 号から番号を付している。
- 6 本書で用いた略記は次のとおりである。
第○号住居址→○住、土抗○→土○、ピット○→P○
また、単独のものは「P1」、住居址付属のものについては「P1」のように記し区別した。
- 7 図中で用いた方位記号は真北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。また、標高・水平基準は東京湾平均海水面水準(T.P.)である。
- 8 土層色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
- 9 本書では以下のものをスクリーントーンで表した。
遺構：焼土・被熱範囲 、炭化物 、粘土 
遺物：黒色処理 
- 10 遺構図は S = 1/80 で掲載した。遺物図は、土器：S = 1/4、鉄製品：S = 1/2、石製品 S = 1/5 で掲載した。
- 11 土器実測図において、断面白抜きは土師器・黒色土器、断面黒塗りは須恵器とした。
- 12 遺構・遺物の記述で用いた古墳時代後期～古代の土器の種別・器種・時期区分等は、次の文献による。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 4－松本市内その 1－総論編』
松本市教育委員会 1994 『出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群緊急発掘調査報告書』
- 13 本調査における出土遺物、測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、松本市考古博物館(〒399-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に保管・収蔵されている。

目次

例言

目次

第Ⅰ章 調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第1節 調査経過

第2節 調査体制

第Ⅱ章 遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第1節 地理的環境

1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観

2 発掘調査地点の地形・地質

第2節 歴史的環境

第3節 過去の調査成果

第Ⅲ章 調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第1節 調査の方法

第2節 遺構

1 概要

2 竪穴住居址

3 土坑・ピット

第3節 遺物

1 土器

2 金属器

3 石器

第Ⅳ章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

附編

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査地の位置と周辺遺跡 (S=1/25,000)	6
第2図	過去の調査地点 (S=1/10,000)	8
第3図	遺跡西半部における過去の調査区 (S=1/2,500)	10
第4図	発掘調査の範囲 (S=1/200)	12
第5図	調査区全体図 (S=1/200)	13
第6図	調査区の土層模式図	13
第7図	遺構 (1)	18
第8図	遺構 (2)	19
第9図	遺構 (3)	20
第10図	土器 (1)	27
第11図	土器 (2)	28
第12図	土器 (3)	29
第13図	土器 (4)	30
第14図	金属器	32
第15図	石器	33
第16図	出川南遺跡の竪穴住居址規模	35

表目次

第1表	過去の調査成果一覧	9
第2表	竪穴住居址一覧	17
第3表	土坑・ピット一覧	17
第4表	土器観察表	25
第5表	金属器観察表	32
第6表	石器観察表	33
第7表	市内耳環出土遺跡一覧	35
第8表	市内馬具出土遺跡一覧	36

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査経過

出川南遺跡は松本市街地の南、双葉から芳野地区に広がる遺跡である。昭和 61 年に第 1 次発掘調査が行われて以来、これまで 23 次にわたる調査が実施されている。今回報告する第 21 次調査は、長野県住宅課による県営住宅南松本団地・市営住宅芳野町団地の集会所建設事業に伴う緊急発掘調査である。

本調査地点は平成 22 年 1 月 26・27 日に試掘確認調査を実施した。その後計画変更により、平成 25 年度に発掘調査を行ったものである。

平成 25 年 4 月 4 日付で、文化財保護法第 94 条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書が長野県教育委員会に提出された。今回の事業地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である出川南遺跡に該当しており、事業地周辺においても緊急発掘調査が行われていることから、埋蔵文化財を包蔵していることが予想された。松本市教育委員会では、建設工事の際に遺跡が破壊される恐れがあるため、4 月 16 日に出川南遺跡に関わる保護意見書を長野県教育委員会教育長に提出し、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査実施の通知を受けた。その後、事業者である長野県住宅課と協議を行い、発掘調査及びこれに係る事務処理については松本市教育委員会が実施することとし、長野県と松本市の間に平成 25 年 4 月 19 日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成 25 年 4 月 22 日～平成 25 年 6 月 28 日に実施した。調査期間中の 6 月 1 日に地元町会を対象として現地説明会を実施した。調査終了後、平成 25 年 7 月 10 日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また、7 月 3 日、埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、平成 25 年 7 月 31 日付で長野県教育委員会教育長より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。それを受け、平成 26 年 1 月 23 日に出土文化財譲与申請書を長野県教育委員会に提出し、2 月 3 日に出土文化財の譲与についての通知を受け、2 月 10 日付で出土文化財の受け入れを行った。

第 21 次発掘調査に係る文書記録等は以下のとおりである。

平成 22 年度

12 月 17 日「県営住宅・市営住宅集会所建設に伴う出川南遺跡の保護について」

1 月 26・27 日 試掘確認調査実施

平成 23 年度

2 月 8 日「芳野町県営住宅集会所の建設にかかる保護協議」

平成 25 年度

4 月 4 日「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」

4 月 16 日「出川南遺跡に関わる保護意見書」

「出川南第 21 次発掘調査にかかる打ち合わせ事項」

4 月 18 日「埋蔵文化財発掘調査実施について」

4 月 19 日「土地所有者の承諾書」

4 月 19 日「発掘調査業務の委託契約」

4 月 22 日～6 月 28 日 出川南遺跡第 21 次発掘調査実施

7 月 3 日「埋蔵物発見届」

「埋蔵文化財保管証」

7 月 10 日「発掘調査終了報告書」

7月31日「文化財の認定及び県帰属について」

1月23日「出土文化財譲与申請書」

2月3日「出土文化財の譲与についての通知」

2月10日「出土文化財の受け入れ」

出土遺物及び測量図・写真等の調査記録の整理作業と本報告書の作成作業は、現場作業に引き続き松本市立考古博物館において行い、本書の刊行に至る。

第2節 調査体制

調査団長：吉江 厚（松本市教育長）

（発掘調査）

調査担当者：福沢佳典、石川真理子

発掘協力者：今井文雄、加藤朝夫、小林和由、坂口ふみ代、清水陽子、関谷昌也、茅野信彦、鳥井和幸

（報告書刊行）

報告書作成：福沢佳典、原田健司

調査員：宮嶋洋一

整理協力者：荒井留美子、内田和子、柏原佳子、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江
村山牧枝、八板千佳、安田津由紀

事務局：松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、竹原学（同係長）、櫻井了（主査）

百瀬耕司（主任）、柳澤希歩（嘱託）



←発掘調査風景



発掘調査団→

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

1 出川南遺跡付近の地形・地質の概観

出川南遺跡が立地する付近一帯は、古くは広い畑地で小麦・桑が栽培されていた。第2次世界大戦末の工場疎開による工業団地造成、南松本駅新設により、土地の削平、平坦化、客土が行われ、その様相を一変させた。戦後、食糧不足・食料増産のため土地造成が行われ広く水田化した。昭和38年の国道19号線の開通に伴い商業地及び宅地として市街地化が著しい。そのため現在では、原地形の確認は困難である。

遺跡周辺の標高は593～598mで、東方約500mに田川、西方約2200mに奈良井川が北流するため、南から北に向かってわずかに低くなっていく。地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する合流扇状地の末端に位置しており、調査地の北方ないし東西方約500mには多くの湧水がみられ、特に北方の穴田川・頭無川沿いは沼沢性の沖積地である。調査地周辺でも地下水位は2.2～6.9mが報告されている。

過去の調査成果からは、基底礫層は奈良井川系統（古生層系統）で共通しており、調査地点によって上層の堆積層が田川・牛伏川系統と奈良井川系統に分けられる。これらの氾濫や乱流により複雑な堆積状況を呈し、砂礫層の間には雨水・小流により洗い出された砂質土・粘質土の間層が形成され、遺跡が立地する面となる。出川南遺跡第1・6・8・15・17・19・20・22・23次調査地点で複数枚の遺構面が確認されており、下層に弥生時代から古墳時代前期、上層に古墳時代後期～平安時代もしくは中世の遺構が確認されることが多い。

2 発掘調査地点の地形・地質

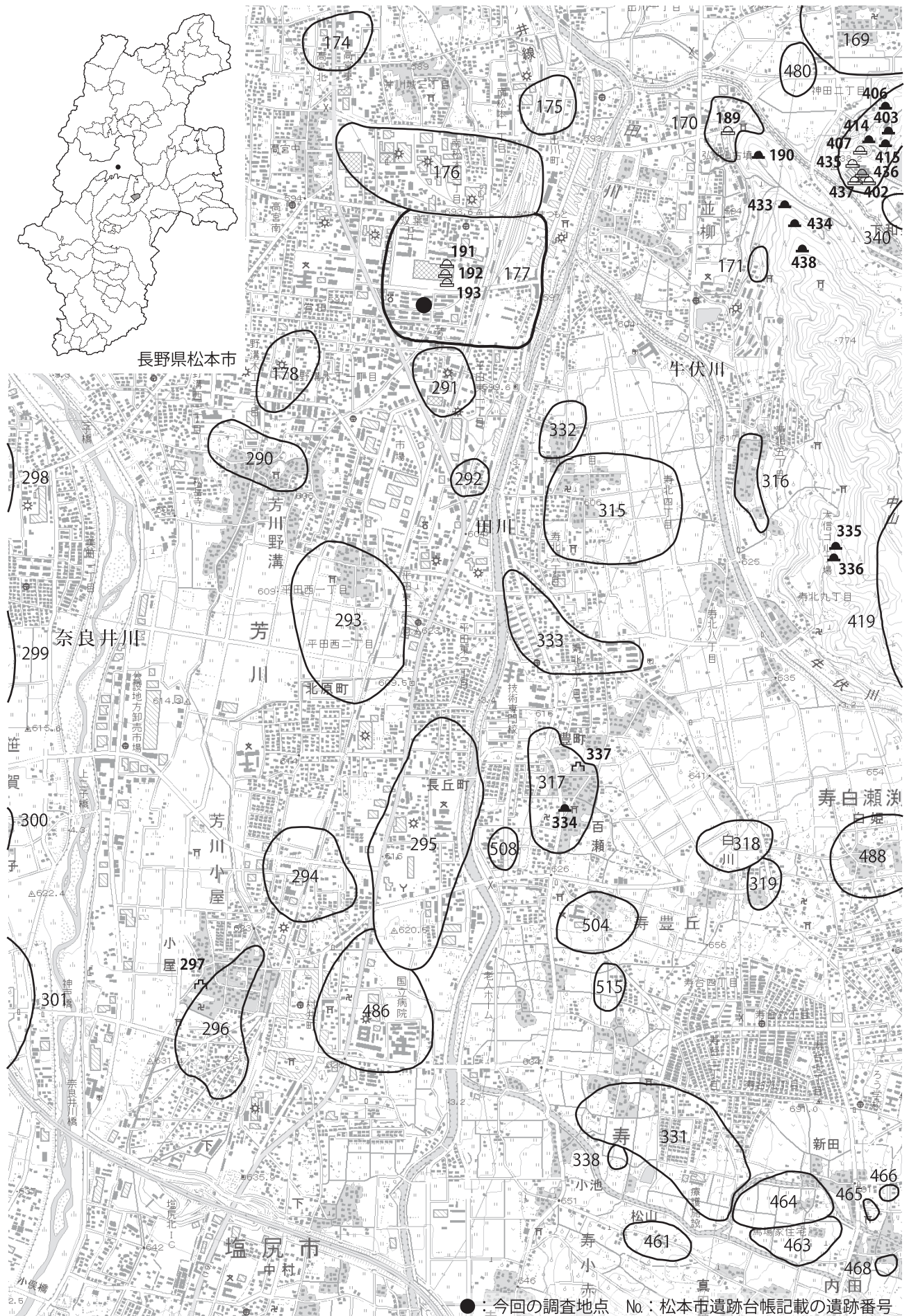
今回の発掘調査地点は松本市芳野1081番1にあり、県営住宅南松本団地の敷地内である。第13次調査地点の北に位置し、付近の標高は596.8m前後である。調査開始時は、旧県営住宅B3号棟解体後、長らく更地となっており、現地表面では微地形は確認できない。上述のように、調査区周辺は複雑な堆積状況であるが、調査区の土層模式図（第6図）および調査区壁面の観察から調査区の土層堆積状況は述べる。

現地表面から概ね約0.5mまで現代の造成土・攪乱層である。深いところでは約1mまで達し遺構を破壊している。特に、調査区の北側においては、旧県営住宅の攪乱が深さ約1.5m以上まで達していることが確認され、住居址の床面より深い。

現代の造成土・攪乱層の下には暗灰黄～黒褐色シルト層（第2層）が堆積する。遺物は少量の古墳～平安時代の土器が含まれる。同様の土層は、周辺の過去の調査区においても確認でき、広い範囲に堆積することがわかっている。おそらく平安時代以降の、洪水の洗い出しなどに伴う自然堆積層と推測される。この層と下の第3層の間には褐鉄が多量に沈着する面がある。第3層は黒褐～暗オリーブ褐色シルト層で、多量の土器片が含まれ、古墳時代後期～奈良時代の遺物包含層と判断した。第3層上面が遺構面と考えられるが、褐鉄の沈着により遺構検出が困難であるためやや掘り下げて、現地表面から概ね0.8mを遺構検出面と設定した。なお、遺構検出面は北東に向かって約0.3m低くなっていくが、上層に近代以降の耕作に伴うと考えられる灰白色粘質土層が堆積していたためである。

遺物包含層の第3層より下は、暗灰黄色シルト層（第4層）、黄灰～暗灰黄シルト層（第5層）と、細砂が混入するしまりが弱い層が堆積する。その下はしまりが強い暗灰黄色弱粘質土層（第6層）をはさみ、黒褐色細砂層（第7層）に達する。第7層には雲母片が多量に含まれている。第4層より下には遺物はほとんど含まれず、自然堆積層と考えられる。

また、調査区北東隅のトレンチでは、深さ約1.5mまで攪乱が達している。これは旧県営住宅の基礎部分にあつているためであるが、その下に厚さ約0.05cmの灰オリーブシルト層（第8層）が残存し、約1.6mで砂礫層（第9層）へと変わる。周辺一帯の基底礫層と考えられ、調査地周辺ではこれより下には遺物包含層は確認されていない。



第1図 調査地の位置と周辺遺跡(S=1/25,000)

遺跡地図掲載遺跡

遺跡名：169 神田 170 平畑 171 山行法師 174 高宮 175 出川 176 出川西 177 出川南 178 五輪 290 野溝
291 平田北 292 平田 293 平田本郷 294 小原 295 高畑 296 小屋 298 下二子 299 中二子
300 上二子 301 神戸 315 竹渕 316 瀬黒 317 百瀬 318 白川 319 野田 331 小池 332 竹渕南原
333 向原 340 生妻 461 松山 463 エリ穴 464 一ツ家 465 くねの内 466 八幡原 468 長泉寺
480 神田西 486 村井 488 白姫 508 寿南久保 504 百瀬南 515 北起こし

古墳名：189 平畑1号 191 平田里1号 192 平田里2号 193 平田里3号
419 中山古墳群 190 弘法山(中山48号) 402 中山31号 403 中山32号 406 中山35号
407 中山36号(仁能田山) 414 中山58号 415 中山59号 433 中山北尾根1号 434 中山北尾根2号
435 棺護山1号 436 棺護山2号 437 棺護山3号 438 中山北尾根3号
334 耳塚 335 長峰下1号 336 長峰下2号

城館址：297 小屋城址 337 百瀬の陣屋 338 小池砦址

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には数多くの遺跡が立地し、田川右岸、田川と奈良井川に挟まれた地域、奈良井川左岸の大きく3つの遺跡群に分けられる。

縄紋時代は、田川・奈良井川間の地域では現在、遺構・遺物は確認されておらず、田川右岸および奈良井川西岸では遺跡が確認されている。特に田川右岸の山寄りの地域では、百瀬遺跡第2次調査で早期の押型紋土器と若干の土坑が確認されている。その後、小池、一ツ家遺跡は中期、エリ穴遺跡は晩期に多量の耳飾りが出土する大規模集落が営まれている。

弥生時代中期以降になると、百瀬、竹渕、竹渕南原遺跡で規模の大きな集落が営まれる。中でも百瀬遺跡は、弥生時代中期末の百瀬式の標識遺跡として著名である。田川・奈良井川間の地域においても中期前葉～中葉に出川、出川西、平田北遺跡で遺物・遺構が確認されており、この地域の開発の初源といえる。後半になると、出川南遺跡でも住居址や遺物が確認され始め、墓域が形成されていた可能性もある。

古墳時代前期には、高宮遺跡で弥生時代後期後葉の箱清水式の名残を残すような甕や、東海系のパレス壺が出土しており、出川南遺跡でも東海系の古墳前期の土器や住居址が出土している。東方約1.5kmの中山丘陵突端には前期の前方後方墳である弘法山古墳が築かれており、この地域一帯が造営集団の主力と考えられ、出川西・出川南遺跡に母体集落があったと考えられる。

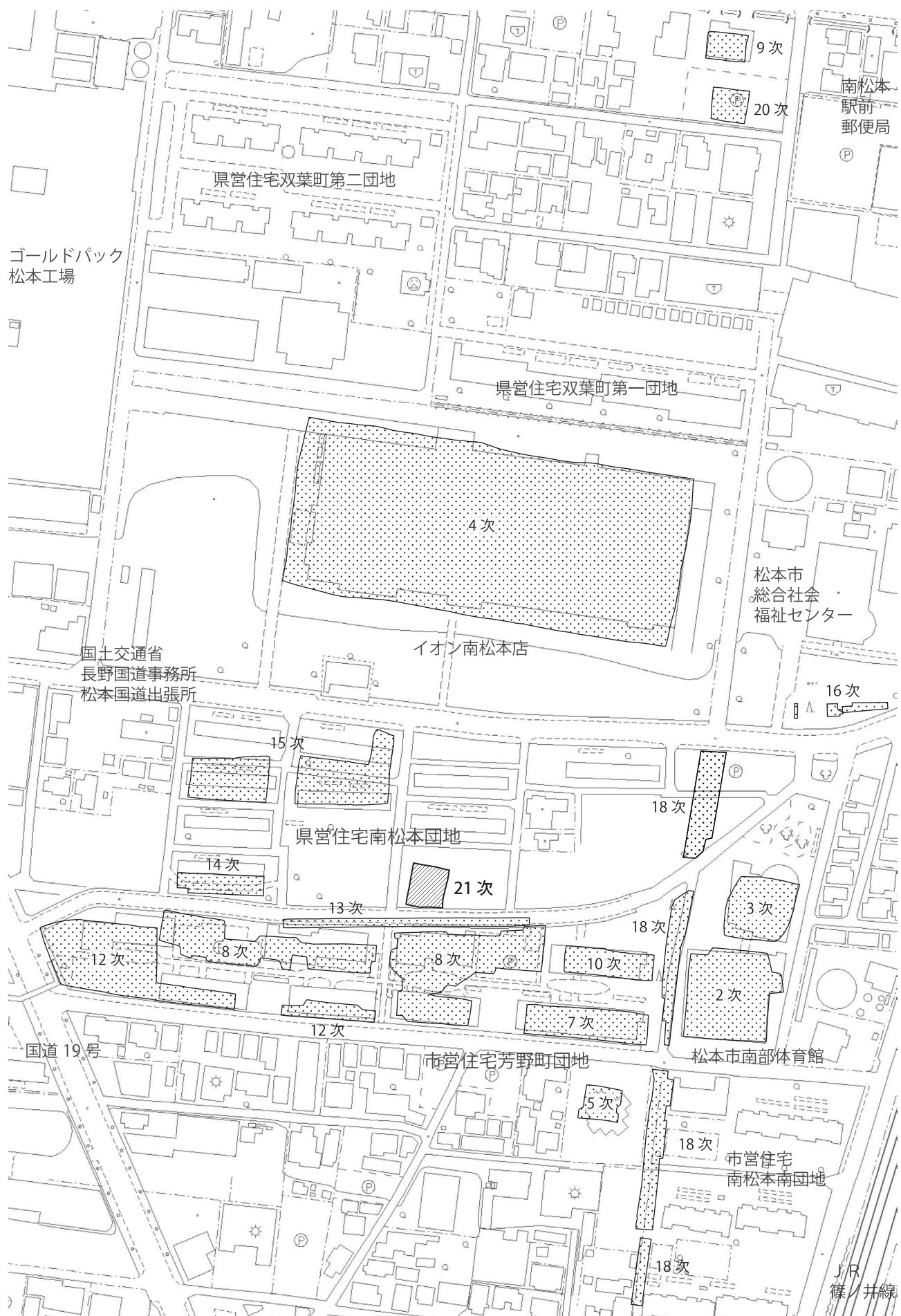
中期になると、出川西遺跡で住居址2軒、配石遺構が7基、土器集中地点が19カ所確認されている。北東に位置する高宮遺跡でも土器集中地点が15カ所確認されている。ミニチュア土器や玉類、模造石製品、鉄鏃・鉄剣などが出土しており、これらはほとんど掘り込みを持たないような浅い凹地状地形の縁や底面に置かれている。また、土器群によっては高杯のみで構成されており、廃棄跡ではなく祭祀遺構と考えられる。該期の住居址も3軒確認されているが、この一帯が祭域として使用されていた段階があるようである。また、出川南遺跡第4次調査地点では平田里古墳群(1～3号古墳)の円墳3基が調査されている。1号古墳は5世紀後半～6世紀初頭と考えられ、周溝から出土した多量の円筒埴輪・形象埴輪と馬具類は県内でも貴重な資料である。後期は、出川南遺跡で大規模な集落が営まれ、松本市内でも最大規模の集落跡である。

奈良時代になると、出川南遺跡の南側から平田北遺跡にかけて集落が展開する。古墳時代後期に比べると規模が縮小しているようであり、平安時代前期以降になると、出川南、平田本郷遺跡、さらに南では小原、吉田川西遺跡など拠点的な集落が拡散・立地し始める。これらは交通の要衝に位置するようになったためと考えられ、中世に続く集落も存在する。

第1表 過去の調査成果一覧

調査次	実施年度	面積	調査成果	備考
1	昭和61年 (1986)	1325㎡	住居址5(弥生後期1、古墳前期1、平安前期1、平安後期1) 掘立柱建物址1、竪穴状遺構1、土坑1、溝4	遺構面2枚 上が平安、下が弥生後期～古墳前期
2	昭和63年 (1988)	1715㎡	住居址1(古墳後期) 土坑26、ピット61、溝1	
3	平成元年 (1989)	900㎡	住居址6(古墳後期～平安前期)	
4	平成3年 (1991)	14688㎡	住居址116(古墳後期113、平安前期2、平安後期1)、掘立柱建物址21 柱列2、土坑7、ピット多数、溝11	平田里1～3号古墳(中期古墳)も調査
5	平成10年 (1998)	281㎡	住居址11(古墳後期1、奈良1、平安前期5) 土坑6、ピット11	
6	平成10年 (1998)	1486㎡	住居址4(弥生後期前半3、古墳後期1) 竪穴状遺構2、掘立柱建物址3、土坑3、ピット55、溝6	遺構検出面2枚 上が古墳後期以降、下が弥生後期
7	平成10年 (1998)	867㎡	住居址50(古墳後期～奈良11、平安前期39)、掘立柱建物址1 土坑175、ピット13、溝2、遺物集中2	
8	平成11年 (1999)	3293㎡	住居址48(古墳後期7、奈良～平安23)、掘立柱建物址1 土坑144、溝1、遺物集中2(古墳中期)、自然流路2	遺構検出面2枚 上が古墳後期以降、下が古墳時代中期
9	平成11年 (1999)	240㎡	住居址2(古墳後期) 土坑4、ピット7、遺物集中2(古墳前期)	
10	平成11年 (1999)	560㎡	住居址4(平安前期) ピット5、溝1	
11	平成13年 (2001)	188㎡	住居址3(弥生後期1、平安後期2) 土坑7、ピット234、溝1、	
12	平成13年 (2001)	2197㎡	住居址13(古墳後期1、奈良10、平安2) 土坑34、ピット70	
13	平成14年 (2002)	25㎡	住居址2(時期不明2)	トレンチ調査
14	平成19年 (2007)	383㎡	住居址2(古墳後期2)、掘立柱建物址2 土坑9、ピット11、溝状遺構5	
15	平成21年 (2009)	1839㎡	住居址15(古墳後期2、奈良4、平安前期9) 土坑29、ピット39、溝状遺構8、石積遺構1基	
16	平成23年 (2011)	89㎡	溝2条(近世～近代)、古代以降の氾濫原	現在整理作業中
17	平成22・23年 (2010・11)	4624㎡	住居址106(弥生中期32、古墳54、奈良～平安16、中世4)、 掘立柱建物址7、竪穴状遺構4、土坑・ピット多数、 埋葬施設38(縄文晩期～中世)、溝状遺構29	現在整理作業中 遺構面2枚 上が古代～中世、下が弥生～古墳
18	平成24年 (2012)	2362㎡	住居址70、掘立柱建物址12 土坑222、ピット151、溝状遺構7	現在整理作業中 古墳時代前期～平安時代前期の遺構を確認
19	平成24年 (2012)	158㎡	住居址1(弥生) 土坑8、ピット2、火葬墓1、溝状遺構3	現在整理作業中
20	平成24年 (2012)	502㎡	住居址9(古墳中期3軒、古墳後期6)、掘立柱建物1 土坑・ピット多数、溝3	現在整理作業中 遺構面2枚 上が古墳中～後期、下が弥生中期
21	平成25年 (2013)	341㎡	住居址12(古墳後期～奈良) 土坑1、ピット8	本報告
22	平成25年 (2013)	616㎡	住居址20(弥生～平安)、掘立柱建物址1、竪穴状遺構5 土坑・ピット約35、溝状遺構17	現在整理作業中 一部遺構面2枚 上が古代～中世、下が弥生～古墳
23	平成25年 (2013)	428㎡	住居址7(古墳前期～平安)、掘立柱建物址1 土坑・ピット約80、溝状遺構16	現在整理作業中 一部遺構面3枚、古墳前期～平安の住居址を確認。

- 松本市教育委員会 1987 『松本市文化財調査報告No.53 松本市出川南遺跡－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 1989 『松本市文化財調査報告No.75 松本市出川南B遺跡－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 1994 『松本市文化財調査報告No.115 松本市出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 1999 『松本市文化財調査報告No.139 松本市出川南遺跡Ⅴ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2000 『松本市文化財調査報告No.147 松本市出川南遺跡Ⅵ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2006 『松本市文化財調査報告No.157 松本市出川南遺跡Ⅷ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2000 『松本市文化財調査報告No.148 松本市出川南遺跡Ⅸ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2002 『松本市文化財調査報告No.161 松本市出川南遺跡Ⅺ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2002 『松本市文化財調査報告No.158 松本市出川南遺跡Ⅻ－緊急発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2009 『松本市文化財調査報告No.198 松本市出川南遺跡－第14次発掘調査報告書』
 松本市教育委員会 2011 『松本市文化財調査報告No.207 松本市出川南遺跡－第15次発掘調査報告書』



第3図 遺跡西半部における過去の調査区 (S=1/2,500)

第三章 調査成果

第1節 調査の方法

調査区の設定 調査対象地は、以前に県営住宅B3号棟が建っていた場所を含み、建て替えのための解体後、長らく更地となっていた。試掘調査を行った結果、竪穴住居址のカマドと考えられる被熱面や、多量の土器片が出土し、埋蔵文化財の存在が確認された。また、北側は県営住宅B3号棟で攪乱されており、遺構が残存する可能性は低いと考えられた。そのため、建築予定地の南側を中心に調査区を設定することとし、建物基礎と周囲の雨水渠・集水柵の部分を含めて、掘削範囲を約1～2m広げて調査区を設定した。調査面積は341㎡で、遺構面は1面である。

発掘手順 大型建設用機械バックホウにより西縁に沿ってトレンチを設定し掘削、土層の堆積状況を確認した。その結果、地表下約0.8mを遺構検出面とし、面的な掘り下げを行った。その後人力により遺構検出を行い、調査区一面に竪穴住居址を検出した。北側は旧県営住宅の攪乱が深くまで達し、遺構は検出できなかった。遺構検出後は、写真撮影・図面記録を行い、個別の掘削調査を行った。

遺構番号は、遺構の種類毎とし、竪穴住居址は出川南遺跡第1次調査からの通し番号を付し、その他の遺構は今回の調査で1号から通し番号を付した。掘削調査時に、土層観察などの所見から遺構ではないと判断できたものは、遺構番号を欠番とした。

各遺構の調査終了後、完掘状況の調査区全景写真を撮影し、バックホウにより埋め戻しを行い、調査を終了した。発掘調査期間は平成25年4月22日～平成26年6月28日である。

測量 測量は、調査区の西側（BM2）と北東隅（BM3）に基準点を設定し、これをもとに調査区内に3mグリッドを設定した。X・Y軸は世界測地系平面直角座標に基づき設定し、座標値は任意のものとした。基準とした2点の世界測地系平面直角座標は以下のとおりである。

BM2 : X=23051.734 Y=-48103.272

BM3 : X=23065.230 Y=-48082.099

平面図はこれをもとに、簡易遣り方測量により作成し、部分的に光波測距儀を併用した。平面図・断面図は原則S=1/20で作成し、詳細図が必要なものはS=1/10で作成した。

出土遺物のうち、遺構の覆土上層のものは、住居址など大きな遺構は4分割した区画毎に、出土位置が把握できるように一括で取り上げ、下層および床面直上出土のものは詳細出土状況図を作成し、標高を記録し取り上げた。

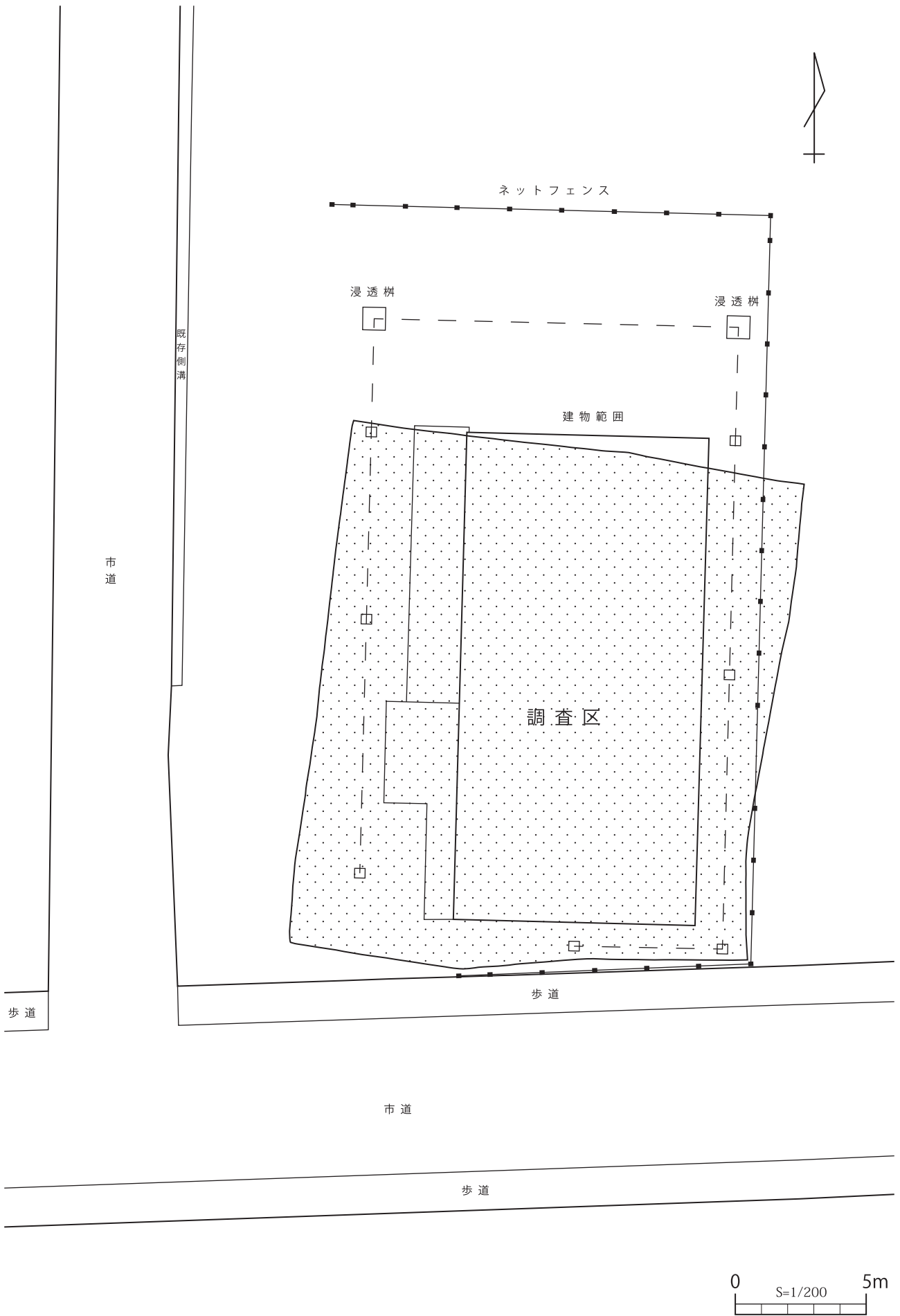
写真記録 調査区全景、土層・遺構の状況、遺物出土状況等は、35mm一眼レフカメラ（リバーサル、白黒フィルム）とデジタルカメラで撮影した。

整理作業 発掘作業に並行して写真・図面等の整理を行った。図面類は平面図・土層断面図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはトレース作業を行った。

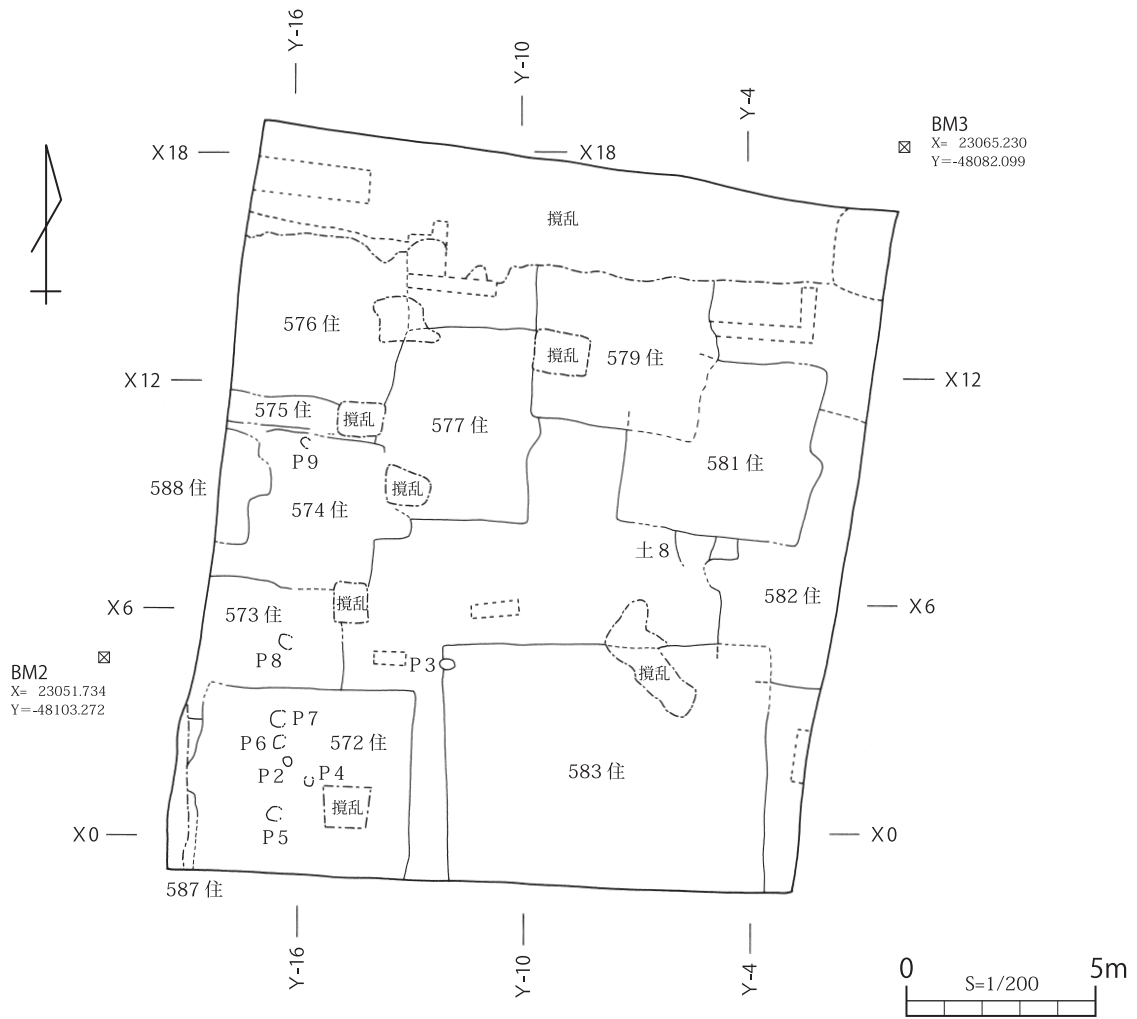
遺物は洗浄・クリーニングを行った後、土器は洗浄後に注記（遺跡名、調査次、通し番号、帰属遺構等）を行い、石器・金属器は台帳登録を行った。この後、遺構単位で接合作業を行い、遺存度の良好なものと特徴的の遺物について実測・トレースを行った。

576・583住採取の炭化材試料について、整理後にパリオ・サーヴェイ株式会社に樹種同定および放射性炭素年代測定を依頼した。

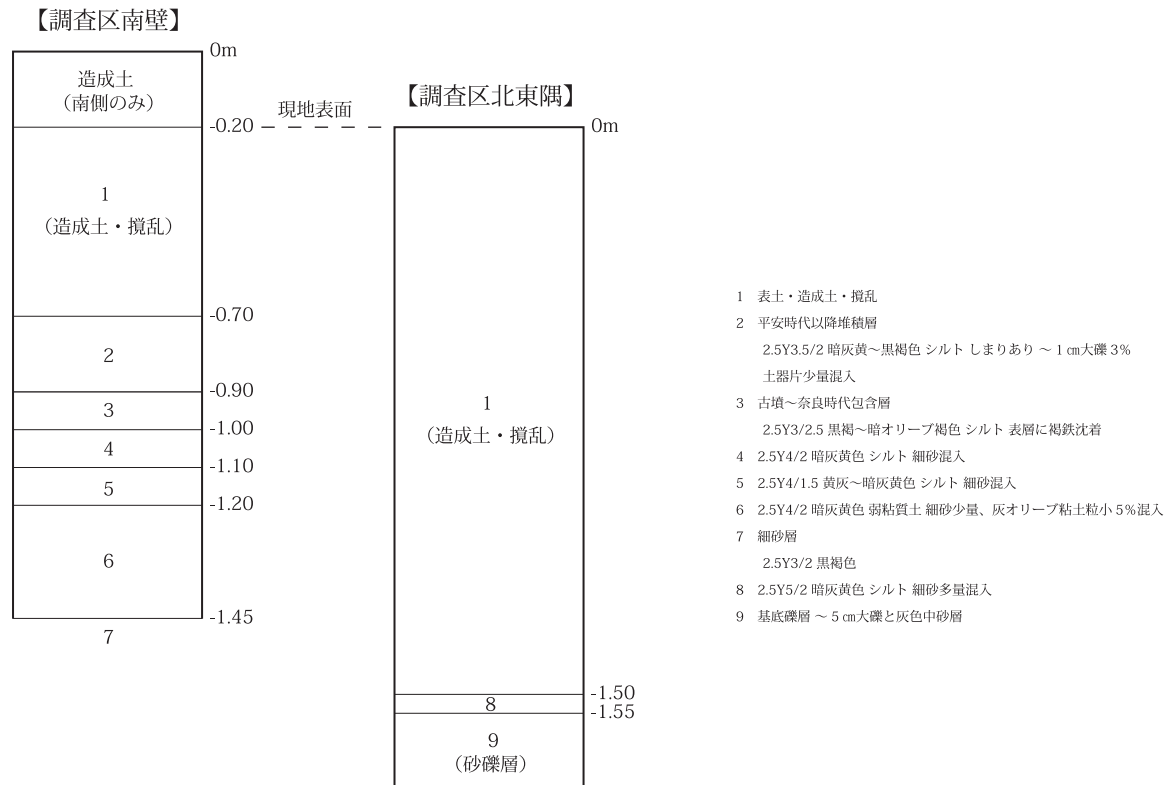
調査成果 発掘と整理作業の結果、竪穴住居址12軒（古墳時代後期～奈良時代）、土坑1基、ピット8基が確認された。その概要は、第2・3表および巻末の発掘調査報告書抄録に掲載している。



第4図 発掘調査の範囲 (S=1/200)



第5図 調査区全体図 (S=1/200)



第6図 調査区の土層模式図

第2節 遺構

1 概要

今回の調査では、古墳時代後期から奈良時代前期の竪穴住居址を12軒確認した。古墳時代後期が9軒(572・573・575・576・577・579・582・583・587住)、奈良時代が3軒(574・581・588住)である。狭い調査面積ながらも一面に住居址が重複し、遺構密度は高い。ただし、土坑・ピットは少なく、掘立柱建物址を構成するものはなかった。土坑・ピットは、遺物の出土が少なく性格を明らかにできるものは少ない。ピットについては、いずれも住居址を切るため、平安時代以降の可能性が高い。また、今回の調査範囲内では自然流路や洪水痕跡を含む溝状遺構は確認できなかった。今回の調査で検出した竪穴住居址の掘り方内部には複数のピットを確認したが、調査期間の都合上、位置関係の記録にとどまり掘削調査ができなかったものもある。

また、竪穴住居址の年代については次節で詳しく述べるが、各遺構の文末に年代だけ記載した。

2 竪穴住居址

(1) 第572号住居址

調査区の南西隅に位置する。南側が調査区外に続き、西側のカマドの一部が攪乱されるが、ほぼ全形が明らかで方形を呈する。カマドは西壁中央に位置する。被熱面は弱く、被熱礫の出土もない。被熱面の周囲は浅いくぼみ状になっており焼土・炭化物粒が分布する。周辺からは土師器甕類がまとまって出土している。明確な貼床や硬化面は確認できないが、住居内ピットは5基確認された。位置関係からP3～P5が柱穴と考えられる。4本支柱の住居址と考えると、P3の南にもう1基推測されるが、その地点には572住床面よりやや浅いくぼみ状となり、被熱面が確認された。遺物の出土は少なく、調査区南壁の土層観察でも明確な切り合いは確認できなかったため、この被熱面を伴うくぼみが本址に伴うものかの判断はできなかった。P1およびP2はカマド脇に位置し、焼土・炭化物粒が混じった覆土で埋まっているため、カマド関連のピットと推測される。

出土遺物の総量は9,680gである。床面直上の遺物はカマドがある西半に多く、覆土内の遺物は住居址の南半から多く出土している。住居址の年代は古代1～2期、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

(2) 第573号住居址

調査区の南西に位置する。西側が調査区外へ続き、南、北側がそれぞれ572・574住に切られる。カマドは確認できない。住居址内にP1・P2があるが、位置関係から柱穴とは考えにくい。明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は518gと少ない。時期を判別しうる良好な遺物がなく、底部へラ切りの須恵器杯A(第10図11・12)より古代1～2期、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。また、黒色土器椀A(第10図13)や、図化はできなかったが古代6～7期に属する底部回転糸切りの須恵器杯Aが出土している。本址から572住にかけて確認できなかった該期の遺構があった可能性が高い。

(3) 第574号住居址

調査区の中央西壁寄りに位置する。土層断面の検討の結果、573・575・577住を切り、588住に切られる。カマドは東壁中央に位置し、短く煙道が残る。被熱面は弱く、構築礫も確認できない。ただし、覆土中から床面近くにかけて、被熱礫が多量出土し、廃棄もしくは一時保管されていたものであろうか。住居内ピットは6基確認でき、P1・P2・P5・P6が並ぶが、深さ10～20cmとばらつきがある。明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は4,248gである。床面直上から出土した遺物は少ないが、須恵器杯B(第10図14)や、台石(第15図5)の直上から出土した土師器甕(第10図17)などがある。カマドからの出土は少なく、覆土中からも全体的にまばらである。出土遺物から古代2期、8世紀前葉と考えられる。

(4) 第575号住居址

調査区の中央西壁寄りに位置する。西側が調査区外に続き、大半を576住に切られるため、全形は明らかではな

い。カマドは確認できず、住居内ピットや明確な貼床は確認できない。

出土遺物の総量は122gと少なく、時期判別に良好な資料は得られなかったが、切り合い関係などから古墳時代後期に属すると考えられる。

(5) 第576号住居址

調査区の北西に位置する。西側が調査区外に続き、北側は旧県営住宅の攪乱が床面より深く達するため、北壁の立ち上がりは確認できなかった。575住を切り、577住に切られる。

覆土下層に焼土・炭化材が出土し、焼失住居と考えられる。炭化材は残りが良く、南北方向の棟木、放射状に組まれた垂木を観察でき、焼失後に屋根が焼け落ちたものと推測される。なお、炭化材の一部をサンプルとして採集し、化学分析を行った。炭化材の樹種同定は附編を参照されたい。

カマドは明確なものが確認できなかったが、焼失に関わるものを除外すると、北西隅に弱い被熱面、南東隅に礫集中と構築粘土を確認できる。南東隅の礫集中の内から、台石(第15図4)が出土している。また、重複関係にある577住の北西隅から576住にかけて被熱面が広がっており、この被熱面が576住に伴うものであれば、被熱の程度からもカマドである可能性が高い。棟木の方向は南北方向であるため、計測表には棟木方向を測定し記載してある。住居内ピットは5基検出されたが、位置関係からいずれも柱穴とは考えにくい。明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は5,374gである。床面直上から出土した遺物は土師器杯(第11図20・21)、須恵器杯(第11図23)があり、いずれも完形に近い。20は逆位で置かれた状態で、21・23は焼け落ちた炭化材の下から出土している。覆土中からも全体的に偏りなく遺物が出土している。これらの出土遺物から、出川南3段階、7世紀中葉と考えられる。

(6) 第577号住居址

調査区の北西部に位置する。576住を切り、574・579住に切られる。検出時には北側が攪乱によりプランがわからなかったが、截ち割りトレンチを設定し掘削したところ、攪乱下に北壁の立ち上がりを確認できた。カマドのある主軸に対し、直交軸が長い長方形を呈する。

カマドは東壁中央に位置し、被熱は弱く、周囲に被熱礫は確認できない。わずかに東壁より外に出る形態である。住居内ピットは4基あり、並びからP1～P3を柱穴と考え、掘削調査を行ったがいずれも6～20cmと浅い。明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は4,368gである。床面直上の遺物は少なく、カマドからは少量であるが土師器甕の破片が出土している。覆土中からは北半に多く遺物が出土している。遺物が少なく判然としないが、切り合い関係などから出川南3～4段階、7世紀中葉～後半と考えられる。

(7) 第579号住居址

調査区の北東部に位置し、北壁は攪乱され明らかではない。577住を切る。581住とも重複し、調査手順の誤りがあったが、出土遺物から本址が古い。カマドは西壁の北寄りに位置する。周囲に被熱礫の出土はなかった。住居内ピットは1基あり、P1は直径が約50cm、深さが23cmのやや大きめの穴である。カマドと逆側の東壁中央に位置し、壁面の一部に礫を並べたような状態が確認された。性格は不明である。明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は4,100gである。床面直上の遺物は少なく、カマド周辺から土師器壺・甕(第11図30・33)が割れた状態で出土している。また、須恵器杯(第11図31)は攪乱近くから出土しており、帰属にやや不安が残るが、本址出土品として掲載した。覆土中からは東半に遺物が多いが、南東隅のものには581住の遺物が含まれていると考えられる。出土遺物から、出川南3～4段階、7世紀中葉～後半と考えられる。

(8) 第581号住居址

調査区北東部に位置し、上述のように579・582住を切る。また、東壁は試掘トレンチ3にかかり、プラン検出

が困難だったため、582 住の床面近くでカマドと東壁プランを確認した。カマドは東壁中央に位置し、東壁からわずかに外へ出る形態である。周囲に被熱礫は確認できないが、上層にあった攪乱底面には被熱した礫が含まれており、当初は石組カマドであった可能性が高い。住居内ピットは4基あるが、柱穴とは考えにくい。また、南東隅に位置するピット2基は覆土に焼土・炭化物が混じるため、582 住のピットと判断した。明確な貼床・硬化面は確認できないが、本址中央からカマドにかけて炭化物がまとまっている。後述する582 住との関係もあるが、床面に何らかの植物質が置かれていた可能性もある。

出土遺物の総量は7,030 gである。床面直上の遺物は少ないが、底部へラ切りの須恵器杯A・B（第11図 35～38）が出土している。いずれも白色胎土で焼成は軟質である。古代2期、8世紀前葉と考えられる。

（9）第582号住居址

調査区の東壁寄り中央に位置し、大半が調査区外へ続く。581住・土8に切られ、583住を切る。カマドは西壁の南寄りに位置する。煙道が短く残るが、被熱礫は確認できない。床面直上に焼土・炭化物層が堆積するが、明確な炭化材は検出できなかった。焼失住居の可能性もあるが、廃絶後の片づけ行為と考えたい。住居内ピットは13基検出された。住居の大部分が調査区外へ続くため配置は確認できないが、P3・P9が対称の位置にあり、覆土も同質である。他の住居内ピットには焼土・炭化物粒が多く混じるのに対し、この2基には全く混入しないため、本址に伴うものではなく住居外の遺構の可能性もある。一部において、焼土・炭化物層の下に貼床が確認できる。特に、カマド前面部分に明確に残存する。

出土遺物の総量は9,048 gである。床面・カマドからの出土は少ない。床面近くの焼土・炭化物層までの覆土中からも多くの遺物出土し、カマドがある南側が特に多い。出土遺物から、古代1～2期、7世紀末～8世紀初頭と考えられる。

（10）第583号住居址

調査区の南東に位置する。検出時には住居址4軒の重複と考えていたが、トレンチを設定し掘削した結果、どのトレンチにおいても床面直上に焼土・炭化物層が堆積しており、1軒の焼失住居址と判明した。南側が調査区外に続くが、東西軸が8.6mの大型住居址である。582住・P3に切られる。

焼土層の堆積は特に東側から南側にかけて多く、特に南西隅の焼土層は良好な被熱と考えられる。炭化材は576住ほど顕著ではないが、放射状に組まれた垂木と推測される。南東隅の東壁際に沿って検出された炭化材などは屋根材以外のものかもしれない。ほぼ全面に検出された繊維状炭化物は、一部をサンプリングして化学分析を行った結果、建築材とは異なるものと考えられる（附編2参照）。掘削調査中の所見では焼土層→炭化材→繊維状炭化物の堆積であったが、これとは堆積順が異なる箇所もあり、一概に屋根材もしくは床面直上に置かれたものとの判断は難しい。

カマドは西壁の中央に位置する。カマド袖が残っており灰オリーブ色のシルト質粘土により構築されている。芯材に礫はない。住居内ピットは9基確認され、配置からP4・P6・P7・P8の4基が柱穴と考えられる。P5はP4・P6の中間に位置する少し小さめの穴である。P1からは土師器甕（第12図 69・75）がまとまって出土しており、柱穴以外の性格が考えられる。P2、P3は出土遺物や位置関係からカマドに付属するピットである。特にP2は須恵器甕（第13図 83）がまとまって出土している。床面のほぼ全面で硬化面が確認され、特にカマド前面部分が顕著である。

出土遺物の総量は38,272 gである。カマド周辺や床面直上の完形遺物も多いが、焼土・炭化材層の上、特に繊維状炭化物の上にも多くの遺物が出土している。繊維状炭化物の性格にも依るが、屋根材である場合は、一括廃棄が考えられる。そのより上層の覆土は、遺物がほとんど混じらない均質な土であり、人為か自然為にしても短期間で埋まったものと判断した。また、東壁際から耳環・馬具（第15図 14・15）などが出土している。これらの出土遺物から、出川南3段階、7世紀中葉と考えられる。

(11) 第 587 号住居址

調査区の南西に位置する。572 住と攪乱に挟まれた一部しか残っておらず、被熱面の存在から住居址と判断した。凶化できる遺物はなく、総量 592 g である。古墳時代後期と考えられる。

(12) 第 588 号住居址

調査区の西壁中央に位置する。西側が調査区外に続き 1 辺が約 3.3m の小型住居址である。土層観察から 574 住を切る。カマドは南東隅の壁から離れた位置に弱い被熱面を確認している。住居内ピットは 1 基で、明確な貼床・硬化面は確認できない。

出土遺物の総量は 702 g である。凶化できる遺物がないが、被熱面周辺から土師器甕 C が出土している。

3 土坑・ピット

検出した土坑・ピットは少ない。土坑 8 は 581 住に切られ、582 住を切る。出土遺物は少ない。また、P4～P9 はトレンチの土層観察で検出したもので、いずれも住居址を切るもので、覆土の観察からも平安時代以降と考えられる。中には柱痕を観察できるものもあるが、調査区内では掘立柱建物などを構成せず、性格は不明である。

第 2 表 竪穴住居址一覧

No.	平面形態	主軸×直交軸×深(cm)	カマド形態	本址より		時期	備考
	主軸方位			床面積(m ²)	位置		
572住	方形	571×(491)×47	被熱面	573・587住		7世紀末～ 8世紀初頭	
	N-87° -W	(27.3)	西壁中央	P2・4・5・6・7			
573住	方形か	(400)×(377)×35	未確認			7世紀末～ 8世紀初頭	
	N-89° -W	(10.2)		572・574住、P8			
574住	方形	(425)×413×35	被熱面	573・575・577住		8世紀前葉	短く煙道残る。礫を廃棄した住居か。
	N-98° -E	(12.7)	東壁中央	588住、P9			
575住	不明	(297)×(91)×31	未確認			古墳後期	遺物少なく不明。
	N-82° -W	(2.5)		574・576・588住			
576住	不明	(442)×(425)×42	未確認	575住		7世紀中葉	焼失住居。北壁は攪乱のため不明。主軸方向は炭化材の棟木より推測。
	N-14° -E	(17.9)		577住			
577住	長方形	404×511×22	被熱面	576住		7世紀中葉 ～後半	
	N-94° -E	(19.3)	東壁中央	574・579住			
579住	方形	459×(403)×30	被熱面	577住		7世紀中葉 ～後半	
	N-85° -W	(14.7)	西壁	581住			
581住	方形	495×463×26	被熱面	579・582住、土8		8世紀前葉	
	N-99° -E	(21.3)	東壁中央				
582住	方形	(310)×(715)×38	被熱面	583住		7世紀末～ 8世紀初頭	煙道あり。床面の直上に焼土・炭化物層があり、住居内ピットの覆土も同様な覆土である。
	N-83° -W	(14.6)	西壁南寄り	581住、土8			
583住	方形	860×(646)×42	粘土			7世紀中葉	焼失住居。カマド袖残る。耳環、馬具出土。床に硬化面あり。
	N-89° -W	(53.1)	西壁中央	582住・P3			
587住	不明	(73)×(217)×49	被熱面			古墳後期	大半が調査区外へ続く。
	不明	(0.5)	東壁	572住			
588住	方形か	(333)×(90)×50	被熱面	574住		8世紀中葉 ～後半	土師器甕Cの形態と切り合いより判断。
	N-174° -W	(2.5)	南東隅か				

計測値のうち、() は残存値、 () は推定値 である。

主軸方向は北からカマドの方向を計測した。カマドが未確認の住居址は長軸を主軸とした。

カマド形態は、ほとんどの住居址で廃棄後の状況を呈していると考えられるが、周囲に被熱礫が出土する場合は石組カマドと推測した。

578・580・589～591住は調査段階で欠番とした。また、584～586住は583住に統合した。

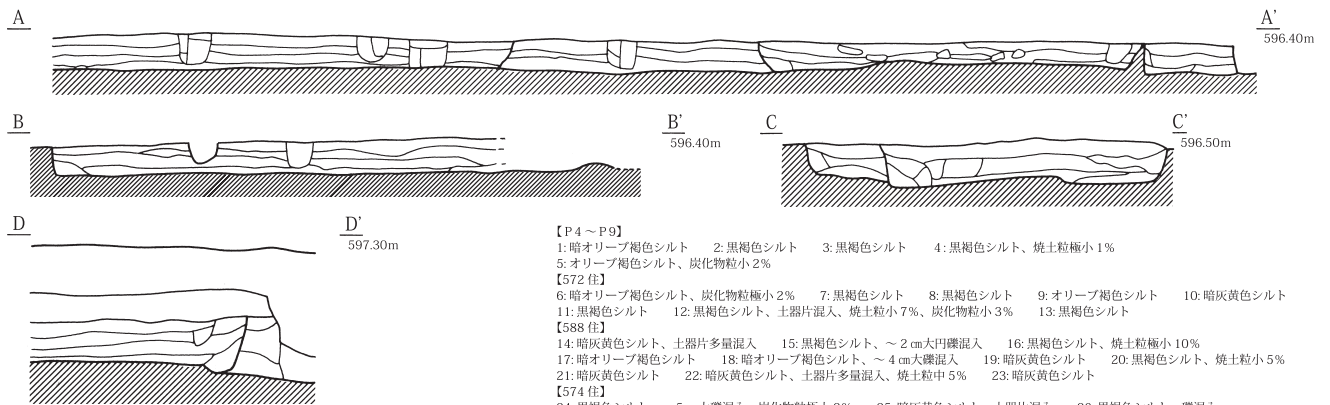
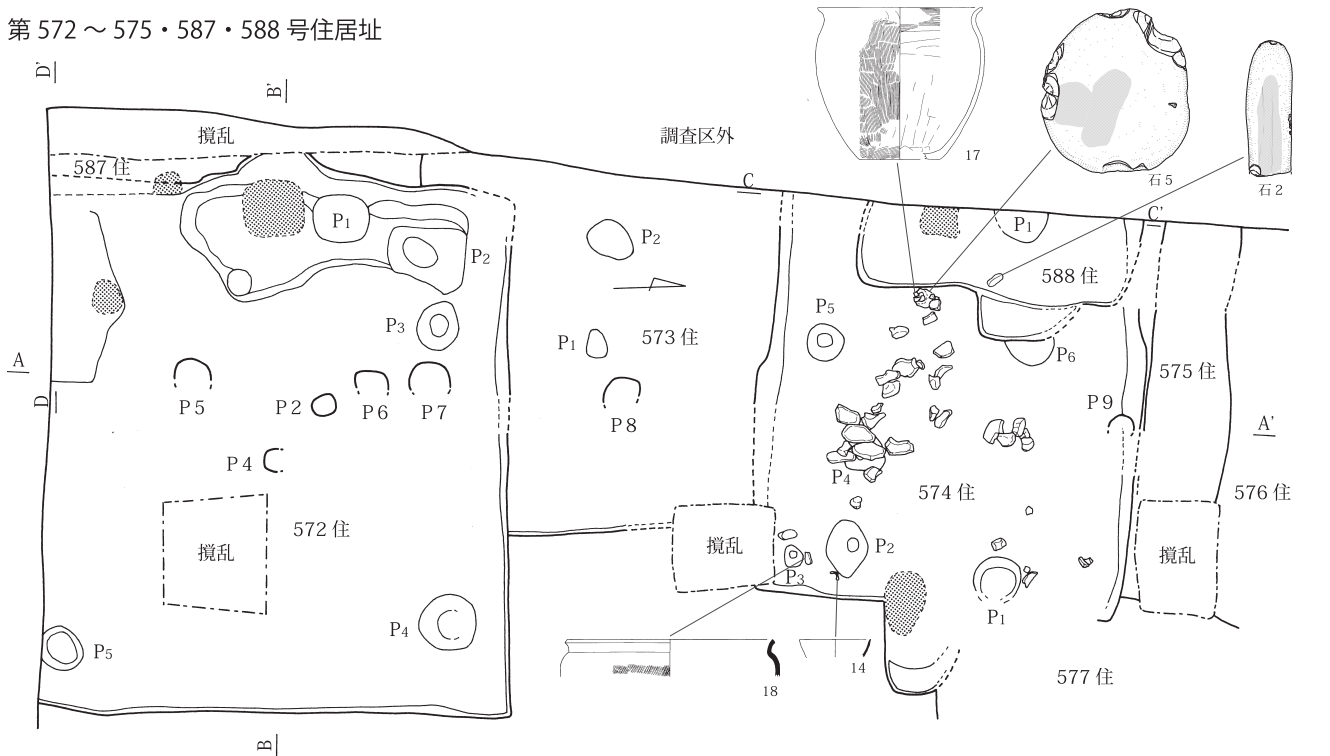
第 3 表 土坑・ピット一覧

No.	平面形態	長軸×短軸×深(cm)	本址より旧	本址より新	出土遺物	備考
土8	楕円か	107×(75)×9	582住	581住	土師器甕B破片	一部のみ掘削調査。
P2	円形	26×23×32	572住			柱痕あり
P3	楕円形	43×32×20	583住			柱痕あり
P4	円形か	26×-×27	572住			
P5	円形か	37×-×30	572住		土師器甕A・甕B破片	柱痕あり
P6	楕円形か	34×-×26	572住		土師器甕A破片	柱痕あり
P7	円形か	44×-×30	572住			
P8	円形か	39×-×28	573住		須恵器杯・蓋・甕、土師器甕C破片	柱痕あり
P9	円形か	27×-×23	574住			

計測値のうち、() は残存値である。

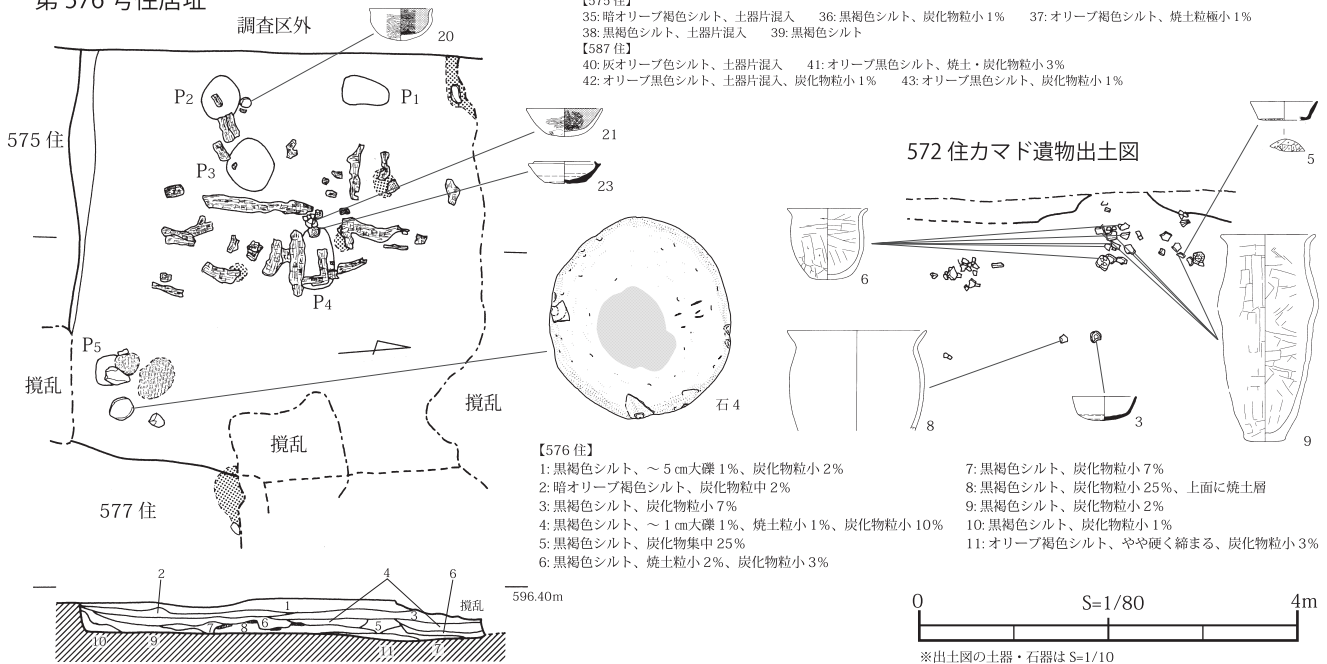
土1は587住へ振替、土2～7・9、P1は調査段階で欠番とした。

第 572 ~ 575・587・588 号住居址



- 【P4～P9】
 1: 暗オリーブ褐色シルト 2: 黒褐色シルト 3: 黒褐色シルト 4: 黒褐色シルト、焼土粒極小 1%
 5: オリーブ褐色シルト、炭化物粒小 2%
 【572 住】
 6: 暗オリーブ褐色シルト、炭化物粒極小 2% 7: 黒褐色シルト 8: 黒褐色シルト 9: オリーブ褐色シルト 10: 暗灰黄色シルト
 11: 黒褐色シルト 12: 黒褐色シルト、土器片混入、焼土粒小 7%、炭化物粒小 3% 13: 黒褐色シルト
 【588 住】
 14: 暗灰黄色シルト、土器片多量混入 15: 黒褐色シルト、～2 cm 大円礫混入 16: 黒褐色シルト、焼土粒極小 10%
 17: 暗オリーブ褐色シルト 18: 暗オリーブ褐色シルト、～4 cm 大礫混入 19: 暗灰黄色シルト 20: 黒褐色シルト、焼土粒小 5%
 21: 暗灰黄色シルト 22: 暗灰黄色シルト、土器片多量混入、焼土粒中 5% 23: 暗灰黄色シルト
 【574 住】
 24: 黒褐色シルト、～5 cm 大礫混入、炭化物粒極小 2% 25: 暗灰黄色シルト、土器片混入 26: 黒褐色シルト、礫混入
 27: 黒褐色シルト 28: 黒褐色シルト、壁崩落土か 29: 暗オリーブ褐色シルト、やや硬く締まる 30: 暗灰黄色シルト
 【573 住】
 31: オリーブ褐色シルト 32: 暗オリーブ褐色シルト、土器片混入 33: 暗オリーブ褐色シルト 34: 黒褐色シルト
 【575 住】
 35: 暗オリーブ褐色シルト、土器片混入 36: 黒褐色シルト、炭化物粒小 1% 37: オリーブ褐色シルト、焼土粒極小 1%
 38: 黒褐色シルト、土器片混入 39: 黒褐色シルト
 【587 住】
 40: 灰オリーブシルト、土器片混入 41: オリーブ黒色シルト、焼土・炭化物粒小 3%
 42: オリーブ黒色シルト、土器片混入、炭化物粒小 1% 43: オリーブ黒色シルト、炭化物粒小 1%

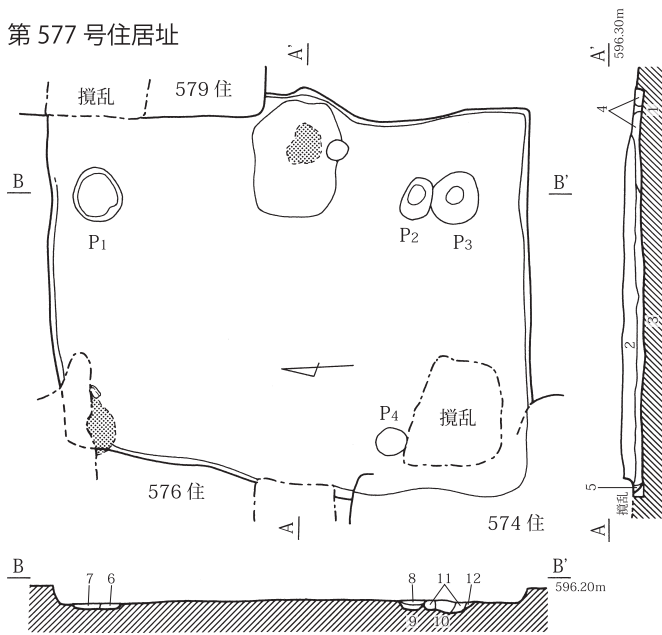
第 576 号住居址



- 【576 住】
 1: 黒褐色シルト、～5 cm 大礫 1%、炭化物粒小 2%
 2: 暗オリーブ褐色シルト、炭化物粒中 2%
 3: 黒褐色シルト、炭化物粒小 7%
 4: 黒褐色シルト、～1 cm 大礫 1%、焼土粒小 1%、炭化物粒小 10%
 5: 黒褐色シルト、炭化物集中 25%
 6: 黒褐色シルト、焼土粒小 2%、炭化物粒小 3%
 7: 黒褐色シルト、炭化物粒小 7%
 8: 黒褐色シルト、炭化物粒小 25%、上面に焼土層
 9: 黒褐色シルト、炭化物粒小 2%
 10: 黒褐色シルト、炭化物粒小 1%
 11: オリーブ褐色シルト、やや硬く締まる、炭化物粒小 3%

第 7 図 遺構 (1)

第 577 号住居址

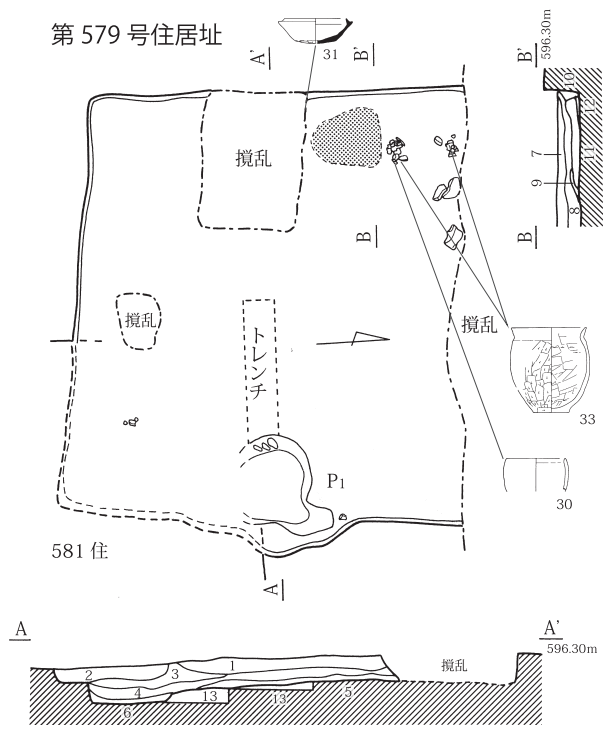


577 住カマド 出土図



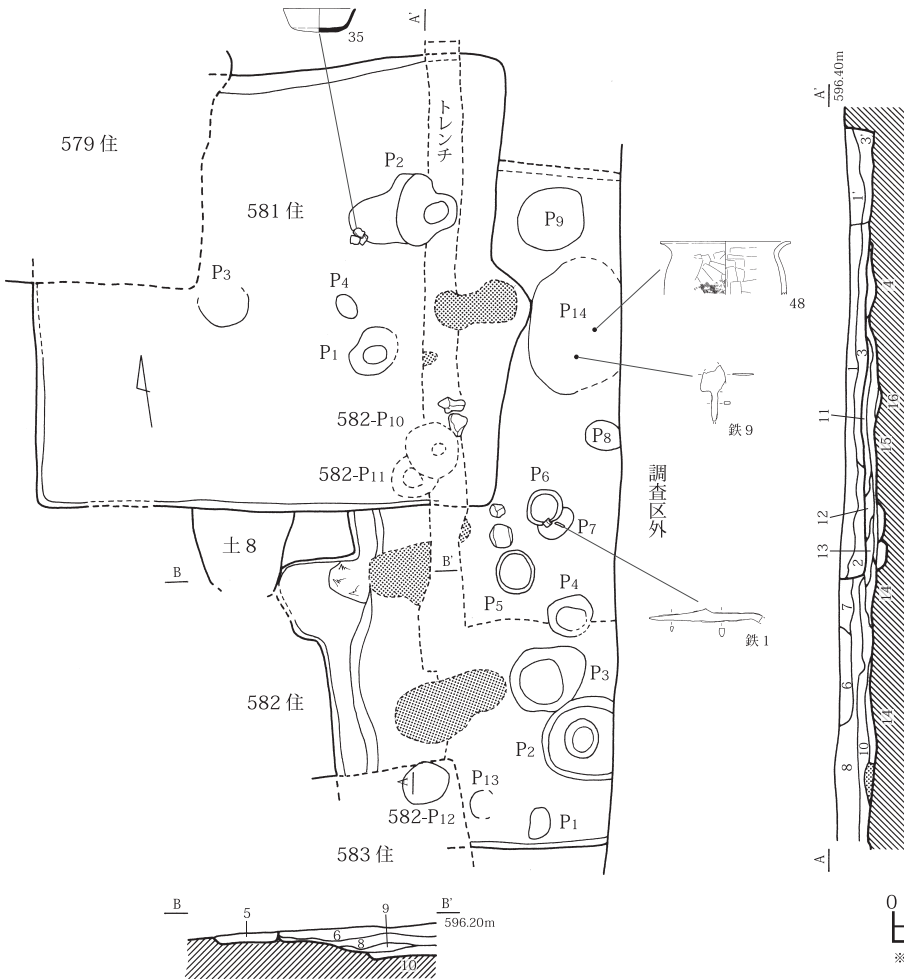
- 1: オリーブ黒色シルト、焼土粒小 10%、カマド構築土の崩落か
 - 2: 黒褐色シルト、～2cm大礫 2%
 - 3: 黒褐色シルト、灰オリーブ色粘質土粒小 15%
 - 4: 黒褐色シルト、焼土粒・炭化物小 7%
 - 5: オリーブ黒色シルト
- 【P1】
- 6: 黒褐色粘質土
 - 7: 暗灰色粘質土
- 【P2】
- 8: 黒褐色シルト、焼土粒極小 1%
 - 9: 暗オリーブ褐色シルト
- 【P3】
- 10: 黒褐色シルト
 - 11: 暗灰色シルト
 - 12: 黒褐色シルト

第 579 号住居址



- 1: 黒褐色シルト、西側に焼土粒中多量
 - 2: 黒褐色シルト、焼土・炭化物粒極小 3%
 - 3: 暗灰黄色シルト、～10cm大礫混入
 - 4: 暗灰黄色シルト、焼土粒極小 3%
 - 5: 暗灰黄色シルト、やや粘性あり
- 【P1】
- 6: 黒褐色シルト、～2cm大礫 1%、～10cm大礫が底面に集中する
 - 7: 黒褐色シルト、炭化物粒極小 1%
 - 8: 暗オリーブ褐色シルト、焼土粒小 2%
 - 9: 黒褐色シルト、焼土・炭化物粒小 2%
 - 10: 黒褐色シルト、焼土粒極小 1%
 - 11: 暗オリーブ褐色シルト
 - 12: 黒褐色シルト
 - 13: 暗オリーブ褐色弱粘質土

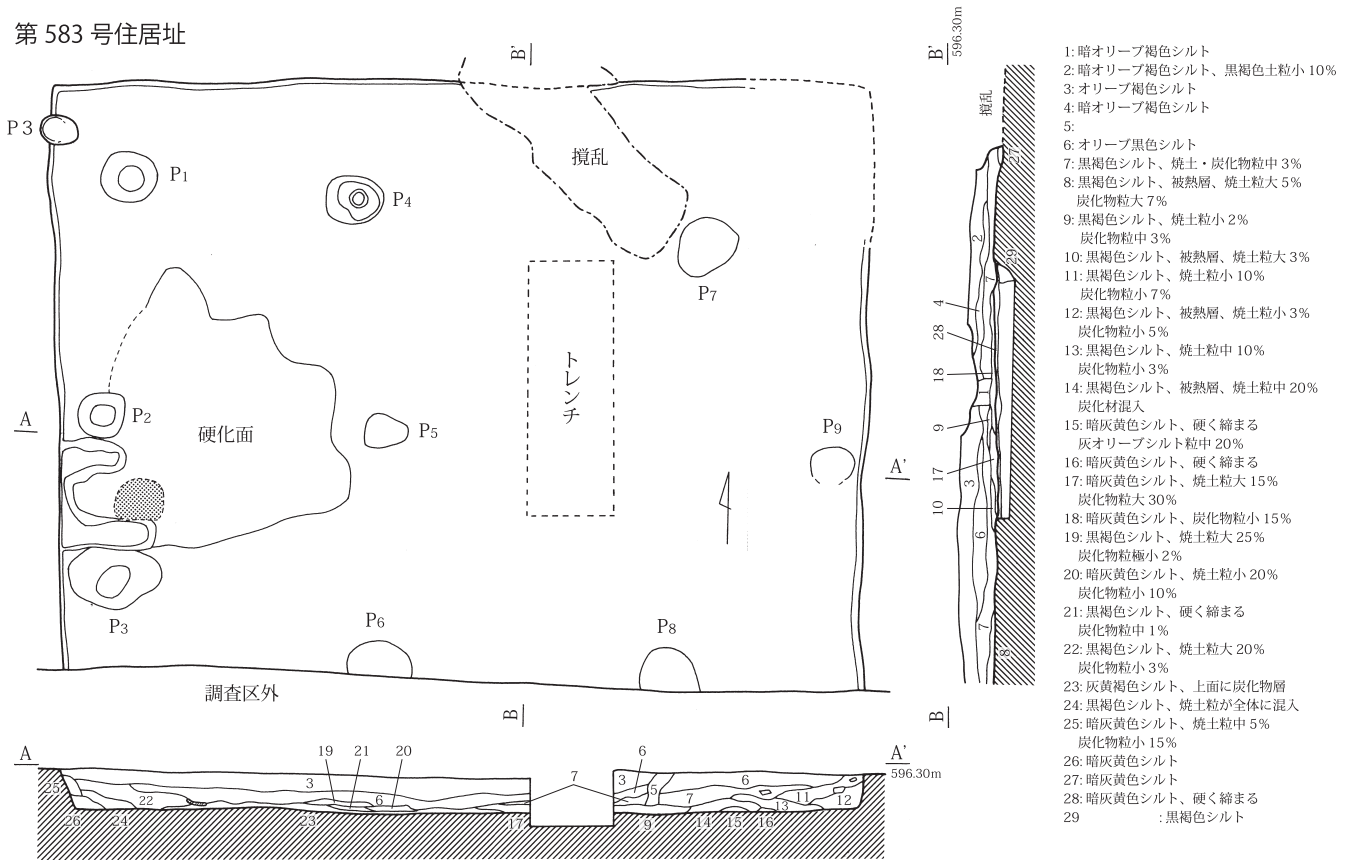
第 581・582 号住居址



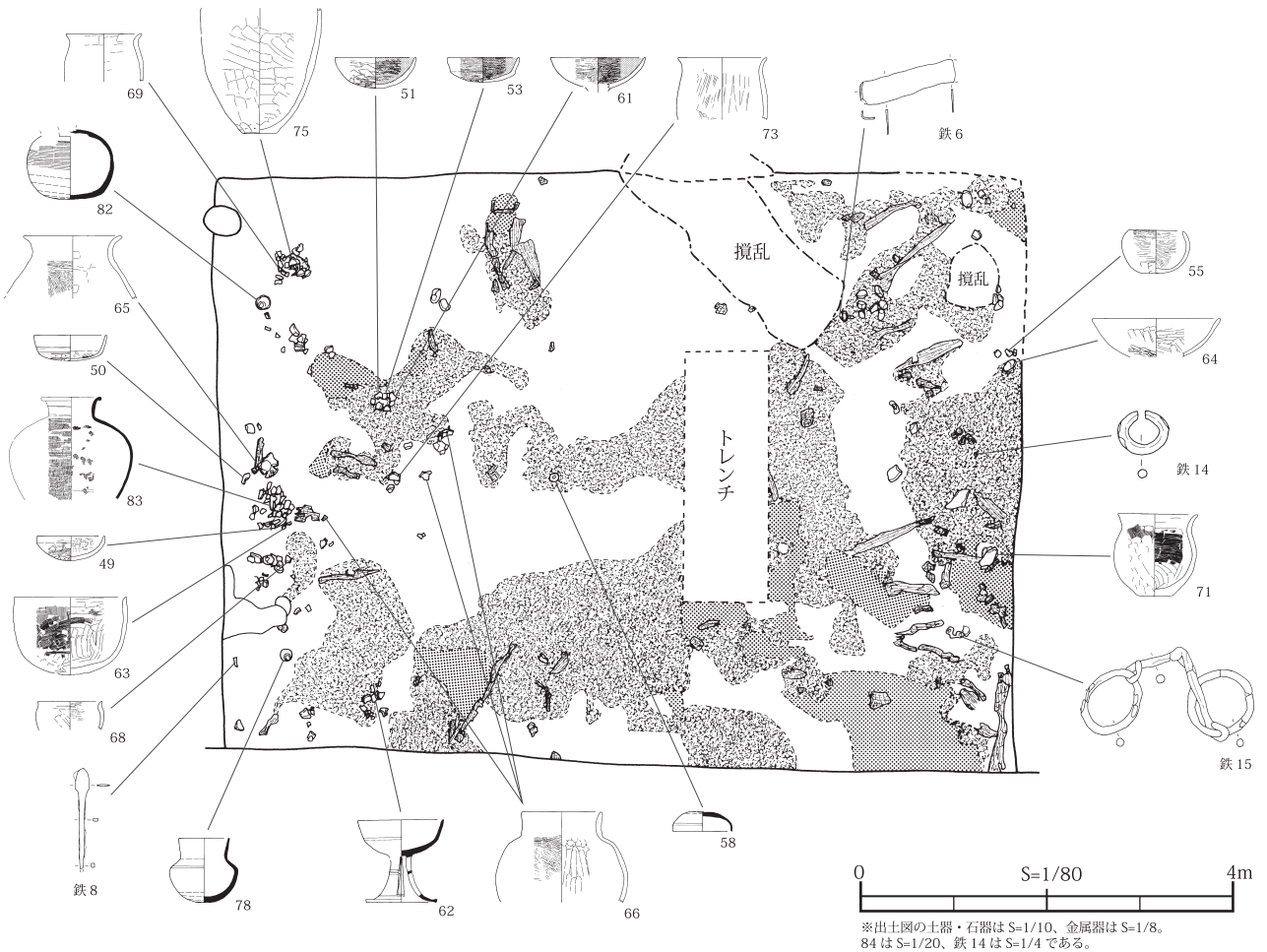
- 【581 住】
- 1: 黒褐色シルト、焼土・炭化物粒小 1%
 - 1': 黒褐色シルト、灰オリーブ土粒大 15%
 - 2: 黒褐色シルト
 - 3: 黒褐色シルト、炭化物粒中 15%
 - 3': 黒褐色シルト、鉄分の沈着が多い
- 【581 住 P1】
- 4: 黒褐色シルト、焼土粒中 3%、炭化物粒小 2%
被熱土が堆積する
- 【土 8】
- 5: 黒褐色シルト、やや粘性あり
- 【582 住】
- 6: 暗オリーブ褐色シルト、焼土塊大 10%
 - 7: 黒褐色シルト、焼土・炭化物粒小 1%
 - 8: 黒褐色シルト、焼土粒中 7%
 - 9: 黒褐色弱粘質土、焼土粒小 5%、カマド構築土の崩落か
 - 10: 黒褐色シルト、焼土粒中 20%、炭化物粒小 2%
 - 11: 黒褐色シルト、焼土粒中 15%、炭化物粒小 5%、
被熱土堆積
 - 12: 黒褐色シルト、焼土粒小 2%、被熱土堆積
 - 13: 暗灰黄シルト、焼土粒小 3%、被熱土堆積
 - 14: 暗灰黄シルト、上面がわずかに被熱する
 - 15: 黄灰色シルト、焼土粒小 5%、上面が被熱する
 - 16: 黄灰色シルト、焼土粒小 5%、15 層よりやや明るい

第 8 図 遺構 (2)

第 583 号住居址



583 住遺物・炭化材出土図



第 9 図 遺構 (3)

第3節 遺物

1 土器

(1) 概要

土器は遺構内、検出面等から出土があり、明らかに近代以降の攪乱に伴う陶磁器類を除き全点を回収した。総量で89,280gとなる。

土器の整理は、洗浄の後、取り上げた単位毎に遺構順になるように固有の番号を振り、上段に遺跡・調査名である「出ガワ南21」を、下段に固有番号と帰属遺構等を注記した。接合は、まず帰属遺構内で、次いで周辺遺構、検出面等で、出土地点を跨いだ接合がないかを検討しながら行った。この段階で、遠距離にある遺構間での接合について見落とされている可能性はある。実測遺物の選別は、残存度が良いものを中心にしたが、土師器甕・壺類など大型の器種については大破片であっても図化不能で選別できなかつたものも少なくない。また、この段階で遺構単位の土器群の特徴を示そうという選別傾向が生じている可能性は当然ある。実測は従来の考古学的手法によって、基本的に側面図に断面図を組み合わせる作図法で行い、底面図が必要と判断したものについてはこれを付した。最終的に本報告書へは84点を図化提示できた。実測図の断面が白抜きは土師器と黒色土器、黒塗りは須恵器を示している。

出土土器の記述は、個別の器種・器形の属性を探ることと、遺構等出土の土器群の時期・性格を把握することの2点に重点を置いた。本文中の番号は第10～13図の土器実測図の番号に一致する。「甕形土器」等の名称の「形土器」は省略した。

なお、器種・器形の分類と名称及び土器群の年代観は、古墳時代後期の土器については文献1、奈良時代の土器全般については文献に準じた。

(2) 種別、器種・器形

調査全体で出土した種別は土師器、黒色土器、須恵器の3種がある。近世陶磁器類の出土はなかった。時期的には、遺構出土の土器の全てが古墳時代後期～奈良時代前半に収まる。なお、平安時代の須恵器・黒色土器(13)が出土しているが、帰属する遺構プランをつかめなかつたため本節での記載からは除外した。

ア 古墳時代の土器

今回の調査の主体を成す土器群で、古墳時代後期の土師器と須恵器が出土している。土師器の中には内面または内外面黒色処理が行われているものがあるが、この時期には黒色処理技法が特定の器種に必ずしもすべて行われている訳ではないとの理解から、あえて黒色土器の語を避けた。

(ア) 土師器

杯 (1・19～21・29・40・41・49～57)

基本的に丸底で、口縁部に強いヨコナデが施された後、内面または内外面に横のミガキ、体部下半一帯に手持ケズリが行われるものである。文献1による古墳時代後期の土師器杯は杯Aから杯Sまでの19器形に分類されている。今回調査も同一遺跡内の別地点であるためこの分類を従うと、杯A2:54・55、杯A3:144、杯A4:21・40・52、杯B2:20・51、杯B3:49・、杯E:142、杯G:29、杯Jc:19・53・56・57、杯N:1、杯Q:50となる。いずれも丸底または丸底気味を呈すので底径は計測し得ない。1、19～21、51～54、56・57は内面に黒色処理が行われているが、内面の全面に及ばず部分的に円形にしか黒色処理がされていないものもある。また19・20・21・51・53は外面にも黒化が確認できるが、部分的である。41はロクロナデで整形し、底部には回転ケズリ施している。胎土が粗く雲母を多く含み、焼成が軟質であるため、土師器杯として報告した。

高杯 (24・61)

いずれも杯部のみである。24は稜を持ち、口縁部が直線的に開く。内外面のミガキは非常に丁寧で、内面に黒

色処理を施す。底部にわずかに脚部に続く屈曲を確認できるため高杯とした。61は杯部が椀型を呈するもので、同様に内外面のミガキは丁寧である。

鉢 (25・63・64)

杯に比べて大型の形態を鉢とした。外面の調整技法も 25：ミガキ、63：ハケ目、64：工具ナデと様々である。器高が高いもの (25・53) と低いもの (64) がある。いずれも黒色処理は確認できないが、64は内面の一部に黒化がみられる。

甕 (8・9・28・46～48・75)

外面調整が、A：工具ナデ、B：ハケ目のものがあり、A類が主体を成す。文献2の甕Aに相当し、古墳時代後期に主体的な長胴形の甕である。口縁部を強くヨコナデされ、成形・調整ともに雑でナデや工具ナデが多用されている。底部は厚く、9・28は底面に木葉圧痕を残す。B類はほとんど確認できず、47に工具ナデの後、縦方向のハケ目を確認できる。

小型甕 (6・7・26・33・34・69～74)

口径 11.8～15.8 cm で、器高が低く球胴形に近いもの (6・7・26・33・70・71) と、高く胴長のもの (34・69・72～74) がある。器高が高いものは中型品と言うべきかもしれないが、ここに含めた。外面調整は、A：工具ナデ・C：ケズリを施すものが主体であり、一部にB：ハケ目を施すものがある。甕と同様に主体を成すのはA類である。6のように底部がやや丸底気味のものもあるが、C類 (33・34) は特に底面をきれいに平底として作り出している。

壺 (10・32・65～67)

丸く張る胴部に「く」の字の口縁部がつき、胴部にミガキが行われるものである。古墳時代に特徴的な器種で、奈良時代以降はわずかに胴張り甕 (文献2の甕Fに相当) として古い時期に残る。甕に比べて胎土が精緻である。

小型壺 (27・30・68)

壺に比べ、器高が低くミガキが施されているものであるが、器面の磨滅により確認できないものもある。30はミガキが確認できず、工具ナデ痕が残るのみであったが、杯に比べて胎土が荒いため小型壺とした。

(イ) 須恵器

杯 (2～5・11・12・22・23・31・43・44・59・60)

22・23・31は蓋杯の杯身であり、文献1では杯A、文献2では杯Dに相当する。いずれも口縁の立ち上がり部は短く内傾する。文献1によると、徐々に口縁立ち上がりが長く直立するものから短く内傾するものへと変化が確認でき、杯Acに相当しよう。蓋受け部径は 12.7～13 cm を測り、小型化が進んでいる。23・31は底部に手持ちヘラケズリは施す。

2～5・11・12・43・44・59・60は蓋受け部がないもので、文献1の杯B、文献2の杯Aに相当する。本書では杯Aとする。いずれも体部が直線的に外方へのび、底部との境は丸みを帯びる。また、底部は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ、もしくは工具ナデで調整を施す。2は外面口縁部に2条の圏線が巡り、体部が内湾する。佐波理範模倣であろうか。胎土は精緻であるが、焼成がやや軟質で灰白色を呈する。5は体部と底部の境に明瞭な稜を持ち、底部には手持ちヘラケズリ調整後にヘラ記号が施される。半分しか確認できないが「×」と推測される。2と同じく胎土・焼成が異なり、黄白色を呈する。

蓋 (58・84)

蓋杯の杯蓋は58の1点で、肩部に稜を持たず沈線状に痕跡を残している。天井部からなだらかに端部に至り、口縁端部内側にはわずかに面取りがされる。84は582住の住居外で、包含層出土である。内面に返りを持つ扁平な形態である。天井部は丁寧に回転ヘラケズリが施されるが、つまみが剥がれた痕跡は確認できない。

高杯 (45・62)

45は口縁部がやや外反し、体部下方に緩やかな稜をもつ。底部の形態から小型の高杯の可能性を考えた。62は

脚部に2段2方向の長方形透かしをもつ。脚部中位に2条、下位の屈曲部付近に1条の沈線を施す。杯部は外面中位に沈線を巡らせ稜を成す。焼成はやや軟質で酸化焰焼成により浅黄橙色を呈する。

鉢 (80)

薄手で頸部にくびれがあるが、器高が低い形態が復元できるため鉢とした。

甕 (77・83)

口縁部から胴部までまとまった形で図化できたのは77と83の甕2点である。77は口縁部がやや内湾気味に直立し、口縁端部に面取りを施す。胴部外面の平行線タタキ目が残るが、内面の当て具痕はナデ消されている。胴部中位に2対の把手が付き、文献2の甕Eに相当する。83は口縁端部が肥厚し、口縁部中位と頸部に沈線が巡る。胴部の内外面の平行線タタキ目・当て具痕を後にナデ消している。

直口壺 (78・79)

いずれも583住出土品である。78は完形で、肩部に1条の沈線が巡り胴部下半から底部にかけては回転ヘラケズリで丸みを帯びる。

提瓶 (35)

583住で1点出土した。遺存状態が悪く、胴部閉塞部を一部に観察できる。把手も接合部分が一部残るのみで形状はわからない。外面はカキ目、その後に底部側には回転ヘラケズリが施される。

平瓶 (81・82)

82は胴部が球形に近く、上半にはカキ目、下半に回転ヘラケズリを施す。焼成は軟質で灰白色を呈する。

イ 奈良時代の土器

土師器と須恵器がある。土師器杯がなくなり、煮炊具を土師器、食膳具・貯蔵具を須恵器とつくり分けている。

(ア) 土師器

甕 (16・17)

古墳時代後期から伝統的な長胴形の甕Aとハケメを多用する長胴形の甕Bがあるが、本次調査では甕Bが図化提示できた。この他に図化はできなかったが、東信型の甕である甕C(いわゆる武蔵甕)が588住で出土している。

16は内面横方向のハケ目で、口縁部は横ハケ目である。器壁もやや厚手である。17は外面に縦方向のハケ目、口縁部内面にも横方向のハケ目を施すため、甕Bとした。しかし、口径も28.8cmと大きく、それに比して器高がひくい。今後の出土例を待ちたい。

小型甕 (15)

15は、大型甕と同じく、外面が縦方向のハケ目、内面胴部は工具ナデ、口縁部に横方向ハケ目が確認できる。

(イ) 須恵器

杯 (14・35~38)

高台を持たない杯Aと高台を有する杯Bの2者が認められる。

杯Aはほとんどが平底だが、底部が不明瞭で丸底気味なものもある(35)。いずれも底面が回転ヘラ切り後、ヘラケズリを施す。概ね丸底気味のもの7世紀末から8世紀第1四半期、平底で底面がヘラ切り・ヘラケズリのは8世紀第2~3四半期と把握されているため、本次出土品は8世紀初頭~第3四半期のものであろう。

杯Bは14・38の2点である。口径に比して器高の低いものと高いものの2形態があるが、いずれも低いタイプで、底部が残る38では、底面は回転ヘラ切り・回転ヘラケズリが施される。杯Bに糸切りが導入されるのは8世紀第3四半期以降で、本次出土品はそれ以前と考えられる。

短頸壺 (39)

口縁部が短く立ち上がり、口径と器高がほぼ同じくらいである。外面下半には回転ヘラケズリを施す。硬質であるが酸化焰焼成により褐色を呈する部分がある。

壺・甕 (18)

須恵器の大型貯蔵具の破片が少量出土している。体部破片が多く、外面にタタキ目が確認できる。甕には長めの口縁部が外反しながら大きく開く中型・大型の甕A、中型で甕Aに比べて口縁部が短く開く甕C、中型で肩部が張り、そこから頸部がわずかにくびれて短い口縁部が開く平底の甕Eなどがあるが、口縁部が残存し、図化提示できたものは1点である。18は甕Eであり、短い口縁部の端を面取りし外面にタタキ目を施している。焼成は軟質で、灰白色を呈する。また、図化はできなかったが、581住でも同様に軟質・灰白色を呈する甕Eの口縁部が出土している。

(3) 遺構出土の土器群

土器群をより客観的に把握し記述・提示しようという作業は、現場でも整理レベルでも時間と経費を要するものである。ここではまとまった出土量があり、図化提示できた個体数が多い遺構出土土器群について、図化提示できた土器を中心に遺構ごとに概観する手段を採りたい。

(ア) 第572号住居址出土土器群

10点を図化している。食膳具が土師器の杯Nと須恵器の杯で構成される。土師器甕は甕A類が主体で長胴甕である。小型甕は器高が低いもので、外面工具ナデ整形のA類で、胴部下半には粗くヘラケズリを施す。土師器杯Nや壺Aがまだ残り、須恵器の食膳具には蓋杯がなく、箱型の杯のみで構成されている。有台杯の杯Bがないことなどから総合的に考えると、古代1～2期、7世紀末～8世紀初頭と考えたい。

(イ) 第574号住居址出土土器群

5点を図化している。食膳具は須恵器の杯Bのみで、土師器杯はない。土師器甕は内外面ハケ目調整の甕Bである。須恵器杯B・土師器甕Bの形態から古代2期、8世紀前葉に相当する。

(ウ) 第576号住居址出土土器群

8点を図化している。食膳具は土師器の杯・須恵器の蓋杯で構成され、比率は土師器杯が多い。土師器杯Jc、須恵器蓋杯の杯身から考えると、出川南3段階、7世紀中葉に相当する。

(エ) 第581号住居址出土土器群

5点を図化している。食膳具が須恵器の杯A・Bのみで構成され、土師器杯はない。土師器甕は図化提示できたものがないが、ハケ目調整の甕Bが多い。古代2期、8世紀前葉に相当する。

(オ) 第582号住居址出土土器群

9点を図化している。食膳具は須恵器の杯Aが主体で、わずかに土師器の杯Aが混じる。煮炊具は土師器甕Aが主体で外面ハケ目の甕Bは少ない。古代1～2期、7世紀末～8世紀初頭と考えたい。

(カ) 第583号住居址出土土器群

35点を図化している。食膳具は土師器杯が主体であり、須恵器の蓋杯と杯Aで構成される。蓋杯の蓋は口径が小さく、肩部の稜線も沈線による。土師器甕類は外面工具ナデ調整の甕Aが主体で、小型甕には少量であるがハケ調整のものがある。出川南3段階、7世紀中葉に相当する。

(キ) その他の土器群

少ない個体数から敢えて想定すれば第573号住居址は古代1～2期の7世紀末～8世紀初頭、第577号住居址は出川南3段階、第579号住居址は出川南3～4段階、第588号住居址は8世紀半ば～後半と考えられる。585・587住も古墳時代後期に属するものと考えられる。

参考文献

- 1 竹原学 1994「土器」『松本市文化財調査報告No.115 出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会
- 2 小平和男 1990「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市その1—総論編』長野県教育委員会
- 3 直井雅尚 2011「土器」『松本市文化財調査報告No.207 出川南遺跡—第15次発掘調査報告書—』松本市教育委員会

第4表 土器観察表

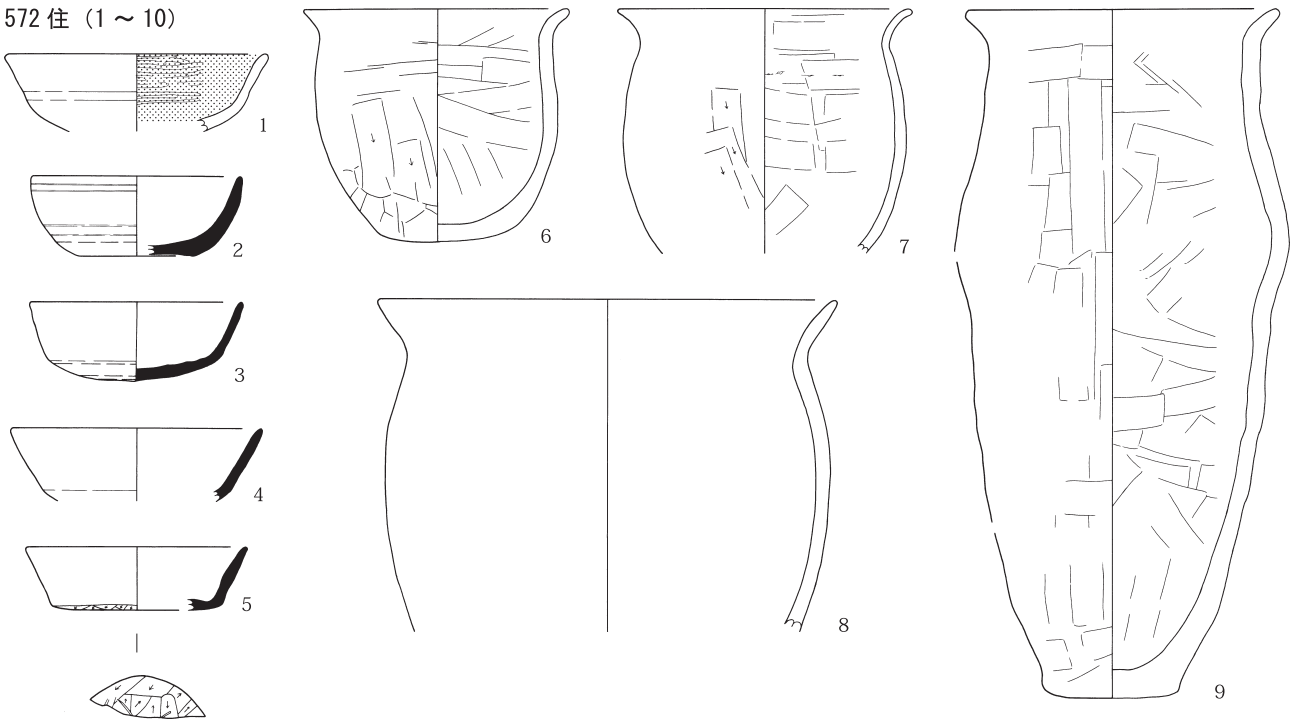
図 No.	出土 地点	種別	器種 器形	寸法			残存度		成形・調整等		実測 番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面		
1	572住	土師器	杯N	(14.0)			1/5		横ナデ、下半から手持ちケズリ	ミガキ→黒色処理	572住2	045
2	572住	須恵器	杯	(11.0)	(6.0)	4.2	1/3	1/3	ロクロナデ→底部付近回転ヘラケズリ、圏線2条。底部不定方向工具ナデ。	ロクロナデ	572住4	021
3	572住	須恵器	杯A	11.2	9.1	4.2	4/5		ロクロナデ、底部ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	572住5	020
4	572住	須恵器	杯	(13.4)	(10.0)		1/5		ロクロナデ	ロクロナデ	572住6	037
5	572住	須恵器	杯	(11.8)	(9.0)	3.3	1/4	1/6	ロクロナデ、底部手持ちケズリ→ヘラ記号「X」か	ロクロナデ	572住3	013
6	572住	土師器	小型甕	14.1	7.4	12.4	完	完	工具ナデ→胴部下ケズリ	工具ナデ	572住1	002,004,005
7	572住	土師器	小型甕	(15.6)			1/2		指押さえ、横ナデ、手持ちケズリ	横ナデ、工具ナデ	572住9	016,032
8	572住	土師器	甕A	(24.4)			1/6		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	572住10	019,030,033
9	572住	土師器	甕A	16.8	7.2	36.4	3/4	3/4	横ナデ、工具ナデ→底部付近手持ちヘラケズリ	横ナデ、工具ナデ	572住7	001,003,007,012,022,024,025,034,048,291
10	572住	土師器	壺Aa	(19.6)	(13.0)	29.0	4/5	1/8	横ナデ、ミガキ、底部工具ナデ	横ナデ、工具ナデ→ミガキ	572住8	023,027,042,045,048,081
11	573住	須恵器	杯A	(11.5)	(8.6)		1/4		ロクロナデ、底部ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	573住1	066
12	573住	須恵器	杯A	(12.4)	(7.4)		1/24		ロクロナデ、底部ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	573住3	061
13	573住	黒色A	椀か	(17.3)			1/9		ロクロナデ	ロクロナデ→ミガキ→黒色処理	573住2	062
14	574住	須恵器	杯B	(12.3)			13/14		ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	574住1	072,083
15	574住	土師器	小型甕B	(10.2)			1/4		横ナデ、縦ハケ目	横ナデ→ハケ目、工具ナデ	574住2	083
16	574住	土師器	甕B	(19.2)			1/9		ハケ目、横ナデ	横ハケ目	574住4	081,082,083,094
17	574住	土師器	甕B	(28.8)	(14.2)	26.8	一部	1/3	横ナデ、縦ハケ目	口横ハケ目、胴部工具ナデ、一部ミガキか	574住5	067,068,342,343
18	574住	須恵器	甕E	(36.8)			1/8		タタキ→横ナデ	ロクロナデ	574住3	071
19	576住	土師器	杯Jc	(10.9)			わずかに残存		横ナデ、底部手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ→黒色処理	576住1	103
20	576住	土師器	杯B2	11.0		5.5	一部欠	完	横ナデ、ミガキ、底部手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ→黒色処理	576住6	097
21	576住	土師器	杯A4	13.3		4.8	10/12	完	横ナデ、ミガキ、底部手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ→黒色処理	576住7	099,100
22	576住	須恵器	杯身						ロクロナデ	ロクロナデ	576住3	110
23	576住	須恵器	杯身	10.7	7.4	3.8	わずかに残存	完	ロクロナデ、底部付近回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	576住8	099
24	576住	土師器	高杯	(17.6)			わずかに残存		ミガキ	ミガキ→黒色処理	576住2	108
25	576住	土師器	鉢	(18.5)			1/4		横ナデ、粗いミガキ	横ナデ→粗いミガキ	576住4	110
26	576住	土師器	小型甕	(11.8)			1/4		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	576住5	104
27	577住	土師器	小型壺						ミガキ摩滅	ミガキ摩滅	577住1	124
28	577住	土師器	甕A		(8.0)			1/3	工具ナデ	工具ナデ	577住2	119
29	579住	土師器	杯Gか	(11.2)			1/4		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	579住5	141
30	579住	土師器	小型壺	(10.2)			3/4		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	579住4	130
31	579住	須恵器	杯身	(10.7)	(7.2)	4.3	1/3	1/3	ロクロナデ、底部手持ちケズリ	ロクロナデ	579住3	129
32	579住	土師器	壺	(16.8)			1/4		横ナデ、工具ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ	579住2	140
33	579住	土師器	小型甕	(13.2)	6.3	14.9	1/3	完	横ナデ、手持ちケズリ、底部手持ちケズリ	横ナデ、工具ナデ	579住1	130,131,140
34	579住	土師器	小型甕	(15.0)	(7.8)	20.0	1/3	4/5	横ナデ、手持ちケズリ	(ハケ状)工具ナデ	579住6	135,140
35	581住	須恵器	杯A	12.7	6.2	4.1	8/9	一部欠	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	581住4	144
36	581住	須恵器	杯A	(13.9)	(9.2)	3.7	1/28	1/3	ロクロナデ、底部ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	581住1	151
37	581住	須恵器	杯A	(13.9)	(8.7)	3.2	1/16	2/3	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	581住5	150
38	581住	須恵器	杯B	(14.5)	9.9	4.6	2/3	一部欠	ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	581住3	155
39	581住	須恵器	短頸壺	(9.9)	7.0	9.1	1/6	完	ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ→工具ナデ	ロクロナデ	581住2	154,156,158
40	582住	土師器	杯A3	(12.2)		3.8	1/3		横ナデ、手持ちヘラケズリ	横ナデ、ナデ	582住1	184
41	582住	土師器	杯	(15.2)			1/3		ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	582住8	171
42	582住	土師器	ミニチュア		(5.2)			1/3	工具ナデ、底部手持ちケズリ	工具ナデ	582住5	188
43	582住	須恵器	杯Aか	(12.8)	(11.0)		わずかに残存		ロクロナデ、下半回転ヘラケズリ	ロクロナデ	582住4	185
44	582住	須恵器	杯A	(13.2)	10.5	4.3	1/2		ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→手持ちケズリ	ロクロナデ	582住3	184
45	582住	須恵器	高杯	(12.0)					ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	582住2	184

図 No.	出土 地点	種別	器種 器形	寸法			残存度		成形・調整等		実測 番号	注記
				口径	底径	器高	口縁	底部	外面	内面		
46	582住	土師器	甗A	(18.6)			1/6		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	582住9	171
47	582住	土師器	甗A	(19.2)			1/8		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	582住7	170,178
48	582住	土師器	甗B	(23.0)			1/6		横ナデ、工具ナデ、ハケ目	横ナデ、工具ナデ	582住6	162
49	583住	土師器	杯B	(11.8)		4.3	3/4		横ナデ→手持ちケズリ→ミガキ	横ナデ→ミガキ	583住25	235,258
50	583住	土師器	杯Jc	12.7		4.5	3/4		横ナデ→底部手持ちケズリ	横ナデ→底面ミガキ	583住30	225,285
51	583住	土師器	杯B	14.2		5.3	9/10		横ナデ→下半手持ちケズリ→ミガキ	横ナデ→ミガキ	583住26	204,255
52	583住	土師器	杯A4	(14.7)			1/6		横ナデ、手持ちケズリ	ミガキ→黒色処理	583住8	263
53	583住	土師器	杯Jc	12.7		4.3	3/4	完	ミガキ、底部手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ→黒色処理	583住3	205,255
54	583住	土師器	杯A	(11.8)			1/6		下半手持ちケズリ→ミガキ	ミガキ→黒色処理	583住31	263
55	583住	土師器	杯A	9.5		7.6	4/5	1/4	ミガキ、下半～底部ケズリ 摩滅	ミガキ	583住15	219,261,288,327
56	583住	土師器	杯Jc	(11.6)			1/4		横ナデ→底部手持ちケズリ→ミガキ	横ナデ→ミガキ→黒色処理	583住29	263
57	583住	土師器	杯Jc	(12.8)			1/4		横ナデ、下半手持ちヘラケズリ	横ナデ、ミガキ→黒色処理	583住28	269
58	583住	須恵器	杯蓋	10.7				完	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	583住32	211
59	583住	須恵器	杯A		(3.4)			1/2	ロクロナデ→下半回転ケズリ、底部回転ヘラ切り→工具ナデ	ロクロナデ	583住34	265
60	583住	須恵器	杯A	12.5				わずかに残存	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	583住33	265
61	583住	土師器	高杯A	16.7			3/4		横ナデ、工具ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ→黒色処理	583住9	206,255,263,267
62	583住	須恵器	高杯	15.2	12.5	14.8	1/4	一部欠	ロクロナデ、沈線、2方向2段の長方形透かし	ロクロナデ、手持ちナデ	583住1	216,262,270,271
63	583住	土師器	鉢	20.0		13.8	1/6	完	横ナデ、ハケ目、底部手持ちケズリ摩滅	(ハケ状)工具ナデ	583住16	221,236,245,246,261
64	583住	土師器	鉢	(22.7)			1/4		横ナデ、(ハケ状)工具ナデ、下半手持ちケズリ	横ナデ、(ハケ状)工具ナデ	583住12	219
65	583住	土師器	壺A	(17.6)			1/2		指押さえ→横ナデ、ミガキ	横ナデ、工具ナデ	583住21	249
66	583住	土師器	壺A	(14.1)			2/3		横ナデ、ミガキ	横ナデ、指押さえ、指ナデ	583住14	207,208,239,263
67	583住	土師器	壺B	(24.0)				わずかに残存	横ナデ、ミガキ摩滅	横ナデ、工具ナデ(ミガキ)	583住23	273,282
68	583住	土師器	小型壺	(11.3)			1/10		横ナデ、工具ナデ→ミガキ摩滅	横ナデ、ミガキ	583住10	236
69	583住	土師器	小型甗	(13.4)			1/2		横ナデ、工具ナデ摩滅	横ナデ、工具ナデ摩滅	583住11	197,251,257
70	583住	土師器	小型壺		10.6			ほぼ完	摩滅不明、底部付近手持ちケズリ	工具ナデ	583住13	224,265
71	583住	土師器	小型甗	14.3	6.5	14.7	5/6	完	横ナデ、ハケ目、工具ナデ	横ナデ、横ハケ目、工具ナデ	583住17	218
72	583住	土師器	小型甗	(14.2)			1/4		横ナデ、工具ナデ	横ナデ、工具ナデ	583住22	259
73	583住	土師器	小型甗	(15.8)			1/12		指押さえ→横ナデ、(ハケ状)工具ナデ	指押さえ→横ナデ、工具ナデ	583住24	210
74	583住	土師器	小型甗	(14.4)			1/2		横ナデ、ハケ目	横ハケ目、工具ナデ	583住2	259,264,271
75	583住	土師器	甗A		5.8			完	工具ナデ、底部付近手持ちケズリ、底部手持ちナデ	工具ナデ	583住18	197,262
76	583住	須恵器	提瓶						ロクロナデ→カキ目、胴部下半回転ヘラケズリ、把手ナデつけ。	ロクロナデ、指ナデ	583住35	259,264
77	583住	須恵器	甗	(22.8)			1/2		叩き目→カキ目、沈線	当て具痕ナデ消し	583住7	259
78	583住	須恵器	直口壺	9.1		11.6		ほぼ完	ロクロナデ、沈線、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	583住19	212
79	583住	須恵器	壺						ロクロナデ	ロクロナデ、頸部絞り痕	583住6	263,267
80	583住	須恵器	鉢	(13.8)			1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	583住27	286
81	583住	須恵器	平瓶	(6.2)			3/4		ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	583住5	196,263
82	583住	須恵器	平瓶					完	ロクロナデ、カキ目、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	583住20	199
83	583住	須恵器	甗	(21.6)				完	ロクロナデ、タタキ→回転ナデ消し	ロクロナデ、当て具痕ナデ消し	583住4	234
84	包含層	須恵器	蓋	9.5		2.7			ロクロナデ→天井部回転ケズリ	ロクロナデ	包含層1	326

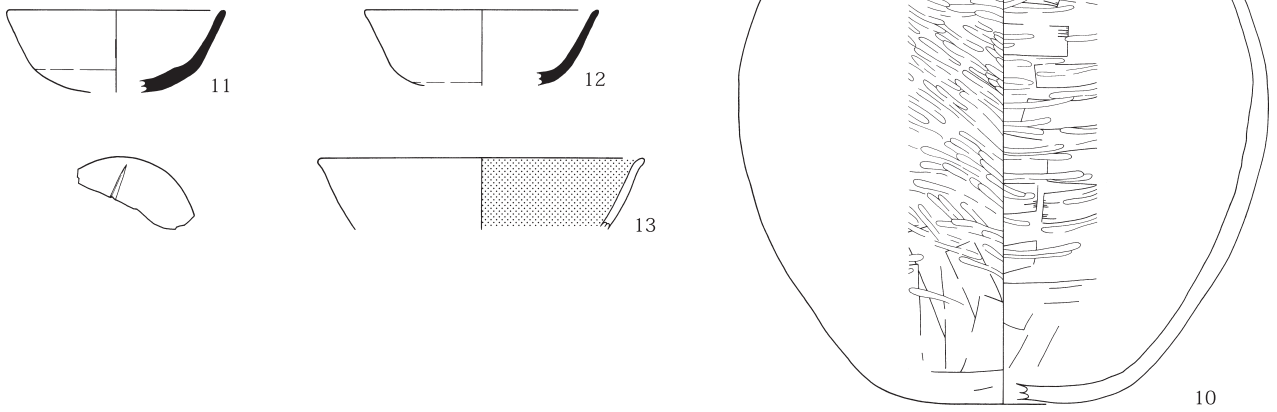
※種別の略称は「黒色A」が黒色土器Aを指す。

※寸法の()は、反転復元し、計測したもの。

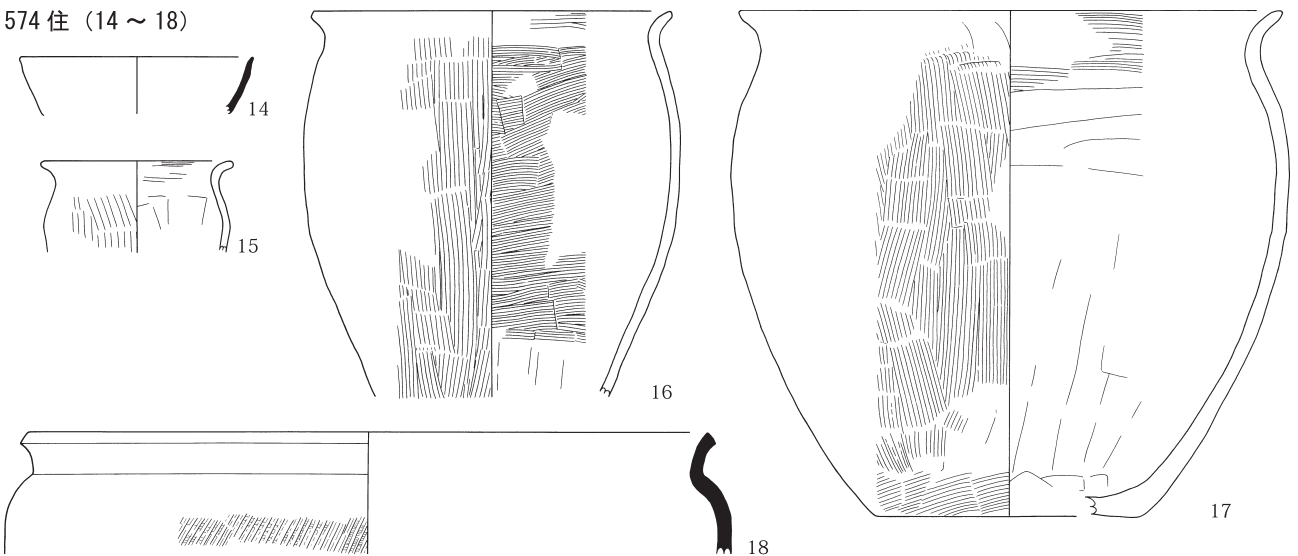
572 住 (1 ~ 10)



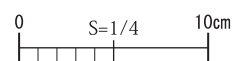
573 住 (11 ~ 13)



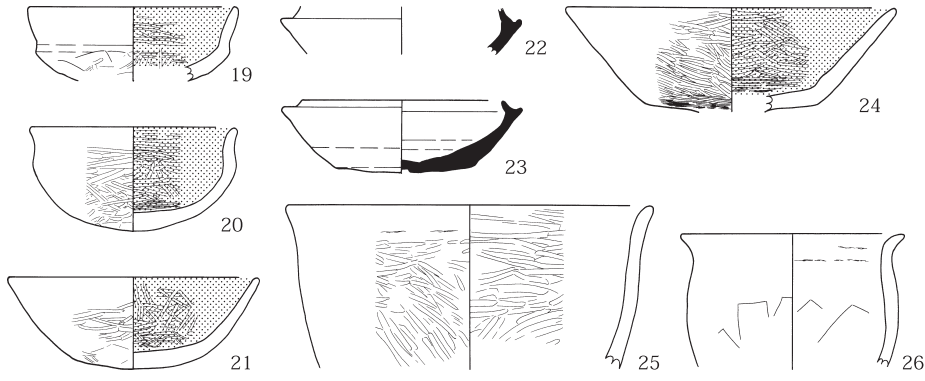
574 住 (14 ~ 18)



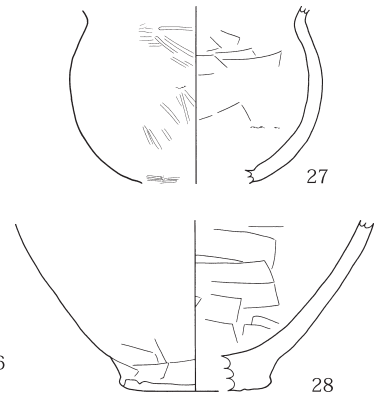
第 10 图 土器 (1)



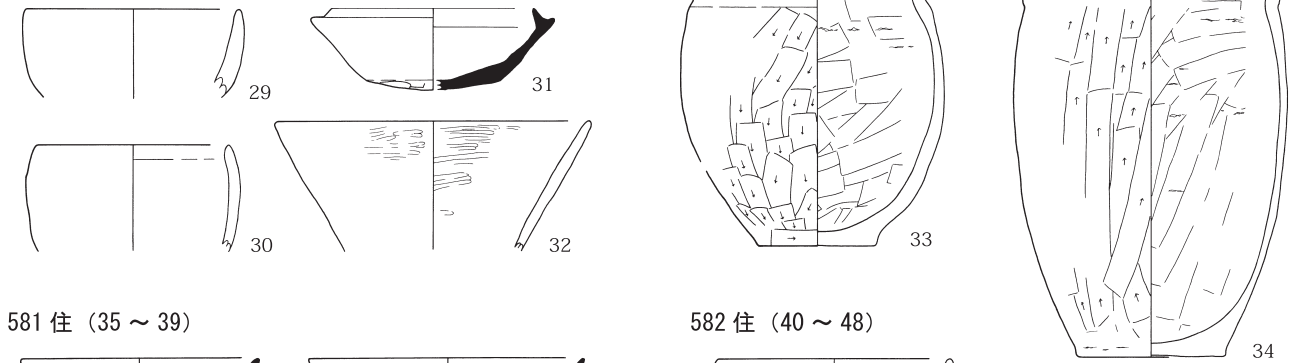
576 住 (19 ~ 26)



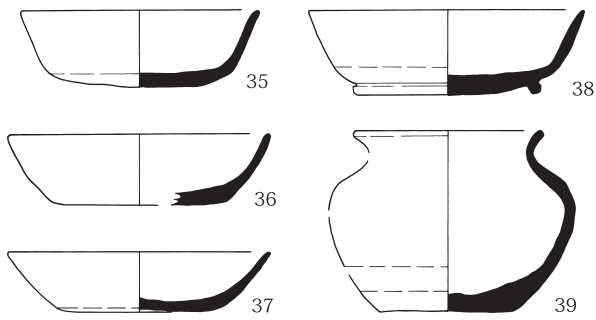
577 住 (27 · 28)



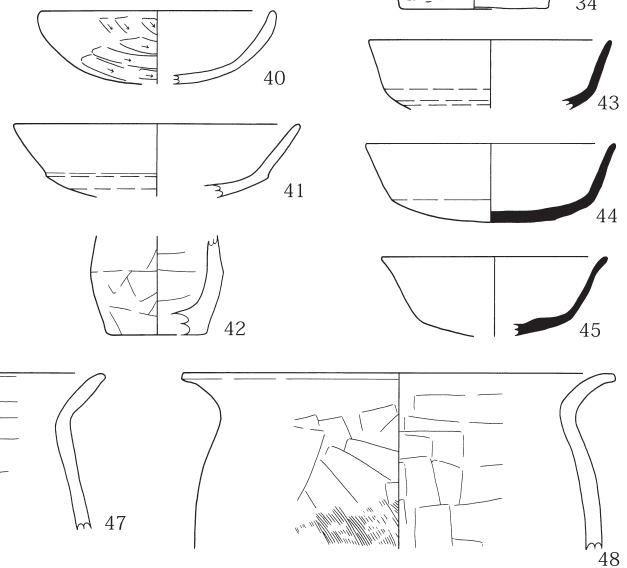
579 住 (29 ~ 34)



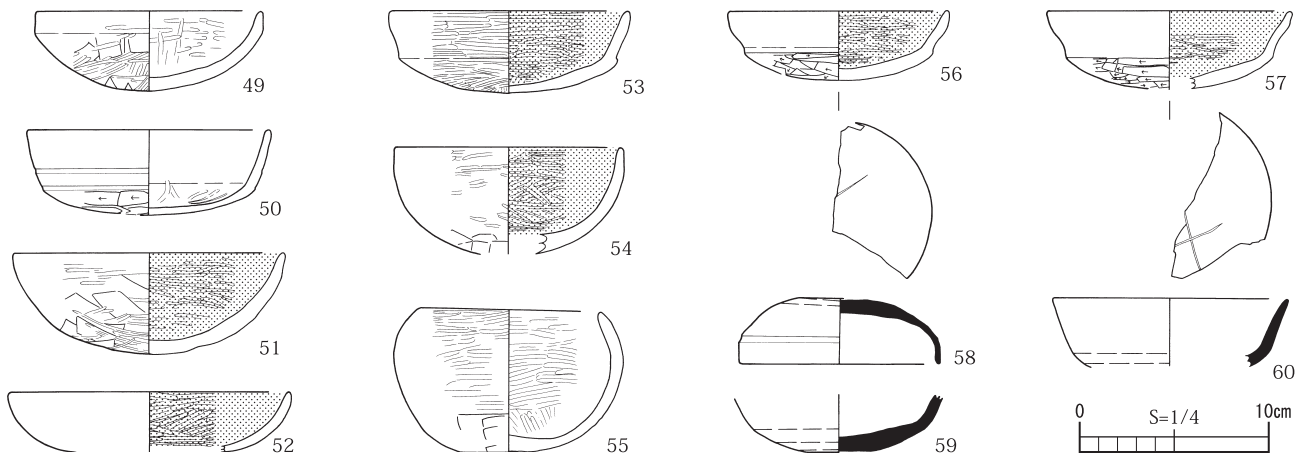
581 住 (35 ~ 39)



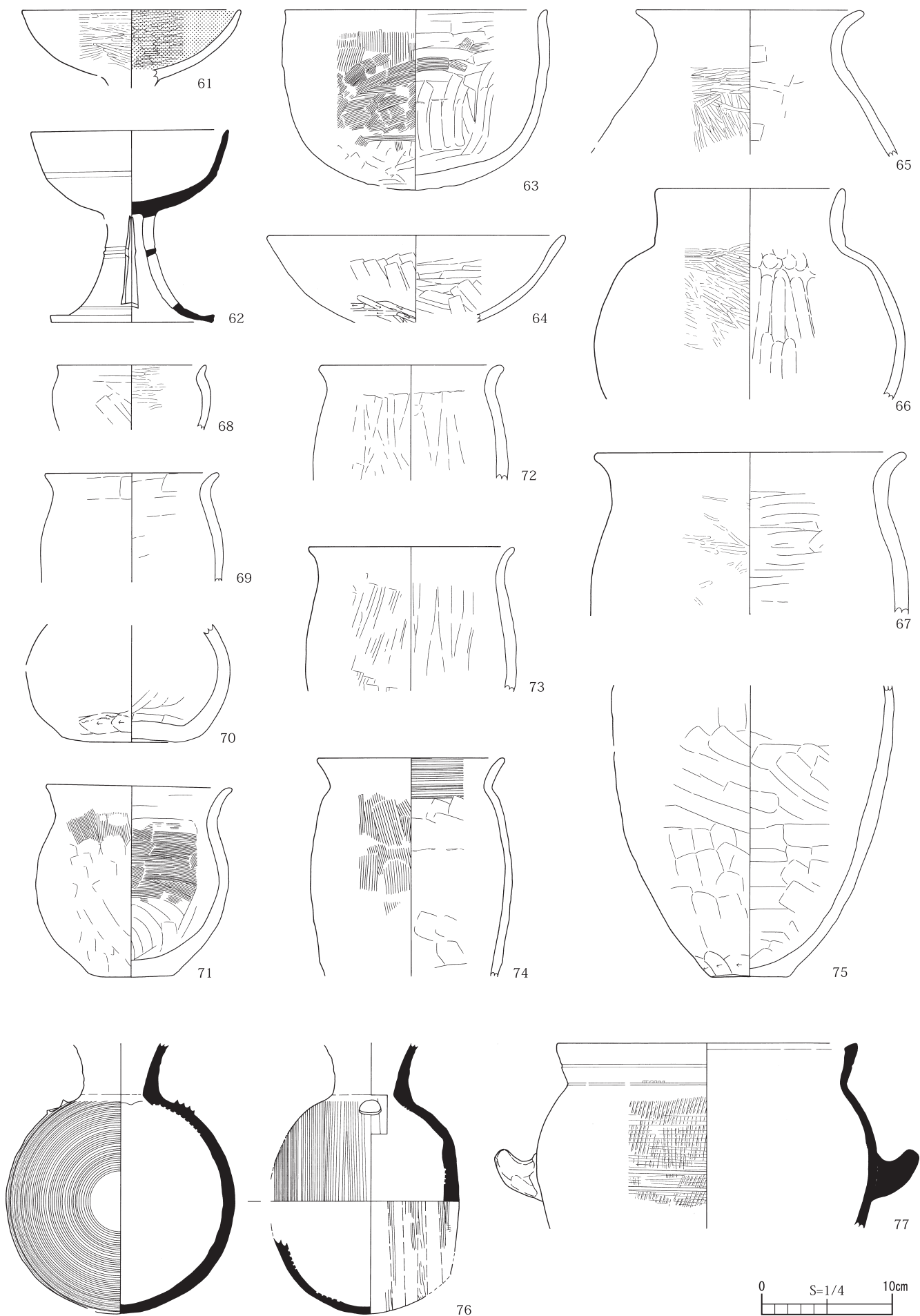
582 住 (40 ~ 48)



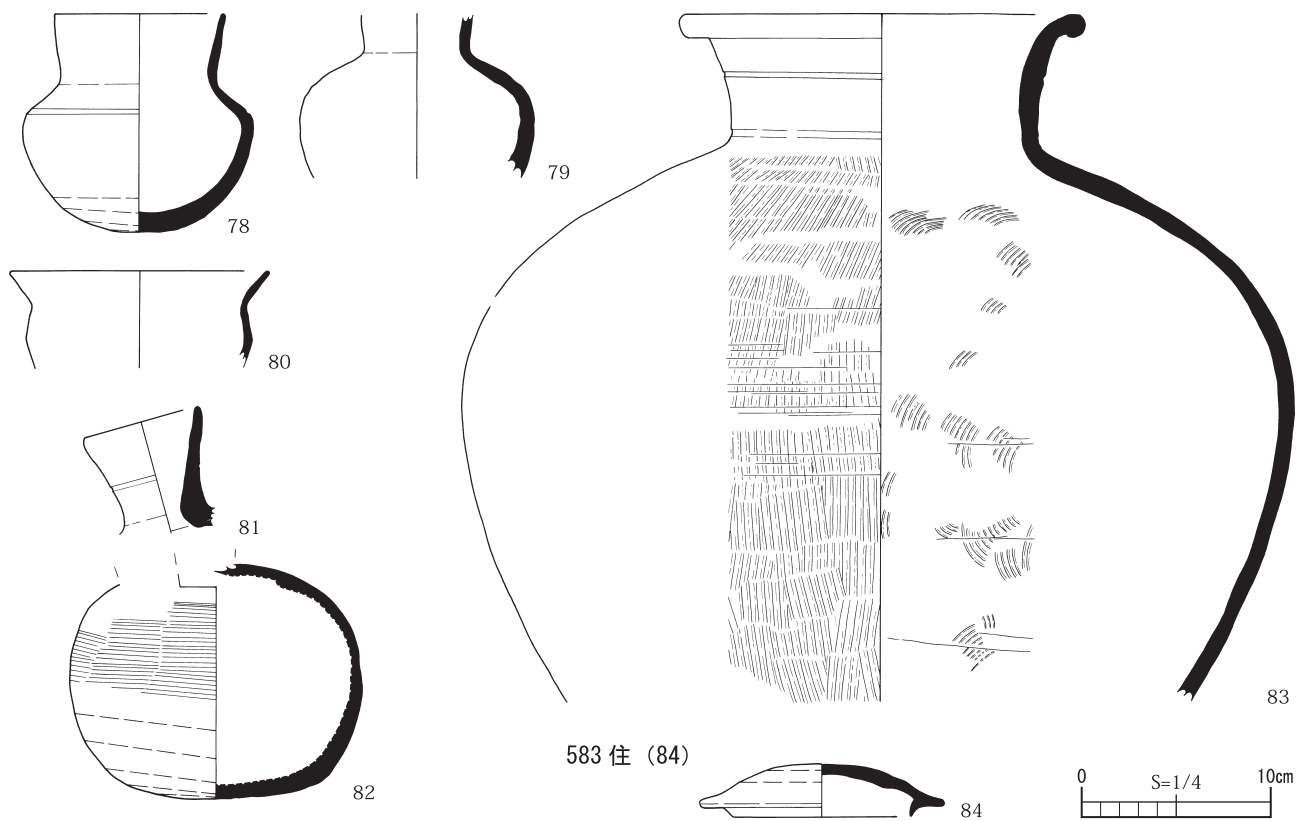
583 住 (49 ~ 83)



第11图 土器 (2)



第12图 土器 (3)



第13図 土器 (4)

2 金属器 (第14図、第5表)

合計31点の金属器が出土し、全て住居址出土で、刀子5点、鎌3点、鍬4点、耳環1点、轡1点、鉄滓1点、不明鉄製品15点である。なお、ID29は鉄分がなく遺物ではないため欠番とした。不明鉄製品の中には棒状のものが多く、断面形状から鍬の柄あるいは紡錘車の紡軸などが考えられるが確定はできない。また、調査地が旧県営住宅解体後であるため、基礎に含まれる鉄筋などが混入してしまった可能性があり、第5表に記載した。本書では15点を図化提示し、以下図化した資料を中心に述べたい。

刀子 (1~4)

1は582住P7上面から出土した。茎尻が欠損する。刃関はなく、棟関は緩傾斜の関である。身部は関部から主に棟側が反りをもちながら減幅し切先が尖る。2は574住下層から出土した。切先、茎尻が欠損する。関は不明瞭であるが、茎部から身部にかけて緩やかに幅を増す。刃部は使用減り・研ぎ減りのためかわずかに反りがみられる。3は572住覆土上層出土である。身部と茎部の一部で、刃関のみの片関で緩やかに傾斜する形態である。わずかではあるが、身部は棟側が反りあがる形態が観てとれる。4は583住覆土上層から出土している。緩やかな両関であるが、研ぎ減りによるものか身部は棟側・刃側ともに急激に減幅する。1・3・4が古墳時代後期、2が奈良時代前半の土器と共伴する。

鎌 (5~7)

5は581住上層から出土している。着柄部で刃部の大半が欠損する。着柄部端の上側半分ほどを折り返し、下端隅は角丸状に処理されている。着柄部から棟側は直線的であるが、刃側が減幅する。基部端まで刃が形成され、着柄部と刃部の区分はない。また、欠損する身部の端で刃に直交する反りが確認でき、欠損部を境に折れた可能性が高い。6は583住の繊維状炭化物上面から出土した。身部先端を欠損する。着柄部の下端は欠損するが、端部全体を折り返したものと考えられる。着柄部と刃部がほぼ同幅であるが、わずかに湾曲する。着柄部と刃部の区分は不

明瞭である。7は572住の覆土中より出土した。刃部のみで着柄部は欠損するため、折り返しの形状は不明である。刃部の湾曲は緩やかで、最大幅にもあまり差は見られない。いずれも、柄に対する身部の取り付け角度は直角からわずかな鈍角と考えられる。

鏃 (8~11)

8は583住の覆土中から出土した。身部と篋被部の境が不明瞭である。身部は蕾状を呈し、身部の断面は片平造りである。9は582住の覆土下層から出土した。身部で先端部が欠損する。身部平面形はやや縦長の三角形を呈し、断面形は両丸造りである。身部関は角状で、篋被はやや長めで関は台状と推測される。10は581住の南壁際の覆土上層から出土した。篋被部のみが残り、関は撥状を呈する。身部の平面形は不明であるが、8と同じく蕾状もしくは蛇頭状を呈すると考えられる。10は581住から覆土中から出土し、茎部から篋被部の一部である。篋被部の関は撥状と考えられるが、身部の平面形は不明である。

耳環 (14)

583住の床面近くから出土した。鉄地金銅貼のもので、鍍金・銀の痕跡は剥落のためか確認できない。最大環径は2.82cmで、最大厚0.8cmである。

轡 (15)

583住床面から出土した。銜と鏡板が残存する。文献1の分類によると、鏡板の形態から素環鏡板付轡に分類される。立聞の形状でさらに分類可能であるが、引手、立聞、遊環等は確認できない。立聞は鍛接するもの、兵庫鎖等の別作りのものをつけるもの、素環の一部を絞って瓢型に大小の輪を作り、このうち小さい方を立聞とする形態が知られている。本品は、素環を絞った痕跡はなく、鍛接した板状立聞が剥がれた明瞭な痕跡も確認できない。遊環や兵庫鎖等が付属していた可能性もあるが、もともと立聞が伴わない立聞空連素環鏡板付轡など、簡易な形態であったとも考えられる。鏡板は正円形で、環径は7.5cmである。銜は2連式で、脚金・銜先ともに鉄棒の先を折り曲げることによって連結している。左右の鉄棒の長さが6.7cmと11.1cmと異なっている。

不明鉄製品 (12・13)

12は576住の覆土中から出土し、断面形状は方形である。13は577住の覆土中から出土し、断面は矩形である。

参考文献

1 坂本美夫 1985『考古学ライブラリー34 馬具』ニュー・サイエンス社

2 小松望 1989「金属製品と鍛冶試料」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3-塩尻市内その2-吉田川西遺跡』長野県教育委員会

3 石器 (第15図、第6表)

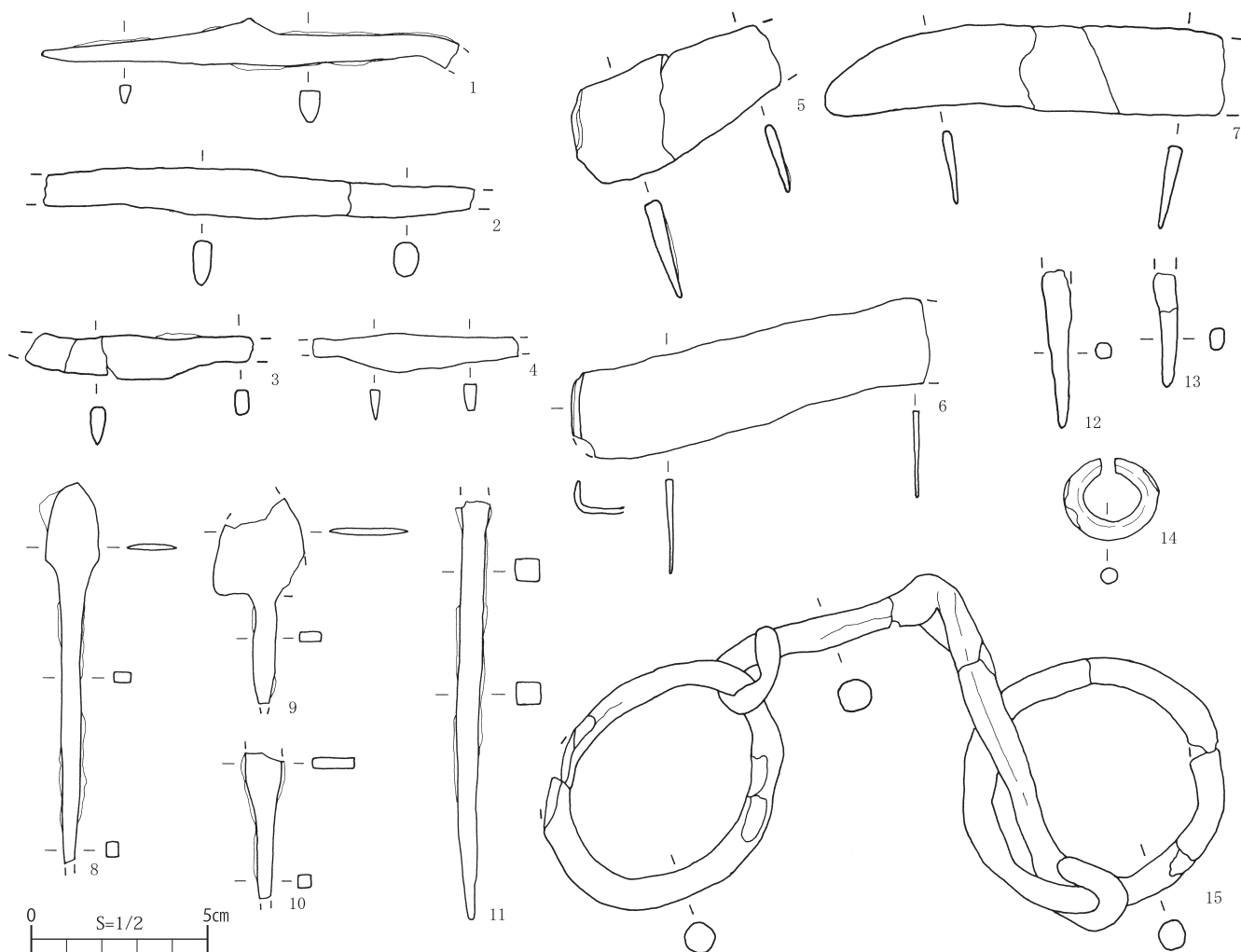
合計10点の石器が出土した。器種の内訳は、砥石3点、台石2点、打製石斧1点、石核2点、碎片1点、礫片1点である。これらのうち砥石と台石の5点を図示し、概要を記すが、それら以外のものは一覧表を参照されたい。

砥石 (1~3)

1は574住から出土。形状は、断面方形の角柱状を呈する。断面逆三角形状の溝を有する面を正面に図示した。上面・下面は自然面と考えられる。2は直方体礫を素材にし、表裏面に砥面が観察される。3は588住から出土。断面方形の長楕円状を呈し、表裏面・両側面に研磨面と線条痕が観察される。上面に敲打によるツブレ状の使用痕が認められる。

台石 (4・5)

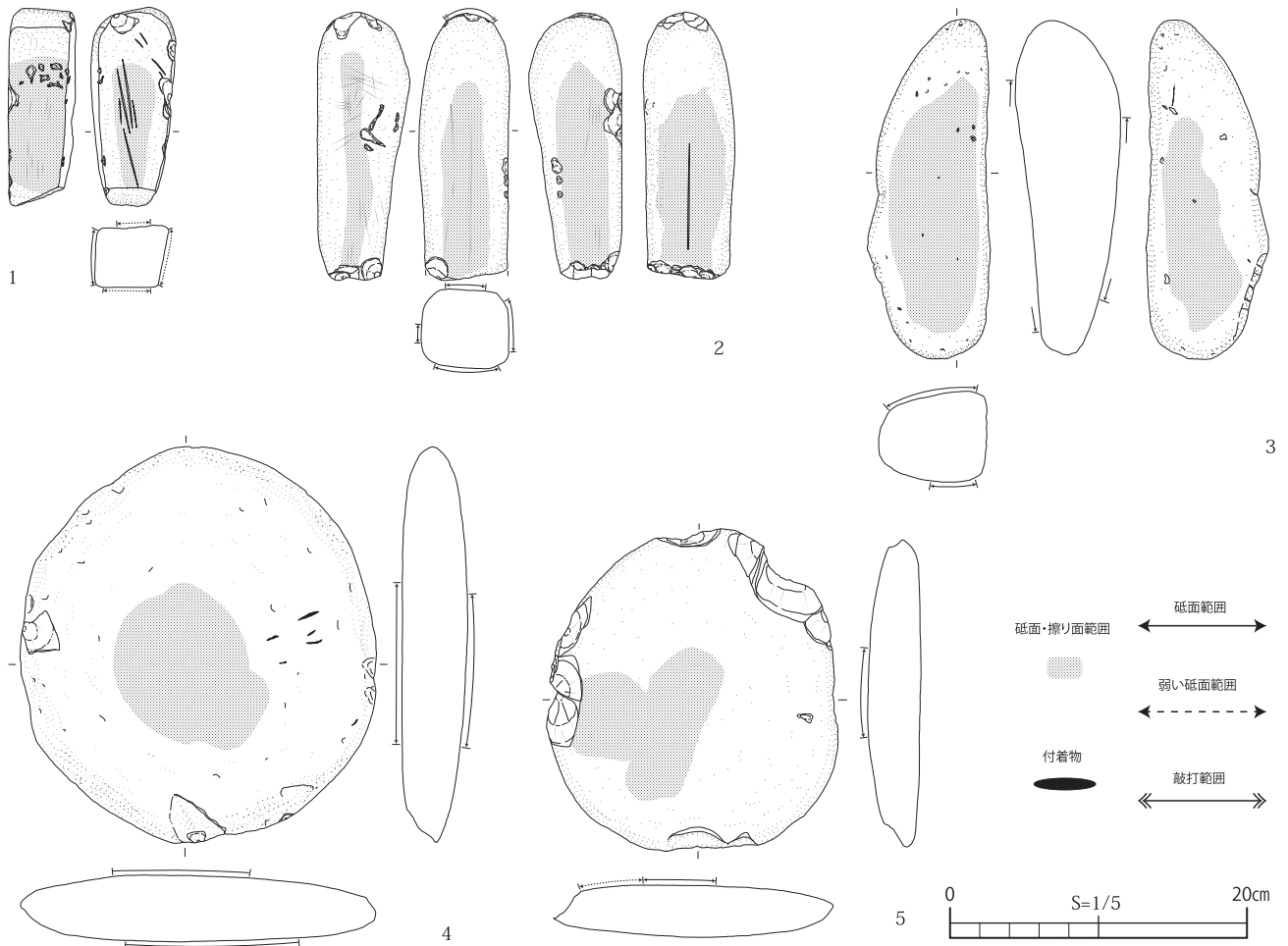
両者とも偏平な円礫を素材にし、平坦面に擦り痕が認められる。2000g以上の重量があり、床に置いて使用したと想定されることから「台石」とした。4は576住の粘土塊の近くから出土した。片面中央付近に光沢を伴う強い擦り痕とその左側に弱い擦り痕の範囲が認められる。側辺は敲打され、石錘に似た形状になっている。5は574住の土師器甕(第10図 17)の下、床直から出土し、両面中央に光沢を伴う強い擦り痕が認められる。



第14図 金属器

第5表 金属器観察表

図No.	ID	出土地点	器種	部位	断面形状	寸法(mm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
7	1	572住	鎌	身部・茎部		113.9	24.7	4.4	20.6	
3	2	572住	刀子	関		64.4	13.2	5.5	7.9	
3	3	572住	刀子	身部		27.0	11.9	4.8	2.7	
2	4	574住	刀子	切先・茎尻欠		120.8	14.0	6.5	18.5	
12	5	576住	不明			43.9	7.3	6.4	2.8	
	6	576住	不明		丸	63.5	10.7	10.2	27.3	鉄筋片?
13	7	577住	不明			31.7	5.9	5.0	1.4	
	8	577住	不明		矩形	16.1	4.2	3.9	0.5	棒状
	9	579住	不明		丸	94.1	7.5	7.5	30.9	鉄筋片?
	10	579住	不明			28.5	19.4	5.1	6.4	鎌の端部か
	11	581住	不明		丸	24.5	6.7	5.3	1.1	棒状
	12	581住	滓						6.6	
5	13	581住	鎌	着柄～身部		61.8	30.4	5.0	17.6	
10	14	581住	鎌	籠被～茎部		41.3	12.8	6.4	4.3	
	15	581住	不明	破片		24.5	13.6	4.2	2.0	
	16	581住	不明	破片		11.7	9.1	3.5	0.5	
	17	581・582住	不明			45.1	21.8	2.8	9.4	現代か
1	18	582住	刀子	切先～茎		118.3	16.0	6.9	15.4	
9	19	582住	鎌	籠被～身部		58.5	25.9	5.1	6.1	
	20	582住	不明		矩形	44.5	8.3	7.8	3.9	棒状
	21	582住	不明		矩形	37.8	6.9	6.3	2.0	棒状
	22	582住	不明		方形	23.5	4.3	2.8	0.4	棒状
11	23	582住	鎌	籠被～茎部		119.0	9.0	7.3	13.0	
4	24	583住	刀子	関～茎部		58.2	11.6	6.2	6.3	
15	25	583住	轡	銜・鏡板		184.0	79.0	8.0	79.2	
14	26	583住	耳環			28.2	24.1	5.5	10.2	
8	27	583住	鎌	身部～茎部		107.6	16.1	4.1	10.8	
6	28	583住	鎌	着柄～身部		104.1	28.5	11.7	34.6	
	29	583住	鉄分なし							廃棄
	30	583住	不明		矩形	22.8	11.9	6.0	2.4	
	31	583住	不明			20.3	11.9	3.1	1.3	鏢か?



第15図 石器

第6表 石器観察表

図No.	ID	出土地点	種類	石材	寸法(cm)※1			重量(g)※1,2	破損状況	備考
					長さ	幅	厚さ			
5	1	574住	台石	砂岩	20.70	19.30	3.60	2100.0		片面中央に擦り痕あり、側面敲打痕あり、扁平円礫素材、炭化物付着
3	2	574住	砥石	砂岩 (細～中粒砂)	22.20	8.20	7.30	1610.0		砥面2面、中砥、楕円礫素材
1	3	574住	砥石	砂岩 (中粒砂)	13.62	5.79	4.38	566.1		砥面5面(うち1面は線条痕あり・2面は弱い研磨面)、中砥、直方体礫素材
	4	574住	碎片	黒曜石	0.95	1.45	0.19	0.1		横長剥片
4	5	576住	台石	砂岩	25.60	23.80	4.60	4140.0		両面中央に擦り痕あり、側面にわずかに敲打痕あり、扁平円礫素材、付着物あり(鉄分か)
	6	577住	石核	チャート	1.89	2.66	1.75	9.6		打面数3面以上、剥離面数6面以上
	7	577住	自然礫	石墨	1.73	1.73	1.57	2.9		
	8	583住	打製石斧	砂岩	11.57	6.72	1.94	178.5		片面加工、短冊形、斜刃
	9	583住	剥片	チャート	(1.56)	(1.84)	(0.74)	(2.0)	打面部折れ	
2	10	588住	砥石	砂岩 (細～中粒砂)	(16.80)	6.35	6.00	(1077.8)	下部折れ	砥面4面(全面に線条痕あり)、上部先端敲打痕あり、中砥、直方体礫素材
	11	攪乱	石核	チャート	2.79	4.97	3.78	76.5		原石面打面(打面数は3打面以上あり)
	12	表採	石核	黒曜石	2.01	2.99	2.57	15.3		剥離面打面(打面数は3打面以上あり)

※1 寸法・重量欄の()は残存値をあらわす

※2 1200g未満は0.1g単位、1200g以上は10g単位

第Ⅳ章 総括

調査成果のまとめ 今回の調査地点では、古墳時代後期～奈良時代の集落を確認した。調査地北側は撓乱により遺構の分布を確認できなかったが、撓乱下にわずかに残った住居址覆土の観察や周辺の調査地点での成果から考えると、調査地四方に遺構が続くものと考えられる。

確認できた竪穴住居址は古墳時代後期が9軒、奈良時代が3軒の計12軒で、7世紀中葉～8世紀中葉に収まるものである。4次調査地点を中心とした古墳時代後期の集落が、住居数を増加・拡大し最盛期を迎える時期と一致する。古墳時代後期とした住居址でも、7世紀末～8世紀前葉と考えられるものもあるため、調査地内における遺構の断絶はなく、継続的なものと推測される。

古墳時代後期の住居址の中でも、第583竪穴住居址は1辺約8.6m、床面積が約74㎡に復元される。他の住居址の約2～3倍の床面積を有する大型住居址である。焼失住居で、床面や炭化材の上からも多量の遺物が出土している。出土遺物の年代は7世紀中葉と考えられ、該期の遺構一括出土品として良好な資料となろう。出土遺物の中には2次被熱を受けて器面が荒れたものがみられる。特に須恵器の提瓶は明らかな2次被熱による器面の剥離が観察できる。また、馬具や耳環といった特殊遺物も出土しており、住居の規模・焼失住居址と併せて考えると特異な印象を受ける。

参考として、出川南遺跡における過去の調査地点における住居址規模のグラフ（第16図）を載せた。現在までに遺跡全体で約510軒の住居址が調査されているが、重複や撓乱等により正確な数値が計測できないものが多い。多少強引ではあるが、推定値を載せたものもある。帰属年代が明らかにできているものでは、全体の約40%が古墳時代後期に属し、今後整理作業が進めばさらに増えるものと考えられる。4次調査地点では1辺が約7m以上の大型建物址が5軒検出されており、小～中型の一般的な住居とは距離を隔てて位置する。出土遺物は豊富で583住と同様に焼失住居である場合もある。各段階を通して、集落の小単位に大型住居址が1～2軒存在しており、本址も同様な性格をもった住居址と考えられる。

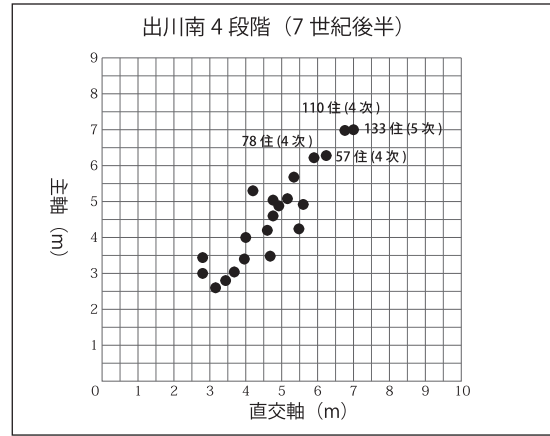
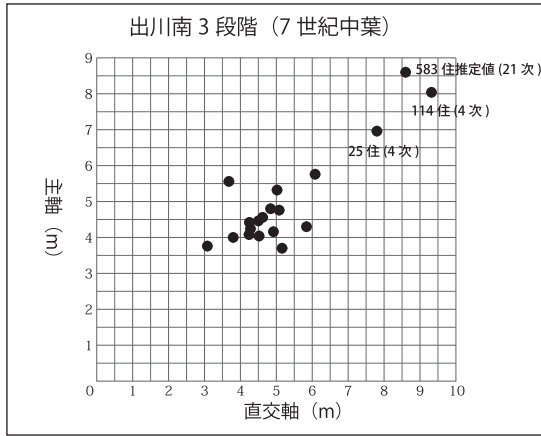
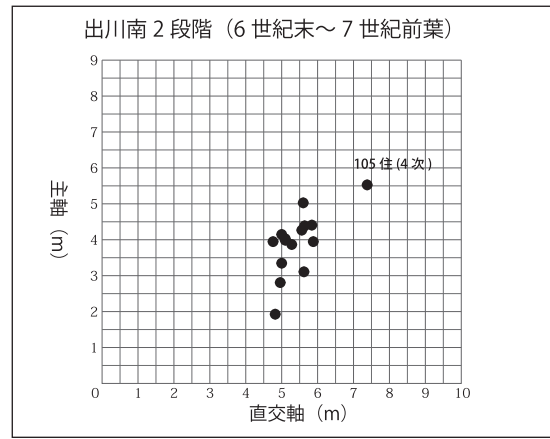
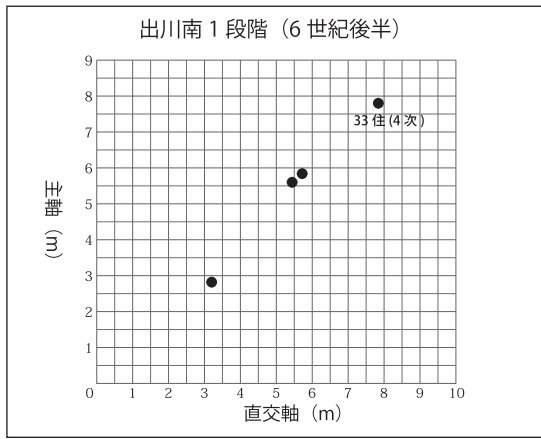
耳環・馬具について 583住の床面近くから出土している。過去の市内における耳環・馬具の出土例を第7・8表に掲載した。整理作業が終了し、報告書刊行済みのものに限っているため、実際にはもう少し出土例は多い。

市内の過去の調査においては報告分だけで38点の耳環が出土している。大半が古墳出土であり、住居址出土のものは南栗遺跡77住、旧射的場西遺跡1住、北栗遺跡5次9住、出川南遺跡27・64住など数例しかない。いずれも古墳時代後期～奈良時代初頭で、6世紀末～8世紀前葉に属するものである。各遺構の出土は1点のみで、古墳副葬品のように対になるような出土例はない。

馬具も市内の過去の調査において18例が確認される。耳環同様に古墳出土のものが多く、集落出土で確実に馬具であると判断できるものは多くない。欠損などで部分的な残存状態である場合は断定できず、不明鉄製品の中にも多く含まれていると考えられる。古墳時代に属するものは山影遺跡4住、出川南遺跡133住で、古代以降、特に平安時代の9世紀以降になると住居内でも馬具が散見されるようになる。平安時代の『延喜式』によると律令期に信濃に置かれた御牧は16で、最大の貢馬国であった。その背景には伊那谷を中心とした古墳時代中期以降の盛んな馬匹生産があったとされる。市域でも埴原牧や大野牧が推定され、現在、市域では確実な馬の埋葬例は確認されていない。後期古墳の副葬品から考えると、当地も馬との関わりがあったことは明らかで、今後の出土例の増加に期待したい。

耳環・馬具のいずれも古墳時代住居址出土としては例が少なく、582号住居址、あるいは出川南遺跡の古墳時代後期の集落の性格を物語るものと考えられる。

最後に本調査の実施に際して多大なるご協力を頂いた長野県住宅課、並びに県営住宅南松本団地・芳野町会をはじめとする地元関係者の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。



第 16 図 出川南遺跡の竪穴住居址規模

第 7 表 市内耳環出土遺跡一覧

遺跡名	地区	出土遺構	報告 図No.		寸法(mm)			備考	文献 No.
					最大長	最大幅	最大厚		
新村安塚古墳群	新村	5号墳	47	金環	17.0	17.0	4.0		1
新村安塚古墳群	新村	8号墳	3		25.0	25.0	6.0		1
新村安塚古墳群	新村	8号墳	4	金環	19.0	20.0	5.0		1
新村安塚古墳群	新村	8号墳	5		20.0	21.0	4.0		1
新村安塚古墳群	新村	8号墳	6	金環	18.0	17.0	4.0		1
南栗遺跡	島立	77住	3	金環	14.5	16.5	3.5	南栗Ⅰ期、519×363mの住居、7世紀後半	2
南方古墳	入山辺		1	金環	19.4	20.7	6.6	7世紀中～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
南方古墳	入山辺		2	金環	22.3	24.0	5.9	7世紀中～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
南方古墳	入山辺		3	金環	22.3	23.4	6.3	7世紀中～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
南方古墳	入山辺		4	銀環	23.4	(25.6)	6.0	7世紀中～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
南方古墳	入山辺		5	金環	27.4	29.7	9.5	7世紀中～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
南方古墳	入山辺		6	金環	32.5	15.9	9.0	垂飾付耳飾	3
南方古墳	入山辺			金環				垂飾付耳飾?	3
旧射の場西遺跡	沢村	1住	8	金環	22.0	21.5	7.5	焼失住居、580×450mの住居、7世紀後半	4
北栗遺跡	島立	5次9住	61	金環?	20.0	18.0	4.0	南栗Ⅲ期、449×(226)mの建物8世紀前葉	6
丸山古墳	里山辺		51	銀環	27.2	24.5	6.5	他に2点、6世紀中頃～7世紀代	11
塩辛遺跡	岡田・洞・稲倉	9建	2		36.0	35.0	9.0	鉄製・耳環?、古墳後期	12
出川南遺跡	双葉	27住	1	金環	32.0	28.0	8.0	出川南3期、400×380mの住居、7世紀中葉	15
出川南遺跡	双葉	64住	2		27.0	24.0	6.0	出川南2期、546×584mの住居、6世紀末～7世紀前葉	15
中山古墳群	中山	38号墳	15		19.0	23.0	5.1	6世紀後半	20
中山古墳群	中山	52号墳	31	銀環	(28.0)	32.8	8.8	6世紀前半～中葉	20
中山古墳群	中山	52号墳	32	銀環	29.4	32.3	7.7	6世紀前半～中葉	20
中山古墳群	中山	53号墳	39	銀環	26.1	28.4	9.5	6世紀後半	20
中山古墳群	中山	53号墳	40	銀環	(31.3)	(35.2)	12.7	6世紀後半	20
中山古墳群	中山	53号墳	41	銀環	29.4	32.6	6.4	銅地、6世紀後半	20
中山古墳群	中山	55号墳	89	銀環	20.2	23.5	5.1	7世紀末	20
中山古墳群	中山	55号墳	90	銀環	20.8	23.6	5.5	7世紀末	20
中山古墳群	中山	55号墳	91	銀環	26.3	29.8	6.8	7世紀末	20
妙義山古墳群	本郷	2号墳	1		33.0		8.0	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	2		31.5		7.0	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	3		29.7		7.2	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	4		29.7		6.8	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	5		25.0		5.0	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	6		23.3		5.0	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	7		25.0		4.9	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	8		24.6		5.0	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	9		25.8		3.8	古墳時代後期初頭	22
妙義山古墳群	本郷	2号墳	10		23.8		3.8	古墳時代後期初頭	22

第8表 市内馬具出土遺跡一覧

遺跡名	地区	出土遺構	内容	備考	文献No.
南方古墳	入山辺		轡1、鞍3、鉸具11、辻金具2、飾金具2、釣舌金具2、立間1、鉸具付杏葉2、鐘付杏葉3、鏡1	7世紀中葉～後半築造、8世紀初頭まで追送	3
向畑遺跡	中山	向畑8号墳	鞍3、鏡2、雲珠・辻金具2、鉸具3、留金具1	6世紀末～7世紀初頭築造、7世紀末まで追送	5
小原遺跡	芳川	14住	杏葉1	山茶碗出土	7
山影遺跡	中山	遺構外	鉸具1	縄文住居址への流れ込み	8
山影遺跡	中山	41住	留金具？1	古墳中期、5世紀後半	8
針塚古墳	里山辺		鉸具1	5世紀後半	9
小丸山古墳	中山		鉸具1	7世紀末～8世紀初頭	10
下原遺跡	里山辺	7住	留金具1	古代2期	13
北栗遺跡	島立	1住	「S」字状金具1、轡1	古代14期	14
平田里古墳群	双葉	1号墳	轡1、鉸具1、引手？2	5世紀後半～6世紀初頭	15
川西開田遺跡	今井	溝9	逆U次状金具2	古代9期	16
出川南遺跡	芳川	133住	轡(引手)1	古代1期	17
平瀬遺跡	島内	11住	轡(引手)1	古代14期	18
南栗遺跡	島立	4005住	蹄鉄1	古代14期	19
中山古墳群	中山	38号墳	轡2、鉸具1	6世紀後半	20
中山古墳群	中山	ア地区西南部トレンチ	鞍or鉸具1		20
妙義山古墳群	本郷	2号墳	轡3、雲珠1、鉸具2、留金具7、	古墳時代後期初頭	22
県町遺跡	県	141住	轡？1	古代5期	23

参考文献

- 松本市教育委員会 1979 『松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1985 『松本市文化財調査報告No.35 松本市島立南栗・北栗遺跡 高綱中学校遺跡、条理的遺構—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No.74 松本市大塚古墳 南方古墳 南方遺跡—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1989 『松本市文化財調査報告No.78 松本市沢村旧射の場遺跡 変電所建設に伴う緊急発掘調査概報』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No.83 松本市向畑遺跡Ⅲ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No.85 松本市北栗遺跡Ⅳ・Ⅴ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No.86 松本市小原遺跡—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1990 『松本市文化財調査報告No.100 松本市山影遺跡—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1991 『針塚古墳の発掘』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市文化財調査報告No.101 松本市埴原北・中山古屋敷 推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ 小丸山古墳—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市文化財調査報告No.104 松本市里山辺丸山古墳—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市文化財調査報告No.105 松本市塩辛遺跡Ⅱ・Ⅲ 矢作遺跡 松蔭寺遺跡—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市文化財調査報告No.106 松本市下原遺跡Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市文化財調査報告No.109 松本市北栗遺跡—中部電力(株)鉄塔建設に伴う第2次緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1998 『松本市文化財調査報告No.115 松本市出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1998 『松本市文化財調査報告No.130 松本市境窪遺跡 川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 1999 『松本市文化財調査報告No.139 長野県松本市出川南遺跡Ⅴ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2000 『松本市文化財調査報告No.142 長野県松本市平瀬遺跡Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2000 『松本市文化財調査報告No.145 長野県松本市芝沢遺跡Ⅰ・Ⅱ 南栗遺跡Ⅳ・Ⅴ—緊急発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2003 『松本市文化財調査報告No.168 長野県松本市中山古墳群 鉸形原遺跡 鉸形原砦址—中山霊園拡張に伴う第Ⅰ～Ⅳ次発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2003 『松本市文化財調査報告No.170 長野県松本市桜ヶ丘古墳—再整理報告書—』
- 本郷村教育委員会 1966 『信濃浅間古墳』
- 松本市教育委員会 2009 『松本市文化財調査報告No.200 長野県松本市県町遺跡—第14次発掘調査報告書—』

附編

1 松本市出川南遺跡第 21 発掘調査で出現した焼土の考古地磁気

齋藤武士（信州大学理学部地質科学科）

2 出川南遺跡第 21 次調査の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

松本市出川南遺跡で行われた第 21 次発掘調査によって検出された 583 号住居跡から、被熱痕跡を示す土壤(焼土)が発見された。住居跡南西に位置する焼土はカマドの跡と考えられ、南東端に広く分布する焼土面には炭化材が散在していた。このことから 583 号住居跡は火事等で焼失した住居跡だと考えられている(本報告書)。

土壤中には強い磁性を示す鉄鉱物が含まれており、土壤がキュリー点(磁鉄鉱の場合は約 580°C)以上に熱せられた場合、冷却する際に地球磁場と平行な方向の熱残留磁化を獲得することが期待される。この熱残留磁化の方向を地磁気永年変化曲線と比較することで年代を推定する考古地磁気年代推定法は、日本では Watanabe(1959)以来多くの研究で採用され、広岡公夫による広岡曲線(Hirooka, 1971)の提出以降は、広岡曲線と比較した多くの研究例が報告されている(中島・夏原, 1981)。近年、岡山理科大学の鳥居雅之や畠山唯達らによって広岡曲線の改訂が試みられ、より信頼度の高い永年変化曲線が提案されている(Hatakeyama et al., in prep.)。

今回、松本市出川南遺跡の 583 号住居跡で発見された焼土試料を採取する機会を得た。583 号住居跡は考古学的見地より古墳時代後期(600 年前後)の住居跡だと考えられているが、妥当な考古地磁気方位が得られるか検討を行ったので報告する。

2. 試料採取

583 号住居跡南西に位置するカマド跡より 7 試料(試料番号 1-7)、南東に位置する焼土部分より 4 試料(試料番号 8-11)の計 11 試料を採取した。焼土は一辺約 10cm 程度の大きさに掘り込み、石膏で固めて実験室に持ち帰った。その際にアルミ板を用いて石膏に平滑面を作り、その面の方位を磁気コンパスで測定することで定方位で試料を採取した(図 1)。国土地理院の磁気図 2010.0 年値より試料採取地点(北緯 36° 12' 24" 東経 137° 57' 55")の西偏(7.2°)を求め、この値を用いて磁北から地理的北へ方位の補正を行った。

カマド跡の焼土はあまり固結しておらず、また焼けた床面もそれほど明瞭ではなかったため、安定な残留磁化を記録しているか疑念を持ちながらの作業であった。一方南東の焼土は固結の程度も高く、被熱による色調の変化も明瞭であった。

実験室で、一辺 15mm の立方体に整形し、測定用のプラスチックキューブに封入して磁気測定用の試片とした(図 2)。1 つの試料から複数の試片を作成した。1 試料(試料番号 7)は定方位を付けた平滑面に厚く石膏が付着しているため、今回は整形せずに保管してある。また、整形作業中に 1 試料(試料番号 6)が崩壊してしまったため、今回測定することができたのは 9 試料である。



図 1 考古地磁気試料採取の様子

3. 磁気測定方法

磁気測定は信州大学理学部の岩石磁気実験室で行った。はじめに帯磁率計(Bartington 社製 MS2)を用いて全ての試片の帯磁率を測定し、被熱の程度を評価した。次に 1 試料から 2~3 の試片を選んで残留磁化測定および段階

交流消磁実験を行い、考古地磁気方位を求めた。測定にはスピナー磁力計(夏原技研製 SMD-88)と交流消磁装置(夏原技研製 DEM-95C)を用いた。交流消磁実験は最高で 100~140mT まで行った。消磁結果に対して、Ziderveld 図上で残留磁化成分の直線性を判定し、Kirschvink(1980)の主成分解析法により方向を求めた。

4. 測定結果

4-1. 帯磁率測定結果

帯磁率は $5 \times 10^{-7} \sim 6 \times 10^{-6} (\text{m}^3/\text{kg}, \text{SI 単位系})$ の値を示した(図 3)。普通の火山岩試料よりも 1~2 桁弱い値であるが、本実験室で残留磁化を分析可能な程度の磁性鉱物が含まれていることが示唆された。カマド跡より採取した試料(試料番号 1-5)と比べて南東の焼土より採取した試料(試料番号 8-11)の方が強い帯磁率を示した。特に試料 10 と 11 は他の試料よりも 1 桁高い値を示した。これは試料 10 と 11 が赤褐色を呈し、固結度が高いという産状とも調和的である。南東の焼土の方が被熱の程度が高いと考えられる。

4-2. 段階交流消磁実験結果

9 試料から整形した 19 試片の段階交流消磁実験を行った結果、全試片から安定な磁化成分が認められた。代表的な消磁結果を図 4 に、主成分解析結果を表 1 に示す。試片 1A(図 4a)や 8C(図 4b)は原点に向かうほぼ一直線の磁化成分をもち、試料が冷却した際の熱残留磁化(初生磁化)を記録していると考えられる。試片 2A(図 4c)や 2B(図 4d)は低消磁段階で分離される磁化成分と高消磁段階で分離される成分の 2 成分からなる。低消磁段階で分離される磁化成分は熱残留磁化獲得後に付着した 2 次成分と考え、解析の対象とはしない。また試片 2B は 25mT 以上で原点に向かい、この原点へ向かう磁化成分は初生磁化と考えられるが、他の試片に比べて 25mT 以下の 2 次成分の影響が大きく、直線性も悪い(MAD=14.4°)ため、解析の対象から除外した。試料 10 は直線性の高い磁化成分を示すが、試片間で方位が大きくばらついた(図 4e, f)。同様に試片間でのばらつきが大きい試料 5 とともに解析の対象から除外した。

主成分解析の結果得られた初生磁化と考えられる残留磁化の平均方向は、偏角 = -7.6° , 伏角 = 50.0° ($k = 264.1$, $\alpha_{95} = 2.5^\circ$)であった(図 5b)。なお参考までに測定した全 19 試片から得られた残留磁化の平均方向は偏角 = -5.7° , 伏角 = 53.6° ($k = 67.8$, $\alpha_{95} = 4.1^\circ$)である(図 5a)。平均方向にはそれほど大きな変化が認められないが、方位のバラツキを示す集中度パラメータ(k)は小さく(k が大きいほど集中度が良い)、95%信頼限界円(α_{95})は大きくなる(α_{95} が小さいほど集中度が良い)。また上記のように、5 試片には除外すべき妥当な理由が認められることから、本稿では 5 試片を除いた 14 試片からの平均方位(図 5b)を考古地磁気方位として採用する。



図 2 考古地磁気測定用試片
立方体に整形した状態(左)と測定用プラスチックキューブに収めた状態(右)。

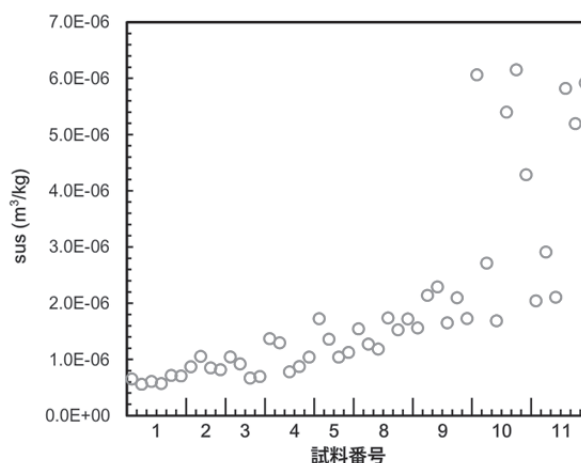
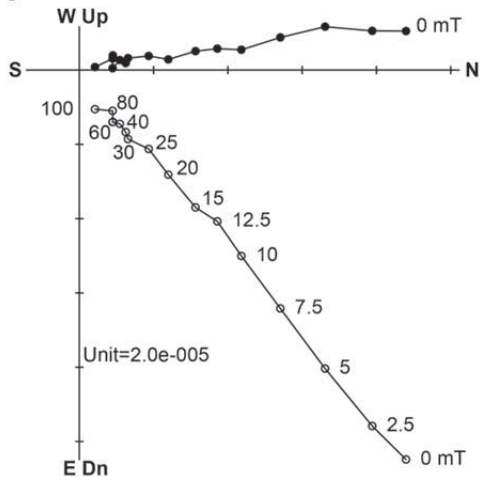
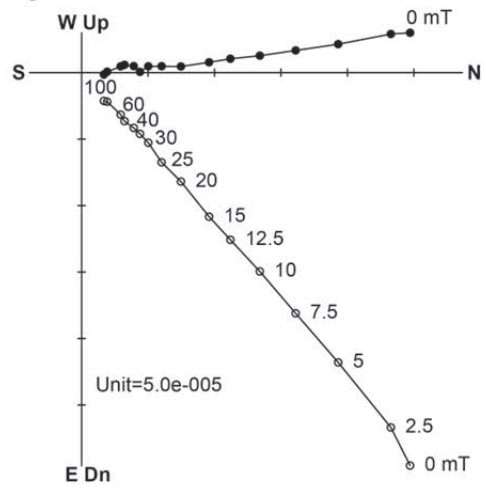


図 3 帯磁率測定結果

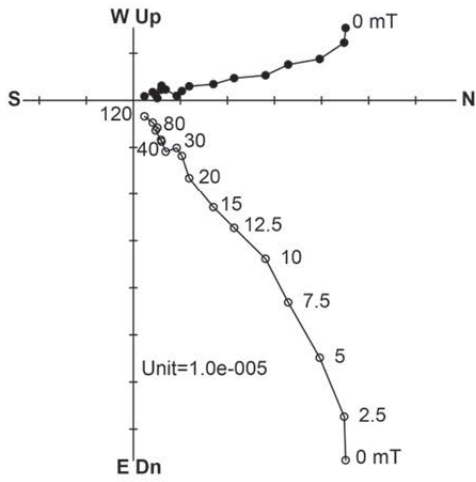
a) 1A



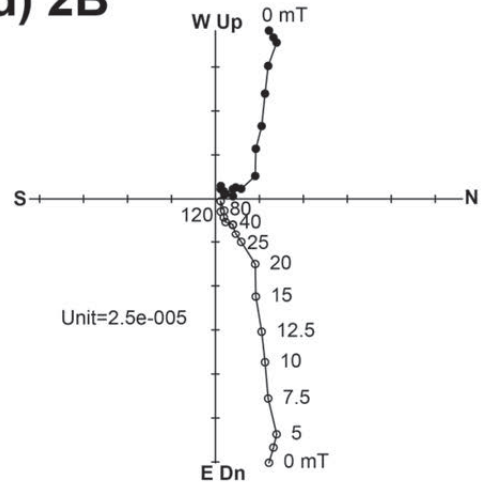
b) 8C



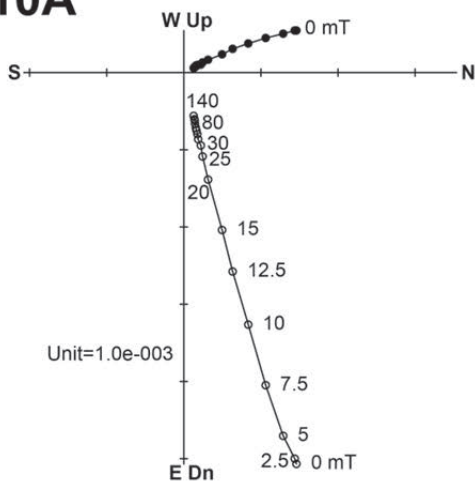
c) 2A



d) 2B



e) 10A



f) 10B

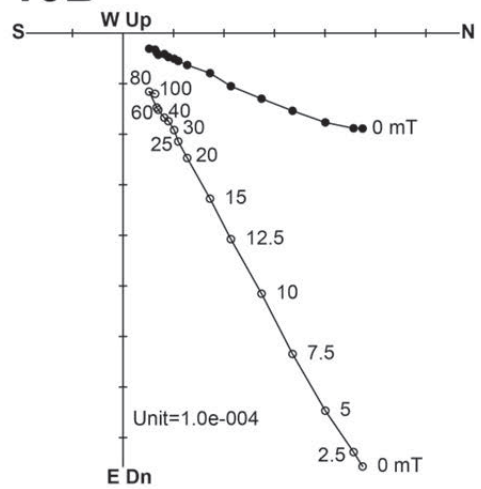


図4 代表的な試料の段階交流消磁結果(Ziderveld 図)

● : 水平面投影, ○ : 南北鉛直面投影

表 1 主成分解析結果

試片名	偏角(°)	伏角(°)	MAD(°)	消磁範囲(mT)	採否
1A	-9.2	48.6	3.0	5-50	
1B	-3.3	52.9	2.1	5-40	
2A	-10.0	50.6	4.7	10-120	
2B	-19.0	57.7	14.4	25-80	除外
3A	-5.8	46.2	5.1	5-15	
3B	-8.3	47.8	5.3	5-25	
4A	-6.0	48.8	1.8	10-30	
4C	-7.5	53.2	5.2	5-15	
5A	12.7	53.1	1.5	10-35	除外
5C	7.3	69.5	3.7	5-80	除外
8A	0.2	49.0	2.4	2.5-120	
8B	-1.0	46.4	1.4	5-60	
8C	-6.9	48.6	1.4	2.5-100	
9A	-6.3	44.1	2.1	5-100	
9C	-16.4	51.0	0.8	2.5-30	
10A	-23.0	73.9	0.7	7.5-140	除外
10B	23.2	59.3	0.9	5-100	除外
11A	-19.3	52.0	1.9	12.5-100	
11C	-8.9	59.0	6.9	15-120	

5. 考察

得られた考古地磁気方位を地磁気永年変化曲線と比較する。永年変化曲線としては、これまで多くの研究が採用してきた広岡曲線(Hirooka, 1971)と、最新のデータを反映させ、より信頼性を高めた Hatakeyama et al. (in prep.)により提出された曲線を用いる。両曲線ともに地磁気双極子仮説(例えば小玉, 1999)に基づいて、試料採取地点の値に変換してある。

広岡曲線と比較すると、95%信頼限界円と重なるのは、50-100年、950-1100年(もっとも近づくのは1050年)、そして現在である(図 6a)。一方 Hatakeyama et al. (in prep.)と比較すると、450-550年(もっとも近づくのは500年)と現在となる(図 6b)。両曲線とも現在の地磁気方位と考古地磁気方位が重なるが、最近試料が被熱した形跡がないこと、また今回得られた残留磁化は高交流磁場まで安定で、熱残留磁化起源であると考えられることから、現在の地磁気方位を記録している可能性は低い。50-100年については、Hatakeyama et al. (in

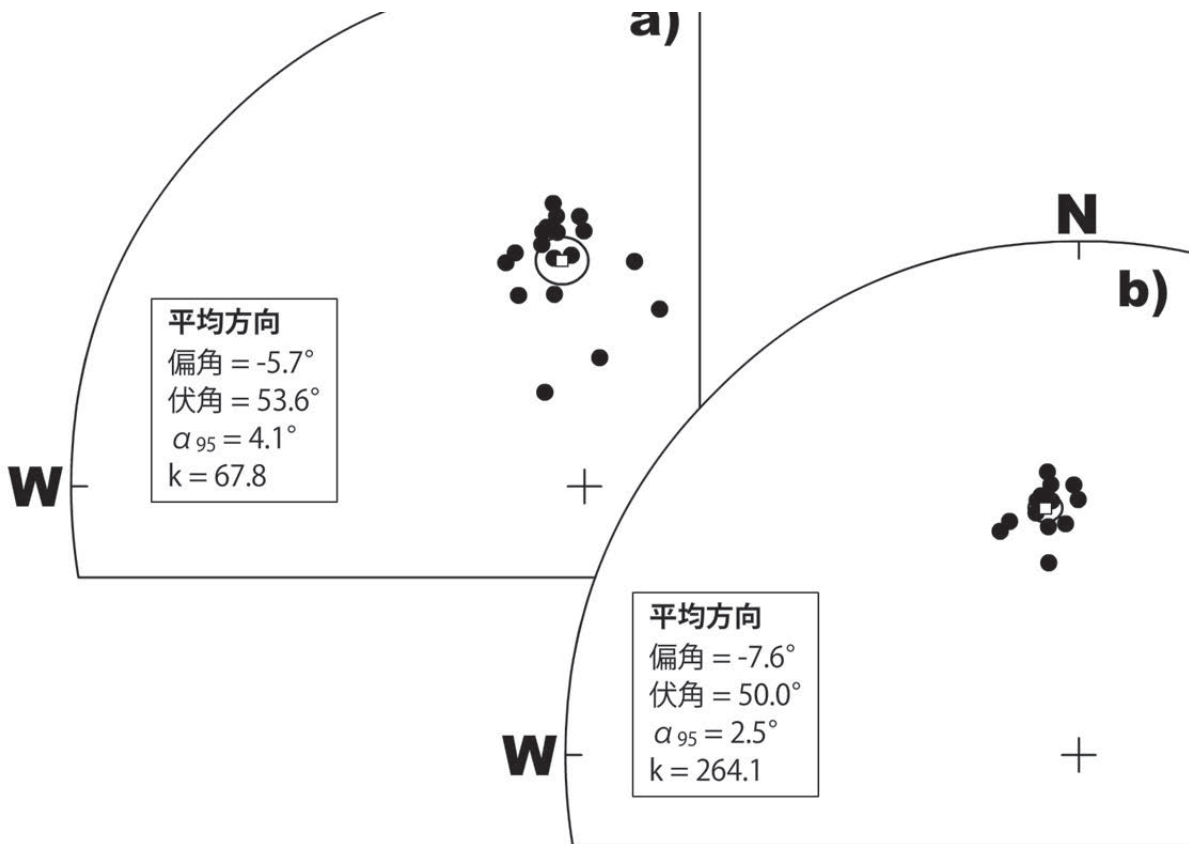


図 5 試片毎の磁化成分方向と平均方向(等面積投影図)

a)測定した全 19 試片の結果, b)5 試片を除外した結果

● : 磁化方向, □ : 平均方向, 楕円 : 95%信頼限界円(α_{95})

prep.)のデータが400年以降なので広岡曲線に頼るしかないが、この年代である可能性は考古地磁気学的には否定できない。450-550年と950-1100年については、2つの永年変化曲線のズレのため、95%信頼限界円の範囲と重ならない場合もあるが、どちらの年代の曲線も今回得られた考古地磁気方位と近く、これらの年代である可能性は同程度にあると考えられる。

考古地磁気データのみにからはこれ以上考察することができないが、考古学的観点から、583号住居跡は古墳時代後期(600年前後)の住居跡だと推定されている。このことを踏まえると、500±50年頃を考古地磁気年代として推定するのが合理的であろう。また今回のデータから考えると、広岡曲線よりもHatakeyama et al. (in prep.)で提案された曲線の方が、考古地磁気データをうまく説明できる。地磁気データには地域差があることが知られており(例えば中島・夏原, 1981), 広岡曲線が主に近畿地方のデータに基づいていることが一因かもしれない。今後、長野県のデータを増やすことで、さらに精度の高い考古地磁気年代推定が可能になると考えられる。

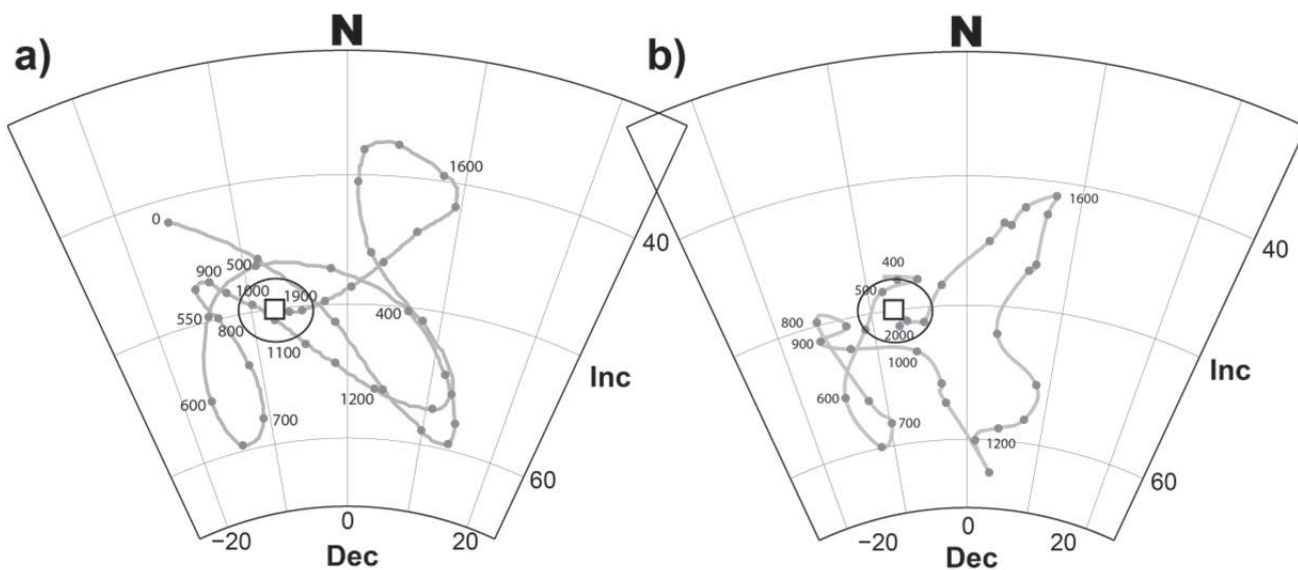


図6 地磁気永年変化曲線との比較(等面積投影図)

a)広岡曲線(Hirooka, 1971)との比較, b)Hatakeyama et al. (in prep.)との比較

図中の数字は永年変化曲線側の年代

□ : 今回得られた平均方向, 楕円 : 95%信頼限界円(α_{95})

謝辞

松本市教育委員会文化財課の竹原学係長と福沢佳典主事には試料採取を許可していただき、また試料採取の際には様々な便宜を図っていただいた。岡山理科大学の畠山唯達博士には現地で試料採取方法を教授いただいた。また永年変化曲線のデータを提供していただき、考古地磁気学に関して有益な助言をいただいた。信州大学理学部の田村理納氏、市瀬絵里氏には試料採取を手伝っていただいた。ここに記して厚く感謝いたします。

引用文献

Hatakeyama, T., H. Shibuya, K. Hirooka, H. Nakamura, A. Yoshihara, M. Yamamoto, M. Torii. A New Archeomagnetic Database and Geomagnetic Secular Variation Model for the past 2ky of Japan, (in prep.).

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan. Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.

- Kirschvink, J.L. (1980) The least-squares line and plane and the analysis of paleomagnetic data. *Geophys. J. Roy. Astron. Soc.*, 62, 699-719.
- 小玉一人 (1999) 古地磁気学. 東京大学出版会, pp. 248.
- 中島正志・夏原信義 (1981) 考古地磁気年代推定法. ニュー・サイエンス社, pp. 95.
- Watanabe, N. (1959) The direction of remanent magnetism of baked earth and its application to chronology for anthropology and archaeology in Japan: An introduction to geomagnetochemistry, *J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. V*, 2, pp. 188.

はじめに

出川南遺跡（長野県松本市芳野地内）は、犀川の支流である奈良井川と田川とに挟まれた沖積地に立地する。本遺跡では、これまでも発掘調査が実施されており、弥生時代から平安時代の集落であることが明らかとされている。今回の発掘調査は 21 次調査に相当し、古墳時代後期の竪穴建物址が確認されている。

本報告では、第 21 次調査で検出された竪穴住居址における木材利用等を検討するため、焼失住居として検出された 2 棟より出土した炭化材について、樹種同定を実施した。

1 試料

試料は、古墳時代後期の竪穴住居址 2 棟（576、583 号住居址）より採取された炭化物および炭化材等 25 点（ID2-1～3、ID3-1～22）である。炭化物試料は、583 号住居址の東壁付近の床面に認められた「しきもの？」とされる炭化物（ID2-1、ID2-2）と、同南東隅の床面に認められた炭化物（ID2-3）からなる。炭化材試料は、576 号住居址より 9 点（ID3-1～9）、583 号住居址より 13 点（ID3-10～22）が採取されている。

本分析では、試料の選択にあたりそれぞれ肉眼および実体顕微鏡等による観察を行っている。これらの観察所見より、583 号住居址の炭化物試料からは東壁付近の炭化物（ID2-2）より 7 点、南東隅の炭化物（ID2-3）より 2 点を選択している。また、576 号住居址の炭化材試料は調査所見も参考とし、棟木と想定されている炭化材 2 点（ID3-4, 5）と、これに直交するように出土した炭化材 2 点（ID3-6, 8）、さらに観察所見等から樹種が異なると判断された炭化材 1 点（ID3-2）の計 5 点、583 号住居址は種類構成の把握を目的として炭化材 5 点（ID3-10, 13, 14, 17, 20）を選択し、分析対象としている。なお、炭化材試料のうち、1 試料中に複数個体が認められた 576 号住居址の 2 点（ID3-4, 8）は、それぞれの個体を対象とした。試料の詳細および観察所見は結果とともに表 1 に示す。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

同定結果を表 1 に示す。576 号および 583 号住居址より出土した炭化物や炭化材は、針葉樹 1 分類群（サワラ）、広葉樹 4 分類群（カバノキ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節、コナラ属）およびイネ科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher）ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1 分野に 1-3 個。放射組織は単列、1-10 細胞高。

・カバノキ属（*Betula*）カバノキ科

散孔材で、道管は単独または 2-4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1-4 細胞幅、1-30 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

いずれも当年性の小枝と考えられる試料である。道管は、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・イネ科 (*Gramineae*)

試料は、微細片で薄く脆い。横断面では、2対4個の道管の外側に師部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は、維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

(1) 576号住居址

576号住居址より出土した炭化材には、カバノキ属とコナラ節の広葉樹2分類群が認められた。カバノキ属は山地に生育する落葉低木~高木であり、本地域の現植生を考慮すると、シラカンバ等の落葉高木に由来する可能性がある。コナラ節は、二次林等に生育する落葉高木である。また、これらの分類群の木材の材質は、いずれも重硬で強度が高いという特徴を有する。

棟木と想定された炭化材とこれに直交するように出土した炭化材は、いずれもコナラ節に同定されたことから、強度の高い木材の選択が推定される。なお、棟木と想定されている炭化材(ID3-4,5)とやや長軸方向

表1. 樹種同定結果

遺構名	試料名 (ID)	地点/名称	調査所見	仮番号	形状	径* (cm)	種類 (分類群)	
576号住居址	3-2	炭化物②	建築部材	-	分割材状 (楕円板状)		カバノキ属	
	3-4	炭化物④	建築部材 (棟木か?)	1	分割材状 (ミカン割~半裁状)	(4.0)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				2	分割材状 (ミカン割状)	(>7.0)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	3-5	炭化物⑤	建築部材 (棟木か?)	-	分割材状 (ミカン割状)	(5.5)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	3-6	炭化物⑥	建築部材	-	破片	-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
3-8	炭化物⑧	建築部材	1	分割材状 (ミカン割状)	(>8.5)	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
			2	分割材状 (ミカン割状)	(>2.0)	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
583号住居址	2-2	東壁しきもの?南側		1	芯持丸木	1.0	コナラ属(当年枝)	
				2	半裁状	1.7	コナラ属(当年枝)	
				3	芯持丸木	1.1	コナラ属(当年枝)	
				4	芯持丸木	0.3	コナラ属(当年枝)	
				6	芯持丸木	0.3	コナラ属(当年枝)	
				11	芯持丸木	0.4	コナラ属(当年枝)	
				12	芯持丸木	0.4	コナラ属(当年枝)	
	2-3	南東隅			1	破片	-	イネ科
					2	破片	-	イネ科
	3-10	炭化物①	建築部材	-	破片	-	サワラ	
	3-13	炭化物④	建築部材	-	分割材状 (ミカン割状)	(>5.5)	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	3-14	炭化物⑤	建築部材	-	分割材状 (ミカン割状)	(>9.5)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
3-17	炭化物⑧	建築部材	-	分割材状 (ミカン割状)	(>6.5)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節		
3-20	炭化物⑩	建築部材	-	分割材状 (ミカン割状)	(>6.0)	コナラ属コナラ亜属コナラ節		

*括弧内の数値は半径を示す。

を異にし、肉眼観察では断面が蒲鉾形の板状（柀目～追柀）を呈する炭化材（ID3-2）はカバノキ属であった。この炭化材の観察では平滑となる面が確認されており、他の試料とやや質感が異なる。また、583号住居址の樹種構成にも確認されていない樹種であり、その性格（用途）が注目される。

(2) 583号住居址

583号住居址の東壁付近より出土した「しきもの？」とされる炭化物（ID2-2）は、径数mmから約2cm程度の小径木が厚さ約2cmの範囲に集積しており、これらの配列方向はいずれも同一である状況が認められた。また、住居跡南東隅から採取された炭化物（ID2-3）は、炭化した稗とみられる植物遺体が多数認められ、いずれも配列方向を同一とするまとまりが面的に複数分布する状況が認められた。これらの炭化物試料は、当年生のコナラ属とイネ科に同定された。建築部材を対象とした調査では、屋根材（カヤ材）等にイネ科の稗や小径木が認められる事例が多い。なお、今回の炭化物試料では、イネ科の稗と小径木が混在する状況は確認できなかったものの、炭化物が採取された地点が住居址壁面に近いことや壁面付近を中心に建築部材と考えられる炭化材が多く出土している状況から、屋根材に由来する可能性がある。ただし、「しきもの」の可能性も否定できないため、上記した建築部材とされる炭化材試料との層位関係や住居址内における空間利用等を含めた評価も必要と考える。

一方、建築部材とされる炭化材には、サワラ、クヌギ節、コナラ節の3分類群が認められた。上述した576号住居址はコナラ節を主体としたのに対し、本住居址では針葉樹と広葉樹が利用されるという特徴が窺える。

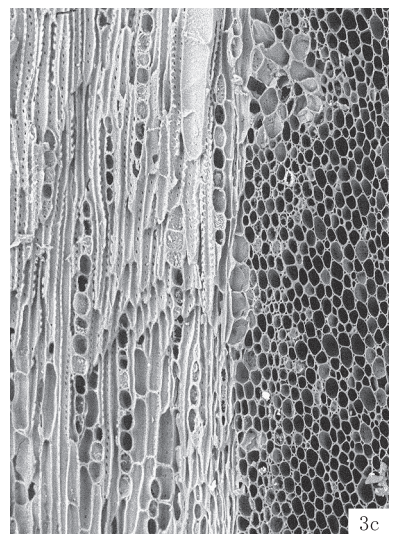
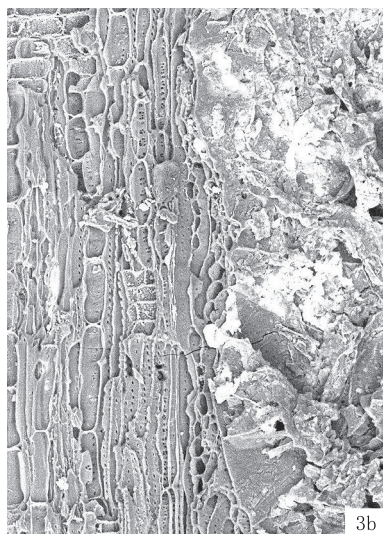
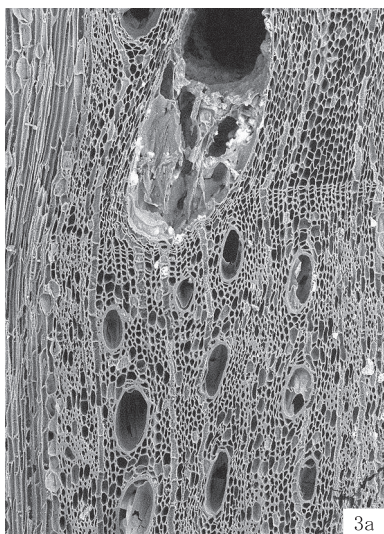
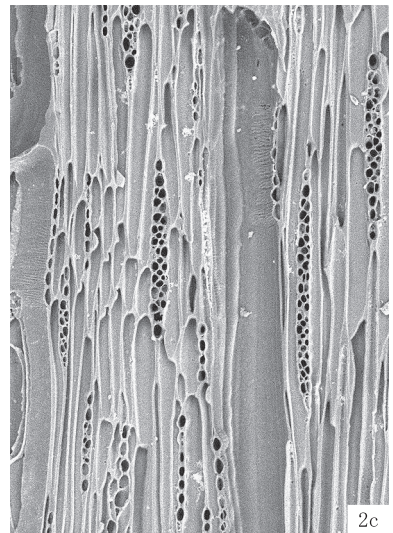
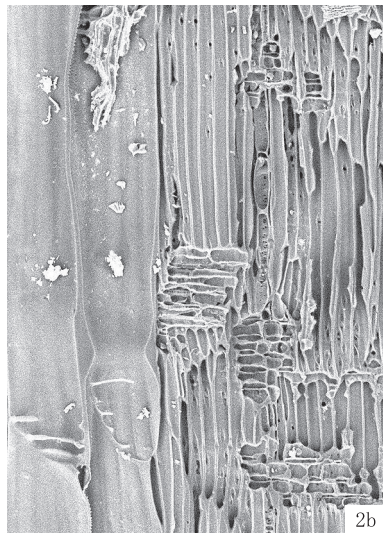
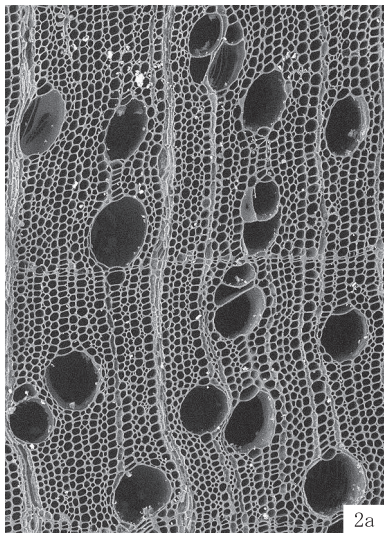
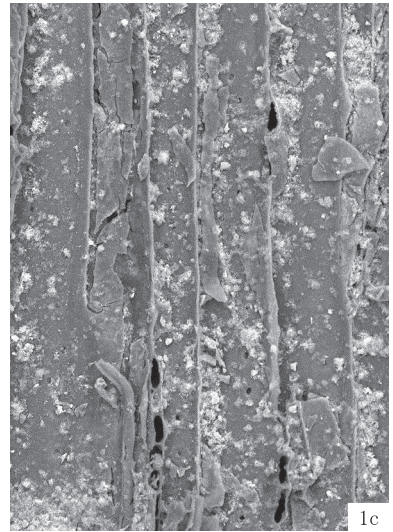
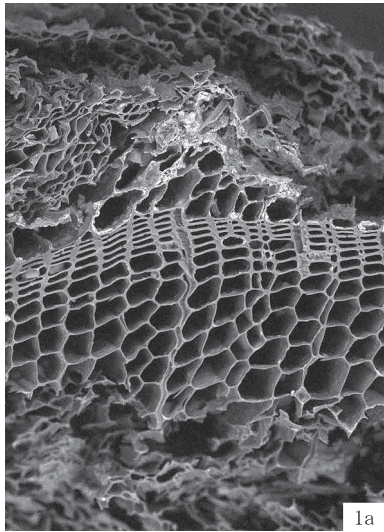
確認された分類群のうち、サワラは山地に生育する常緑高木であり、クヌギ節は二次林や河畔林に生育する落葉高木である。また、これらの木材の材質は、サワラは木理が通直で割裂性や耐水性が高く、クヌギ節は重硬で強度が高い。これらの状況から、重硬で強度が高い広葉樹材を主体とした木材利用が推定される。サワラについては、材質がクヌギ節やコナラ節とは異なるため、これらとは異なる用途や部位に利用された可能性がある。

なお、松本市域における古墳時代後期頃の建築部材を対象とした調査事例では、県町遺跡の古墳時代中期末～後期初頭とされる住居址にコナラ節、ヒノキが確認されている。また、松本盆地南部にある平出遺跡（塩尻市）の5世紀とされる住居址ではコナラ節とクヌギ節を主体として、クリ、ヤナギ属、キハダ、スギが確認されており（伊東・山田,2012）、クヌギ節やコナラ節が多く利用される傾向にある。今回の分析結果では、住居址間に樹種構成に若干の違いが認められるものの、クヌギ節やコナラ節を主体とするという点で同様の傾向が示唆される。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社,449p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.,2004,IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.,1989,IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

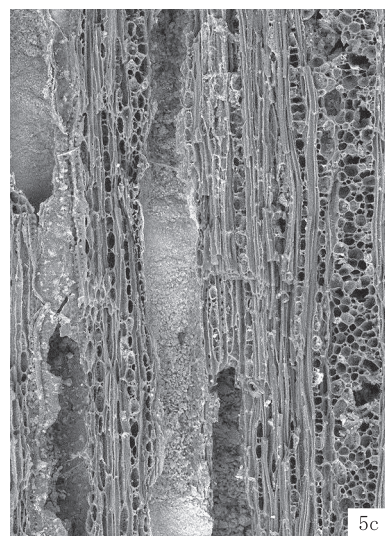
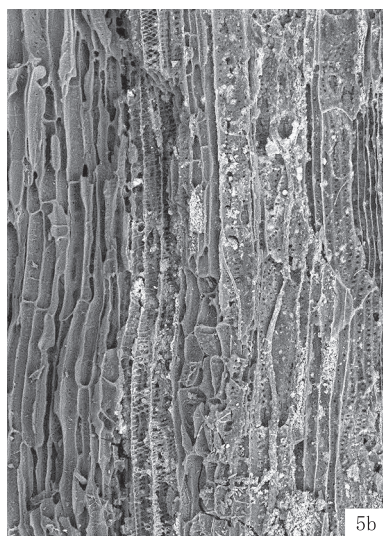
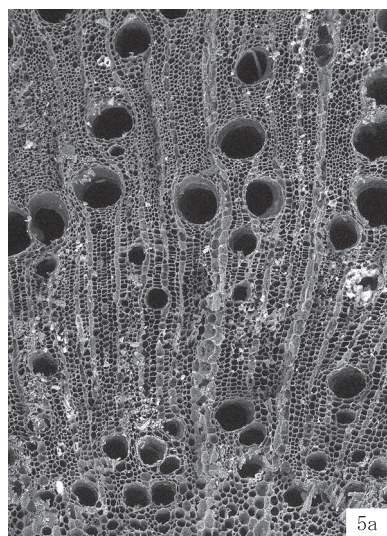
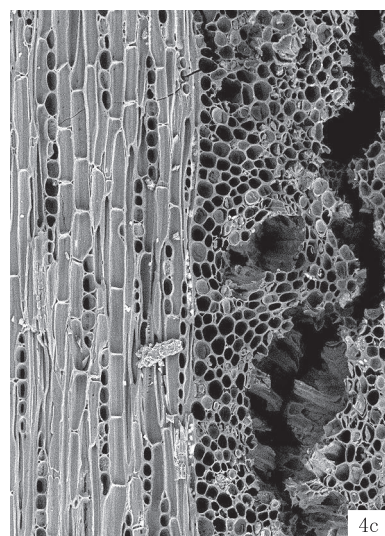
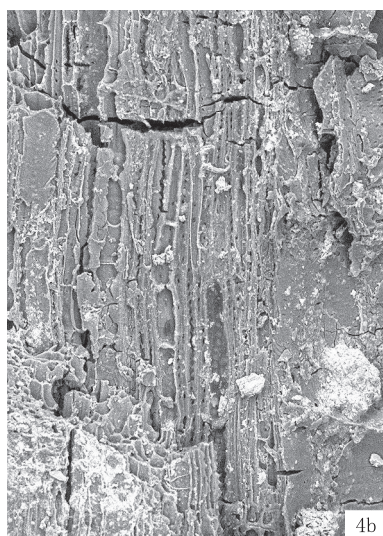
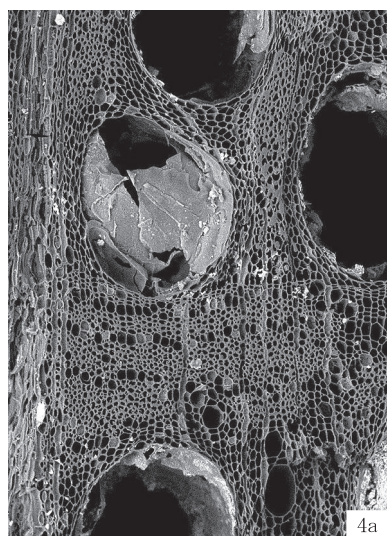
図版1 炭化材(1)



1. サワラ(583号住居址; ID3-10)
 2. カバノキ属(576号住居址; ID3-2)
 3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(583号住居址; ID3-14)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

 100 μ m: 2-3a
 100 μ m: 1a, 2-3b, c
 100 μ m: 1b, c

図版2 炭化材(2)



4. コナラ属コナラ亜属コナラ節(583号住居址; ID3-20)

5. コナラ属(583号住居址; ID2-2 仮番号12)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: a

100 μ m: b, c

写真図版

写真図版 1



572住 カマド周辺 遺物出土状況 (東から)



572住 カマド 遺物出土状況 (東から)



572住 カマド検出状況 (東から)



574住 礫出土状況 (北から)



574・588住 完掘状況 (西から)



576住 ベルト東壁土層 (東から)



576住 炭化材検出状況 (北から)



576住 遺物 (21・23) 出土状況 (南から)



576住 完掘状況 (西から)



576住 被熱礫 粘土出土状況 (北から)



577住 完掘状況 (北から)



577住 カマド 遺物出土状況 (北から)



579住 完掘状況 (南から)



581・582住 掘削状況 (北から)



581・582住 ベルト東壁土層 (北東から)



582住 調査区東壁土層 (西から)

写真図版 3



582住 カマド検出状況（東から）



582住 南半 住居内ビット検出状況（東から）



583住 焼土・炭化材検出状況（北から）



583住 南北ベルト東壁土層（北東から）



583住 南東隅 焼土・炭化材出土状況（東から）



583住 カマド検出状況（東から）



583住 釦 (15) ・炭化材出土状況（北から）



583住 耳環 (14) 出土状況（東から）



583住 遺物出土状況（北東から）



583住 遺物（51・53・61）出土状況（北から）



583住 P1遺物（69・75）出土状況（北から）



583住 南西隅 遺物出土状況（北東から）



583住 遺物（78）出土状況（東から）



583住 遺物（58）出土状況（南から）



583住 東壁際 繊維状炭化材検出状況（西から）



同左 部分拡大

写真図版 5



583住 カマド周辺 遺物出土状況
(東から)



583住 作業風景 (東から)



調査区完掘状況 (東から)



3 (572 住)



6 (572 住)



10 (572 住)



9 (572 住)



17 (574 住)



11 (573 住)



20 (576 住)



21 (576 住)

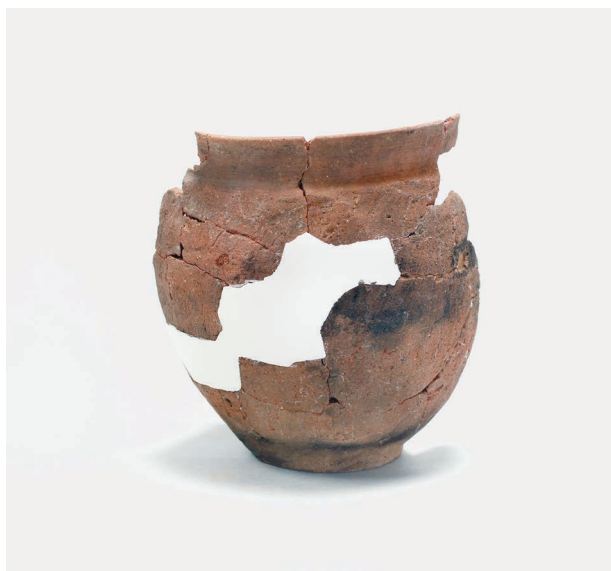
写真図版 7



23 (576 住)



31 (579 住)



33 (579 住)



34 (579 住)



35 (581 住)



38 (581 住)



39 (581 住)



40 (582 住)



44 (582 住)



49 (583 住)



50 (583 住)



51 (583 住)



53 (583 住)



55 (583 住)



62 (583 住)



63 (583 住)

写真図版 9



56 (583 住)



57 (583 住)



65 (583 住)



66 (583 住)



71 (583 住)



74 (583 住)



75 (583 住)



77 (583 住)



76 (583 住)



78 (583 住)



83 (583 住)



82 (583 住)



84 (包含層)



第 572 号住居址出土遺物



第 574 号住居址出土遺物



第 576 号住居址出土遺物



第 577 号住居址出土遺物



第 579 号住居址出土遺物



第 581 号住居址出土遺物



第 582 号住居址出土遺物

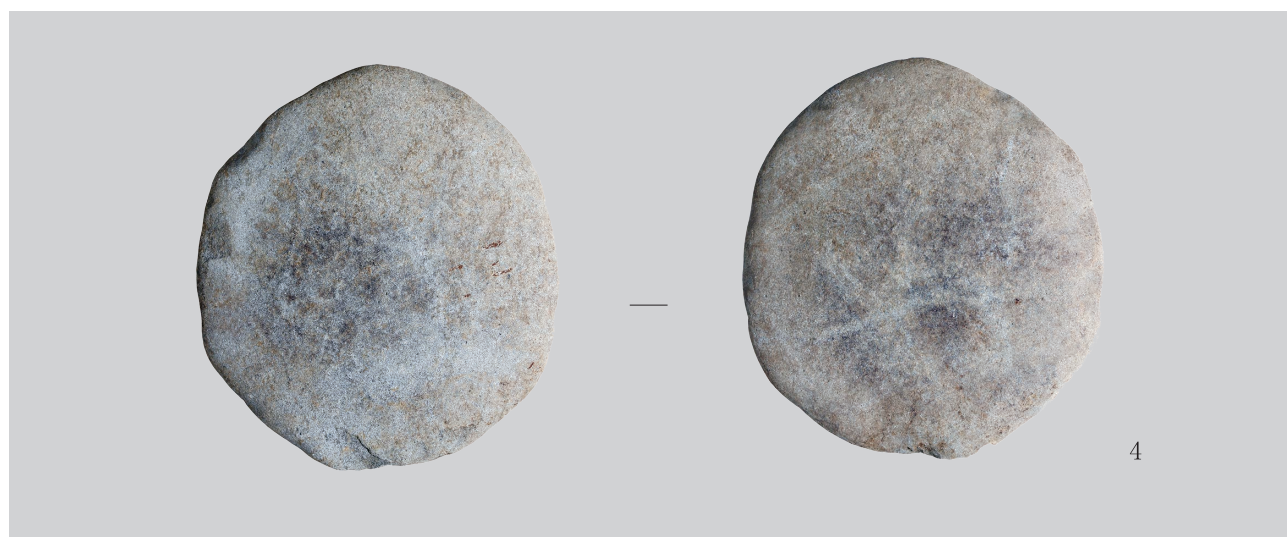


第 583 号住居址出土遺物 (1)



第 583 号住居址出土遺物 (2)





報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし いでがわみなみいせき だい21じはつくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 出川南遺跡 第21次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.212							
編著者名	原田健司、福沢佳典							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管:松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2014(平成26)年3月31日 (平成25年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いでがわみなみ 出川南	ながのけんまつもとし 長野県松本市 よしの 芳野1018番1	20202	177	36度 12分 24秒	137度 57分 54秒	H25.4.22 ～ H25.6.28	341㎡	県営住宅 南松本団地 ・市営住宅芳 野町団地の 集会所建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
出川南	集落跡	古墳 ～ 奈良	・堅穴住居址 12軒 古墳時代後期:9軒 奈良時代:3軒	・土坑 1基 ・ピット 8基	〔土器〕 土師器 須恵器 〔鉄製品〕 刀子 鎌 鏃 耳環 馬具(轡) 〔石製品〕 砥石 台石 石核 剥片	・古墳時代後期～奈良時代前期の集落址の一部を調査した。堅穴住居址が集中して分布し、掘立柱建物址は存在しない。また、1辺約8.6mの古墳時代後期の大型住居址を検出した。焼失住居で、多量に土器が出土する中に、馬具・耳環など、堅穴住居址からの出土例が少ないものがみられる。集落の小単位における中心的な住居址であったと考えられる。		
要約	<p>・出川南遺跡は松本市街地南部の奈良井川と田川・牛伏川に挟まれた合流扇状地上に位置する。現在までに23次にわたる発掘調査が行なわれており、古墳時代後期から平安時代にかけての比較的規模の大きな集落が営まれていたことがわかっている。また、遺跡範囲内には古墳時代中期後半の埴輪が伴う円墳3基がある。</p> <p>・今回の調査は県営住宅南松本団地・市営住宅芳野町団地の集会所建設工事に伴う緊急発掘として実施された。発見された遺構の中心は堅穴住居址で、古墳時代後期9軒、奈良時代3軒が一部に重複を伴って存在する。</p> <p>古墳時代後期の住居址は7世紀前後～後半と考えられ、北に近接する第4次調査地点でも住居数が最も多く、居住域が拡大する時期である。なかでも、第583号住居址は大型住居址・焼失住居・豊富で遺物量で特殊遺物も含む点で、他の住居址とは性格が異なるものであったと考えられる。今回の調査範囲では掘立柱建物址や区画溝のような遺構は確認できなかったが、583住を中心とする小単位の存在を想定したい。</p> <p>・奈良時代の住居址3軒は8世紀初頭～半ばと考えられる。周辺の過去の調査成果を踏まえると、奈良時代の住居址は4次調査地点には1軒もなく、遺跡の南西隅へ移動・分布している。本次調査の住居址も同様のグループと考えられる。</p> <p>・今回の調査範囲では、狭い面積ながらも古墳時代後期、7世紀中葉～後半の住居址が集中して検出された。遺構密度も高く、出川南遺跡の古墳時代後期集落の拡大期にあたる。4次調査地点に集落の中心があると考えられるが、本調査地点も含めた大きな集落と考えられ、今後、さらに周辺の調査が進むことによって、居住域の分布や各種遺構の配置などから当時の大集落の姿が復元されていくと考えられる。</p>							

松本市文化財調査報告No.212
長野県松本市
出川南遺跡
－第21次発掘調査報告書－

発行日 平成26年3月31日
発行 松本市教育委員会
〒390-0874
長野県松本市丸の内3番7号
印刷 アサカワ印刷株式会社
